

Quest[®] Migrator for Notes to Exchange 4.13

シナリオ ガイド

MNE シナリオ ガイド

更新 - 2016 年 3 月
ソフトウェア バージョン - 4.13

© 2016 Quest
ALL RIGHTS RESERVED.

本書には、著作権によって保護されている機密情報が記載されています。本書に記載されているソフトウェアは、ソフトウェア ライセンスまたは機密保持契約に基づいて提供されます。本ソフトウェアは、当該契約の条項に準拠している場合に限り、使用または複製することができます。本書のいかなる部分も Quest の書面による許可なしに、購入者の個人的な使用以外の目的で、複写や記録などの電子的または機械的ないかなる形式や手段によっても複製または転送することはできません。

本書には、Quest 製品に関連する情報が記載されています。明示的、黙示的、または禁反言などを問わず、本書または Quest 製品の販売に関連して、いかなる知的所有権のライセンスも付与されません。本製品の使用許諾契約の契約条件に規定されている場合を除き、Quest はいかなる責任も負わず、製品に関連する明示的、黙示的または法律上の保証（商品性、特定の目的に対する適合性、権利を侵害しないことに関する黙示的保証を含む）を否認します。Quest は、損害が生じる可能性について報告を受けたとしても、本書の使用、または不使用から生じるいかなる、直接的、間接的、必然的、懲罰的、特有または偶発的な障害（無期限、利益の損失、事業中断、情報の紛失も含む）に対しても責任を負わないものとします。Quest は、本書の内容の正確性または完全性について、いかなる表明または保証も行わず、通知なしにいつでも仕様および製品説明を変更する権利を有します。Quest は、本書の情報を更新する一切の義務を負いません。

本文書の使用に関してご不明な点がございましたら、下記までお問い合わせください。

Quest
Attn: LEGAL Dept
5 Polaris Way
Aliso Viejo, CA 92656

日本国内および海外の事業所の情報に関しては、弊社の Web サイト (quest.com) を参照してください。


商標

Quest および Quest のロゴは、Quest およびその関連会社の商標です。商標や商品名を有する事業体、またはそれらの商品を表すために、他の商標および商品名が本書で使用されている場合があります。Quest は、他社の所有する商標および商品名の所有権を一切否認します。

Microsoft、Windows、Outlook、および Active Directory は、米国およびその他の国における Microsoft Corporation の登録商標です。Office 365 は、米国およびその他の国における Microsoft Corporation の商標です。IBM、Lotus、Lotus Notes、および Domino は、世界各地の管轄区で登録されている International Business Machines Corporation の登録商標です。

凡例

 **注意**：注意アイコンは、指示に従わなかった場合に、ハードウェアの損傷やデータの損失につながる可能性があることを表しています。

 **警告**：警告アイコンは、物的損害、人身傷害、または死亡事故につながるおそれがあることを示します。

 **重要な注、注、ヒント、モバイル、ビデオ**：情報アイコンは、サポートされる情報を示します。

目次

MNE ドキュメントについて	5
この『管理ガイド』について	5
MNE ドキュメント セットについて	5
その他の情報源	6
シナリオの概要	7
MNE シナリオと本ガイドについて	7
独自型 Exchange への移行	8
Microsoft Office 365 への移行	11
オフライン移行	14
段階的な移行	16
デスクトップごとの移行のサイレント モード オプション	17
独自型 Exchange への移行	18
独自型 Exchange ターゲットへの移行	18
移行前に必要な準備	18
ステップ 1 : ターゲット Exchange 環境のインストールと設定	20
ステップ 2 : すべてのシステム要件を満たすことの確認	20
ステップ 3 : MNE ソフトウェアのインストールと設定	20
ステップ 4 (ドメイン区別によるメール ルーティングの場合) : メール ルーティングドメインの設定	24
ステップ 5 (省略可能) : 共存方針の設定	25
ステップ 6 (Exchange 2010 以降のターゲットの場合のみ) : 調整ポリシーの設定	25
ステップ 7 : Notes 情報の検出	26
ステップ 8 : Notes ディレクトリ データのエクスポート	26
ステップ 9 : SQL データベース内のエクスポートされたデータの確認と検証 / 変更	26
ステップ 10 : ユーザー コレクションの定義	27
ステップ 11 : メール有効ユーザーによる Active Directory のプロビジョニング	28
ステップ 12 : ユーザー当たりの移行量の評価	30
ステップ 13 (または適切な時期に) :	
受信外部メールの Exchange へのリダイレクト	30
ステップ 14 (必要な場合) :	
ローカル データを集中管理されている場所に複製またはコピー	31
ステップ 15 (メールルーティングにスマートホストを使用する場合) : スマートホストの設定	31
バッチ移行プロセス	32
ステップ 1 : Active Directory と Domino ディレクトリの同期	32
ステップ 2 : MNE の SQL データの更新	33
ステップ 3 : このユーザーコレクションのメンバーシップの再評価と (必要な場合は) 調整	33
ステップ 4 : Exchange メールボックスの作成と Notes 管理操作の実行	34
ステップ 5 : Notes から Exchange へのメール転送とユーザーデータの移行	35
ステップ 6 : .pst ファイルの配布 (存在する場合)	35
移行後のアクティビティ	36
ステップ 1 : Exchange への Notes グループのプロビジョニング	36
ステップ 2 (省略可能) : 継続的な DirSyncs の設定	36
ステップ 3 : メールルーティングの更新	37

ステップ 4 : 移行後の「クリーンアップ」	37
Microsoft Office 365 への移行	38
移行前に必要な準備	38
ステップ 1 : Office 365 アカウントの作成	38
ステップ 2 : すべてのシステム要件を満たすことの確認	38
ステップ 3 (ローカル Active Directory からプロビジョニングする場合) :	
ローカル Active Directory のインストールと設定	39
ステップ 4 : MNE のインストールと設定	40
ステップ 5 (ドメイン区別によるメールルーティングの場合) : Exchange 用メールルーティングドメインの設定	46
ステップ 6 (Quest の CMN と共存する場合のみ) :	
CMN コンポーネントのインストールと設定	47
ステップ 7 : Notes 情報の検出	48
ステップ 8 : Notes ディレクトリ データのエクスポート	48
ステップ 9 : エクスポートしたデータの確認と (必要に応じて) 変更	48
ステップ 10 : ユーザー コレクションの定義	48
ステップ 11 (ローカル Active Directory から Office 365 をプロビジョニングする場合) :	
ローカル Active Directory のプロビジョニング	49
ステップ 12 : ローカル Active Directory からの Office 365 のプロビジョニング	51
ステップ 13 : ユーザー当たりの移行量の評価	51
ステップ 14 (必要な場合) :	
エンド ユーザーのローカル データを一元管理場所にコピー	52
ステップ 15 (メールルーティングにスマートホストを使用する場合) : スマートホストの設定	52
バッチ移行プロセス	53
ステップ 1 (省略可能) : Directory Connector の再実行	55
ステップ 2 : MNE の SQL データの更新	55
ステップ 3 : このユーザーコレクションのメンバーシップの再評価と (必要な場合は) 調整	55
ステップ 4 : Office 365 メールボックスの作成	56
ステップ 5 : MNE の Data Migration Wizard の実行による、Notes から Exchange へのメール転送の設定とデータの移行	57
ステップ 6 : .pst ファイルの配布 (存在する場合)	57
移行後のアクティビティ	58
ステップ 1 : Notes グループの Office 365 へのプロビジョニング	58
ステップ 2 (省略可能) : 継続的なディレクトリ共存の設定	58
ステップ 3 : メールルーティングの更新	59
ステップ 4 : 移行後の「クリーンアップ」	59
SSDM (デスクトップごと) 移行	60
SSDM を使用する時期と理由	60
SSDM を実行する前に	60
SSDM の設定	62
デスクトップごとの移行のサイレント モード オプション	65
Quest について	72
Quest へのお問い合わせ	72
テクニカルサポートリソース	72
索引	73

MNE ドキュメントについて

この『管理ガイド』について

この『シナリオガイド』では、Quest の Migrator for Notes to Exchange のさまざまな管理者コンポーネントの操作方法を、各ツールの画面ごとのフィールド定義やアプリケーションの注意事項を示しながら説明します。このガイドは、16 の章と 1 つの付録から構成されています。

- **第 1 章 : Notes Migration Manager** : 各画面の説明とアプリケーションの注意事項を示し、管理者向け中央コンソールの基本的な操作原理について概説します。
- **第 2 ~ 11 章 (各ウィザード)** : Notes Migration Manager から起動可能なすべてのウィザード アプリケーションについて、操作手法と画面ごとのアプリケーションの注意事項を示します。ウィザードごとに章を分けて説明します。
- **第 12 章 : Log Viewer** : Quest プログラムのログ ファイルの表示や内容確認を簡単にする、Log Viewer ユーティリティの操作手法とアプリケーションの注意事項を示します。
- **第 13 章 : Qsched.exe タスクスケジューリング設定ユーティリティ** : MNE の *qsched.exe* ユーティリティの操作説明とアプリケーションノートです。このユーティリティは MNE の SQL データベースを定期的にチェックし、最終チェック以降にいずれかのタスクのスケジュールが設定されているかどうかを確認して、検出されたタスクを実行します。
- **第 14 章 : SSDM Scheduling Administration Utility** : エンドユーザーによる Self-Service Desktop Migrator (SSDM) の実行を制御してボトルネックの処理を回避できるようにする、SSDM Scheduling Administration Utility の操作手法とアプリケーションの注意事項を示します。
- **第 15 章 : Office 365 Account Pool Utility** : Microsoft の制限による問題を回避するための、複数の Office 365 管理移行アカウントの同時実行の調整に使用する、Account Pool Utility の操作手法と注意事項などを説明しています。
- **第 16 章 : MNE 用の PowerShell コマンドレット** : MNE の数十件の PowerShell コマンドレットについて、目的、機能、パラメータなど、プロセスの自動化に役立つ関連情報を説明するリファレンスリストです。
- **付録 A : 操作手法** MNE の移行に伴う特定のタスクの手順説明です。

この『シナリオガイド』は、製品をインストールしたり、管理ツールを使用したり、移行プロジェクトのプランニングに携わったりするネットワーク管理者、コンサルタント、アナリスト、およびその他の IT 専門家を対象としています。

MNE ドキュメント セットについて

この『シナリオガイド』は、Quest の Migrator for Notes to Exchange 製品のさまざまな側面を説明するドキュメントの 1 つです。以下のようなガイドが用意されています。

- **クイックスタートガイド** : MNE の基本目的、コンポーネントと機能、一般的な使用方法のケーススタディなどの、製品の概要と紹介を記載しています。また、ソフトウェアのダウンロードおよびインストールの方法についても説明しています。
- **移行前プランニングガイド** : 移行プロジェクトを開始する前に、検討 / 対処する必要がある、戦略的および戦術的事項をまとめたチェックリストです。付録では、移行プロセスにおける既知の制限についても説明しています。
- **シナリオガイド** : 異なるターゲット環境への移行、およびその他変数や基本設定の移行など、最も一般的な移行シナリオについて説明しています。各シナリオでの MNE ツールや機能の使用方法を説明したプロセス手順やフローチャートが記載されています。
- **管理ガイド** : 運用上の詳細、アプリケーションに関する注意事項、および MNE の管理者コンポーネントの、各画面のフィールドの説明が記載されています。
- **Self-Service Desktop Migrator ユーザーガイド** : MNE のコンポーネントである Self-Service Desktop Migrator (SSDM) の操作手法とアプリケーションの注意事項を記載しています。『SSDM ユーザーガイド』は、管理者がデスクトップ用プログラムを実行するエンドユーザーへ個別に配布できるように、独立した PDF ドキュメントとして提供されます。

- **プログラムパラメータリファレンス** : Task Parameter と Global Default 内のすべての MNE プログラム パラメータ (およびその有効な値)、およびそれを使った各種プログラムの動作の制御方法が記載されています。
- **オンラインヘルプ** : MNE のすべてのウィザードおよびその他のコンポーネント アプリケーションの、フィールド定義やアプリケーションの注意事項に関する状況依存のヘルプです。

SSDM の『[ユーザーガイド](#)』以外のすべてのドキュメントは、製品を使用、その管理ツールを使用、または移行プロジェクトのプランニングに携わるネットワーク管理者、コンサルタント、アナリスト、およびその他の IT 専門家を対象としています。一般的に、『[移行前プランニングガイド](#)』および『[シナリオガイド](#)』では製品の概念的、理論的な側面を説明し、『[管理ガイド](#)』では実践的な情報、画面ごとの説明、フィールドに関する注記などを提供します。また、『[SSDM ユーザーガイド](#)』は Self-Service Desktop Migrator コンポーネントを使用するエンドユーザーまたは管理者を対象としています。

- ① **注** : Quest は、すべての管理者が『[クイックスタートガイド](#)』、『[移行前プランニングガイド](#)』の順にお読みになり、その後『[シナリオガイド](#)』の最初の章を参照することをお勧めします。これらの情報を使って、実際の移行プロセスを開始する前に、詳細な書面による移行計画を策定することができます。実際に移行プロセスを開始する準備が整ったら、『[シナリオガイド](#)』のプロセスの説明と注意事項、およびこの『[管理ガイド](#)』に記載されている操作の詳細を必要に応じて参照してください。

その他の情報源

その他の Quest マニュアル

Migrator for Notes to Exchange の詳細については、次のマニュアルを参照してください。

- **Quest MessageStats Report Pack for Lotus Notes Migration ユーザーガイド** : Quest MessageStats Report Pack for Lotus Notes Migration の紹介、インストール、および操作に関する説明が記載されています。

MessageStats Report Pack for Lotus Notes Migration は、独立した Quest 製品ですが、MNE にバンドルされ、MNE の Autorun アプリケーションからインストールすることができます (前述の『[ユーザーガイド](#)』を含む)。

Quest の *Windows Management and Migration* オンライン コミュニティ

Quest Windows Management and Migration Community は、次の点に関する問題を話し合う専用の対話型のオンラインコミュニティです。

- 電子メール、ID、アプリケーションの Windows Exchange プラットフォーム (業務用および Office 365 のようなホストされた Exchange プラットフォームを含む) への移行。Exchange、GroupWise、Notes からの移行を含みます。
- Active Directory の移行。
- Notes アプリケーションおよび Exchange パブリック フォルダから Sharepoint への移行。
- 共存戦略とツール。

このコミュニティは Quest Migration の専門家とユーザーの協力関係を促進することを目的に作成されたものです。このコミュニティを通じて :

- 製品リリースやベータ版に関する情報を誰よりも早く入手できます。
- Quest 製品のリーダーや移行および共存の専門家との交流。
- ディスカッション フォーラムへの参加、洞察やアイデアの共有をはじめ、一般的な質問に回答してもらうことができます。

フォーラムやライブラリは自由に参照できますが、コミュニティの利点をフルに活用し、新しいスレッドを立て、他のユーザーからのメッセージに応答し、ドキュメントやダウンロードの評価を行うには、コミュニティに加入する必要があります。すでに Quest アカウントをお持ちの場合、または他の Quest コミュニティのメンバーである場合は、サインインするだけです。サインインおよび加入機能はどちらも、[Quest Windows Management and Migration Community](#) のページの右上にあるリンクから利用することができます。

シナリオの概要

- MNE シナリオと本ガイドについて
- 独自型 Exchange への移行
- Microsoft Office 365 への移行
- オフライン移行
- 段階的な移行
- デスクトップごとの移行のサイレント モード オプション

MNE シナリオと本ガイドについて

このガイドは、さまざまな移行プロジェクトにおいて MNE がどのように使われているのかを表す、操作手順について説明しています。ここで説明している手順には、MNE 外で行われるステップも含まれています。Notes や Exchange で行われる作業、および Quest の CMN などの共存ツールについても取り上げています。環境やソリューションに応じて、これらの各種ツール / 作業を利用する順序や連携が重要になってきます。一般的なシナリオに共通の作業順序を表したフロー チャートも用意されています。

実質的にすべての移行が、同様の基本的なプロセスに従って実施されます。ただし、各組織の環境やニーズに応じて、さまざまなバリエーションが存在しています。これらを総称してシナリオと呼んでいます。作業手順のバリエーションの大半は、以下のような事項によって決まります。

- **移行先 (Exchange ターゲット タイプ) :**
 - **独自型 Exchange ネットワーク**

独自型 Exchange 環境とは、移行を実施する組織がハードウェアとソフトウェアを完全に自社で保有、管理している環境です。通常、これは、Notes ソースと同じ施設内にあるか、高速ネットワーク ケーブルで接続できる範囲内にある、ローカルの Exchange ネットワークです。ただし、独自型 Exchange ターゲットが、Notes ソースとは別の場所に存在していることもあります。
 - **ホスト型 Exchange プラットフォーム (クラウド)**

ホスト型 Exchange プラットフォームは、サードパーティがハードウェアとソフトウェアを保有、管理する環境です。ホスト型環境を提供するサードパーティは、サービスとしてディスクへのアクセスや Exchange ソフトウェアの機能を販売 / 提供します。このサービス モデルは、クラウドコンピューティングとしても知られています。ホスト型 Exchange への移行の大部分が Microsoft の Office 365 への移行になります。
- **既存のローカル Active Directory の移行前状態 (ある場合) :** 移行プロセスの一部は、ログインおよびセキュリティ目的ですでにローカル Active Directory を導入、稼働しているかどうか、また導入している場合はオブジェクトが Active Directory ですすでにプロビジョニングされているかどうかによって異なります。
 - **独自型 Exchange に移行する場合 :** Active Directory をすでに導入、稼働していますか？既存の Active Directory がすでにプロビジョニングされている場合、そのオブジェクトはすでにメール有効またはメールボックス有効になっていますか？またはどちらも有効になっていないですか？
 - **Office 365 に移行する場合 :** ホスト型環境のプロビジョニングに独自型ローカル Active Directory を使用しますか、また使用する場合は移行後もローカル Active Directory をアクティブにしますか？このようなプロビジョニング方法では、シングル サインオン (ID フェデレーション) が可能になります。Office 365 サービスにアクセスするユーザーは、ローカル Active Directory にアクセスする場合と同じ企業認証情報 (ユーザー名とパスワード) を使用することができます。または、

ローカル Active Directory を使用することなく MNE を使用して、Notes/Domino ソースから直接 Office 365 をプロビジョニングすることもできます。

ターゲット タイプと既存のローカル Active Directory の状態（ある場合）の組み合わせによって、さまざまな移行シナリオが考えられます。この『シナリオガイド』では、これらのすべての組み合わせを取り上げており、それぞれの移行プロセスの概要をまとめています。


- **独自型 Exchange への移行：**
 - 既存の Active Directory がない（または Active Directory オブジェクトがまだ存在していない）。
 - 既存の Active Directory に AD オブジェクトが存在している。
- **Office 365 への移行：**
 - ローカル Active Directory から Office 365 をプロビジョニングする。
 - Notes/Domino ソースから直接 Office 365 をプロビジョニングする。

また、3 種類の特別な場合に関するシナリオについても説明しています。これらの特別な状況は、上記のいずれかのシナリオとの組み合わせで発生します。

- **オフライン移行：**以前に Notes から抽出してあった Notes ソースデータを、直接 Exchange ターゲットに移行する移行戦略です。このオプションは、ソースサーバとターゲットサーバを同時に MNE に接続できない、または接続することが非現実的で、データをソースからターゲットに直接コピーできないような場合にも対処することができます。
- **段階的な移行オプション：**最新のソースデータ以外のソースデータを Exchange に「事前移行」して、ユーザーはアクティブな状態で Notes に残しておく移行方法です。この方法では、残りの Notes データ（はるかに少量のデータ）を非常に短時間で移行できます。ユーザーは最終的な「切り替え」移行時に移行します。移行期間中、ユーザーは引き続き Notes でメールの送受信やカレンダーの管理を行い、その間に古いデータが Exchange に移行されます。最終的な切り替えを 1 日または休業日に完了できるような場合は、この戦略を利用すればメール、予定表、および空き時間情報を共存させる必要はありません。
- **サイレント モード オプション：**MNE の SSDM（デスクトップごとの移行アプリケーション）の一部またはすべての画面を非表示にして、事前設定された .ini ファイルに保存された値から必要な入力値を取得する方法です。この方法では、エンドユーザーの介入はほぼ不要になります。

このガイドの第 2 章と 3 章では、すべてのシナリオの手順を詳細に説明しています。移行プロセスの基本的な手順はすべて同じですが、状況やニーズに応じて多少の違いはあります。ここでは、ほとんどの状況に適合する 2 つの標準的な手順を記載しています。1 つは独自型 Exchange への移行手順（第 2 章）、もう 1 つは Office 365 への移行（第 3 章）です。

当然ながら、ニーズや基本設定に応じて省略可能な手順や条件によって適用可能な手順が含まれています。これらの手順は、次のような「If」アイコンで明示されています。

 **条件付きステップ：**条件付きステップは、手順の説明（第 2 章と第 3 章）内に記載されており、この分岐矢印アイコンで表されています。

第 4 章は、デスクトップごとの移行に関連する管理作業と検討事項について説明しています。これらの作業は、ニーズに応じてバッチ移行とともに行われる場合も、単独で行われる場合もあります（また、使用されない場合もあります）。

MNE 移行前の準備作業とバッチ移行プロセスは、プライマリ ターゲット タイプ（独自型 Exchange またはホスト型（Office 365））に応じて、それぞれ 2 つのフローチャートで表されています。フローチャートは最初の章に、プロセスの紹介と概要を表す目的で記載されています。また、第 2 章と第 3 章にも、参考情報として同じように記載されています。

このガイドの各プロセスの手順は、簡単なチェックリストの役割も果たしています。そのため、操作の詳細や MNE コンポーネントの各画面のフィールドの説明は記載されていません。『MNE 管理ガイド』の参照先の章やセクションが記載されていますので、詳細はそちらを参照してください。

独自型 Exchange への移行

ここで、**独自型 Exchange 環境**とは、移行する組織がハードウェアとソフトウェアを完全に管理している環境を表しています。通常、独自型 Exchange サーバーは、ソース Notes 環境と同じ場所にありますが、別の場所に配置されているケースもあります。

独自型 Exchange に移行する場合、手順内の一部のステップは、既存の Active Directory に存在するオブジェクトの状態によって異なります。ログインおよびセキュリティ上の目的で、すでに組織に Active Directory が導入されていることもあります。Active Directory 内にすでにユーザー アカウントが存在している場合、MNE はそれらのオブジェクトを使って環境内の同じ認証情報とセキュリティを保持することができます。また、Active Directory オブジェクトはメール有効およびメールボックス有効でないと、それらのユーザーのデータを移行することはできません。(Exchange がオブジェクトに対するメッセージを受け付けることができる場合、そのオブジェクトは「メール有効」になります。オブジェクト レコードには、メールをルーティングするための、転送先アドレスが含まれています。オブジェクトが Exchange 内にアクティブなメールボックスを保有している場合にのみ、そのオブジェクトはメールボックス有効になります。)

ターゲット Active Directory がまだインストール / 設定されていない場合、または移行する Notes ユーザーがまだターゲット Active Directory にプロビジョニングされていない場合は、移行前の準備作業に、ターゲット Exchange 環境をインストール / 設定し、Active Directory オブジェクトをプロビジョニング、メール有効にするための、オプションのステップが含まれます。

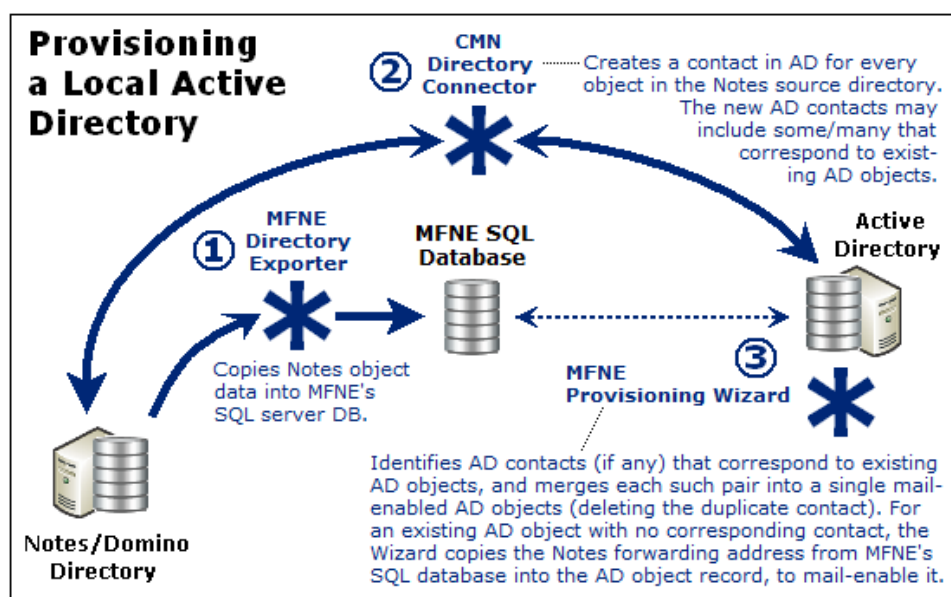
① **注:** Exchange では、Exchange メールボックスを持っているユーザーの空き時間情報クエリを外部サーバーに送信することはできません。クエリは、自分の Exchange メールボックスに対してのみ送信できます。そのため、未移行の Notes ユーザーに対する空き時間情報クエリは、そのユーザーが Exchange メールボックスを保有していない場合にのみ機能します。

多くの組織は移行期間中に CMN の Free/Busy Connector を使用するため、移行前の準備作業ではメールボックスを持たないメール有効オブジェクトを、Active Directory にプロビジョニングします。メール転送のためにオブジェクトはメール有効でなければなりませんが、当初はメールボックスは必須ではありません。そこで、ここではバッチ移行プロセス (ユーザー バッチ当たり) でユーザーを移行する直前までは、メールボックスを作成しません。これにより、メールボックス作成から移行までの期間が短縮されて、Exchange の空き時間の制限による影響を緩和できます。

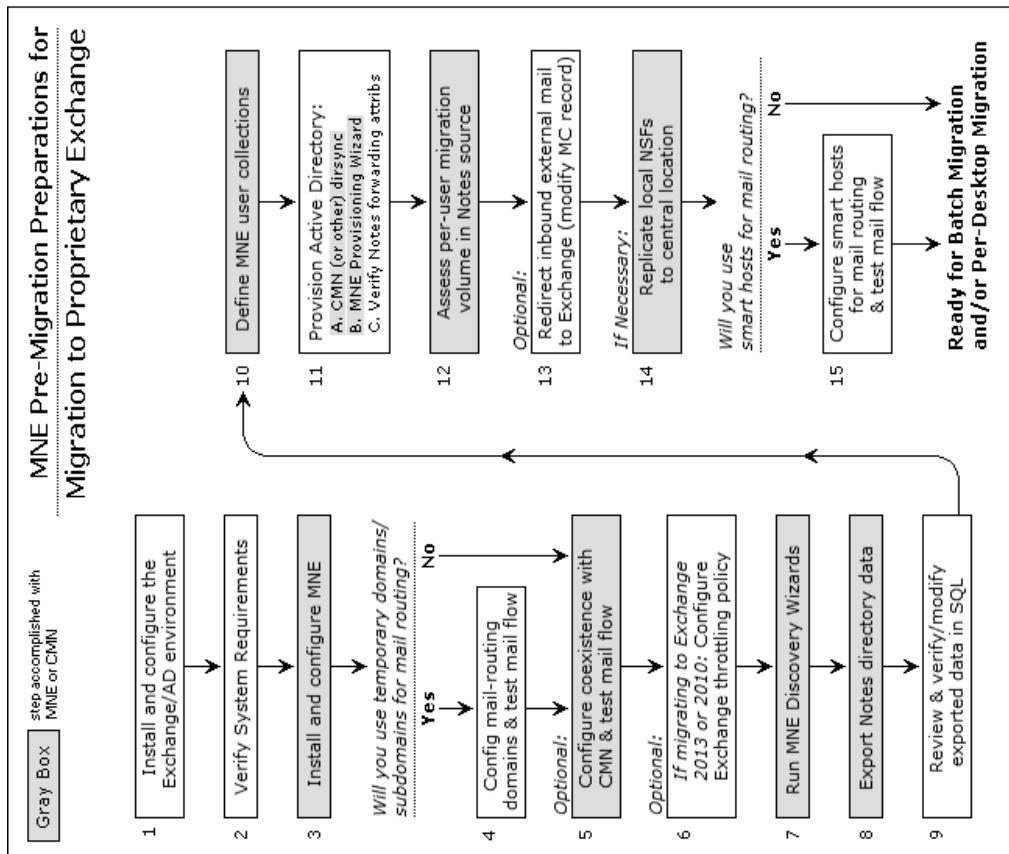
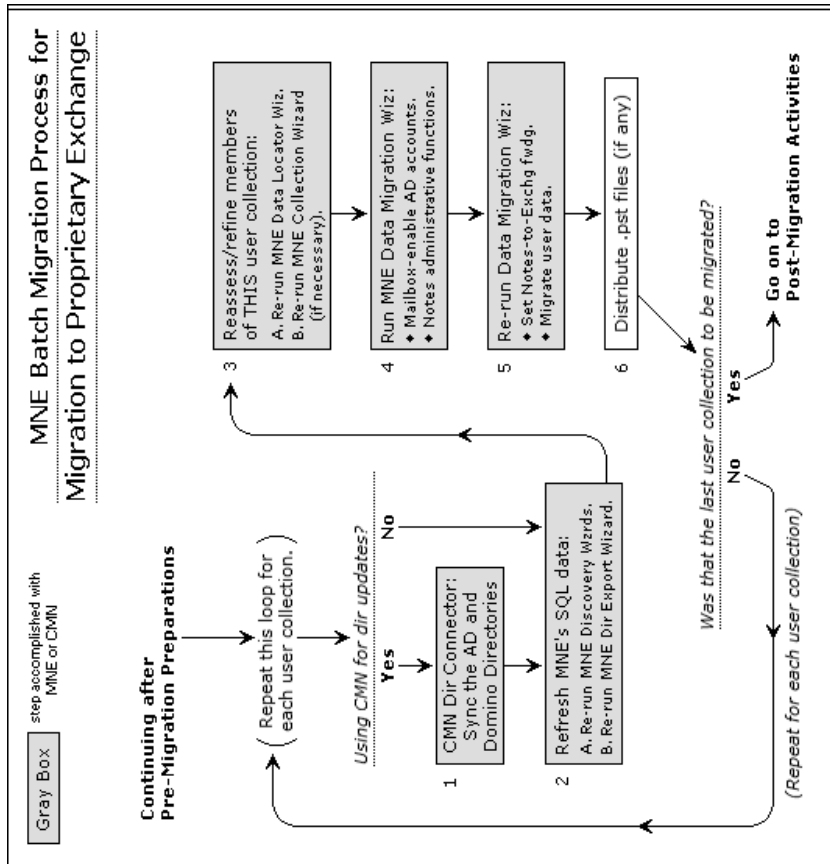
ターゲット Exchange にメールボックスがすでに存在している場合、未移行の Notes ユーザーに対する空き時間情報クエリは、それらのユーザーが Exchange に移行されるまで利用することはできません。このような場合、いくつかの移行前準備作業のオプション ステップをスキップすることができますが、その他の設定 / 管理作業は行わないと、実際の移行を開始することはできません。

すべてのシナリオには共存に対応するオプションの手順が含まれています (後述)。また、移行前準備作業には、メールが適切にルーティングされるように、すべてのオブジェクトのターゲット / 転送アドレスを確認する手順も含まれています。

これらのシナリオでは、管理者はソース / ターゲットの両方の環境のディレクトリやユーザー データへのアクセス許可が設定された管理者アカウントを使用して、MNE コンポーネント アプリケーションを実行します。

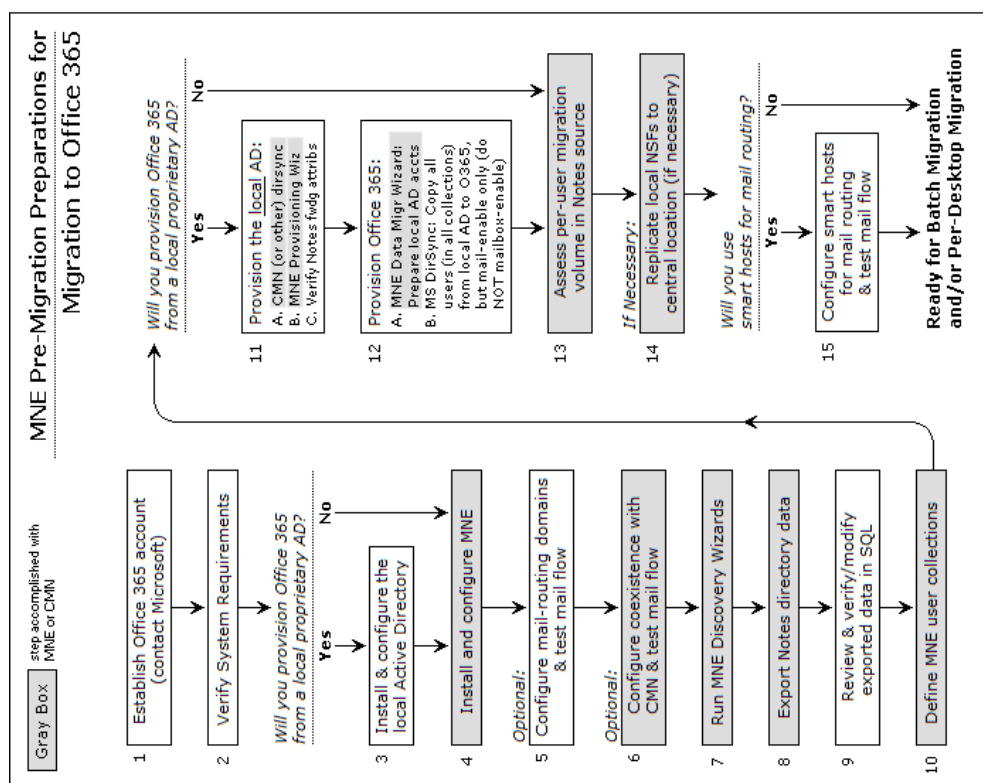
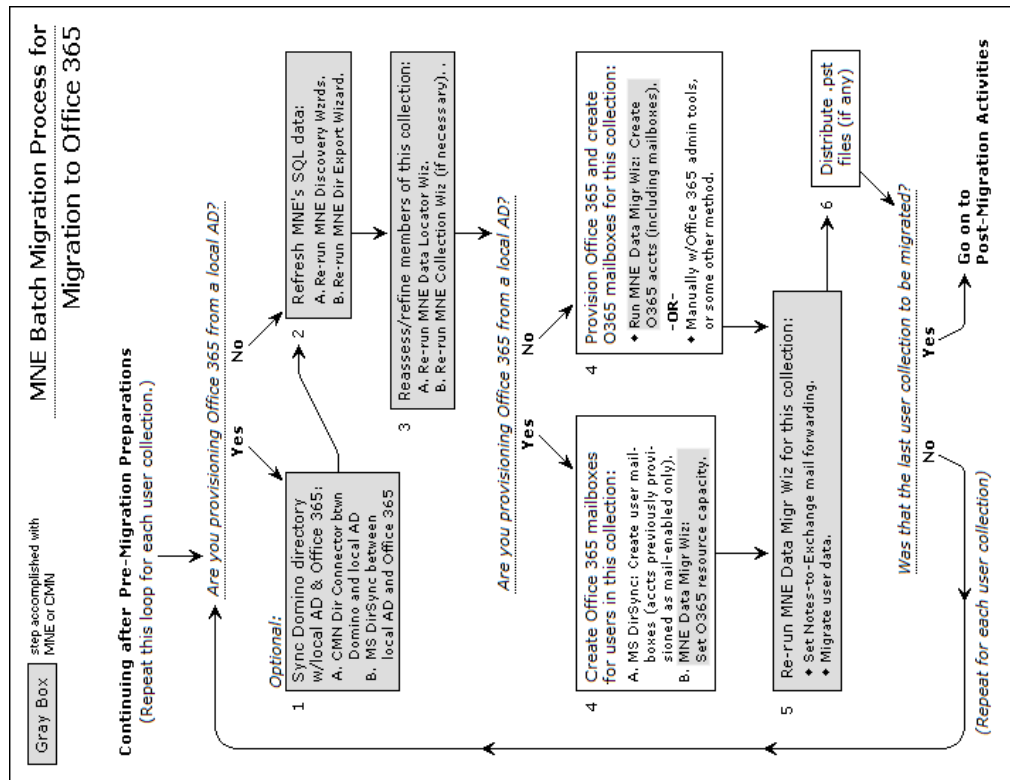


独自型 Exchange ターゲットに移行するための手順を追った説明と細かな注意事項は、第 2 章を参照してください。



Microsoft Office 365 への移行

MNE では、ホスト型 Exchange サービス（クラウド）に移行することができます。通常、移行先は Microsoft の Office 365 になります。Office 365 への移行は、オンプレミス Exchange への移行と方法はほぼ同じです。ただし、相当の違いはあるため、この『シナリオガイド』では個別の章（第 2 章と第 3 章）に分けて説明します。



ホスト型サービスは、外部エンティティ (Microsoft) が管理している共有リソースであるため、Office 365 に移行するために必要なアクセス許可は、独自型 Exchange に移行する場合に必要なアクセス許可とは異なります。どちらのターゲットタイプへのアクセスも、リモート PowerShell 経由でメールボックスレベルで設定します。『MNE クイックスタートガイド』および『移行前準備ガイド』の「システム要件」に関するセクションを参照してください。

制限とスループット

Office 365 ではユーザー接続の制限 (調整) が行われており、それが移行パフォーマンスに影響を与えています。この調整はユーザー当たりの制限で、単一のユーザーが 2 つを超える接続を行うとスループットが低下してしまいます (< 移行管理者 > ユーザーを含む)。前のバージョンの Exchange Online では、移行スループットはマシン当たり 3 ~ 5GB/ 時間が普通でした。しかし、Office 365 ではこの制限により、一般的なスループットがマシン当たり 500MB/ 時間以下まで低下しています。

そのため、Quest では、Office 365 への移行時には、複数の移行マシン (または仮想マシン) を同時に稼働させて、目的のスループットを達成することを **お勧めし**ません。各マシン上では個別の一意な移行管理者アカウントを使用して、Office 365 の制限を回避してください。また、スループットを最適化するために、各移行マシンのスレッド数を少なめ (2 ~ 4) に設定する必要があります。

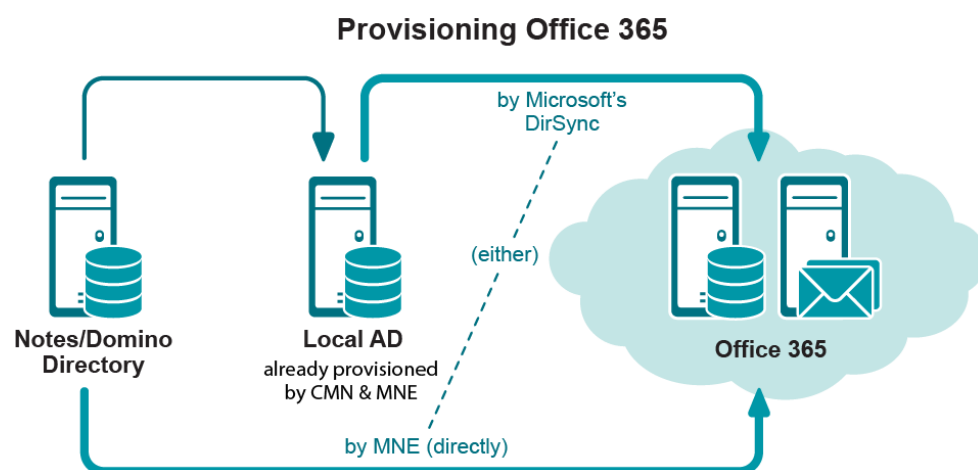
本書の執筆時点で、Quest は Microsoft と直接協力して、Office 365 調整 (制限) ポリシーの変更とそれが移行スループットに与える影響をテストしています。まもなく、移行スループットを改善するための、調整 (制限) ポリシーの変更が可能になる予定です。ただし、それでも Office 365 に効率的に移行するために、複数台のマシンとそれぞれに一意の移行アカウントを使用する方が妥当な場合もあります。

プロビジョニングとメールボックスの作成

Microsoft の AD 同期ツールを使って 2 つのディレクトリを同期することにより、ローカル Active Directory からオブジェクトデータを Office 365 にプロビジョニングすることができます。この方法のプロビジョニングではシングルサインオン (ID フェデレーション) を利用することができるため、ユーザーはローカル Active Directory を使用する場合と同じ企業認証情報 (ユーザー名とパスワード) を使って、Office 365 サービスにアクセスできます。

Microsoft の AD Sync ツールを使ってローカル Active Directory から Office 365 をプロビジョニングする場合は、ローカル Active Directory のプロビジョニングを、独自型 Exchange ターゲットの場合と同じように、MNE の機能を使って行えます (Quest の CMN を使用または使用せずに)。次に Microsoft の AD Sync ツールを使って、ローカル Active Directory からホスト型 Active Directory をプロビジョニングします。

MNE では、プロジェクトのメールルーティングのスループット管理、および移行に関連する一般的な各種サーバー管理作業を行うことも可能です。



ローカル Active Directory がない場合は、MNE を使って Notes ソースから直接 Office 365 をプロビジョニングして、ホスト型メールボックスを作成することができます。そうしない場合は、Microsoft の Office 365 管理ポータルから、手動でホスト型 Active Directory をプロビジョニングできます。この場合、大部分の管理者は、スクリプトを使って作業の一部を自動化しています。

① **注** : Exchange から Notes へのメール転送を行うには、Office 365 内にメール有効オブジェクトが必要です。ただし、Exchange から Notes に空き時間情報クエリ (Office 365 ユーザーが Notes ユーザーの空き時間情報を検索) を行うには、Notes ユーザーが Exchange メールボックスを **保有していない**状態であればなりません。(Exchange では、Exchange メールボックスをすでに持っているユーザーの空き時間情報クエリを外部サーバーに送信することはできません。クエリは、自分の Exchange メールボックスに対してのみ送信できます。) そのため、移行期間中に Exchange から Notes へのメールルーティングと Exchange から Notes への空き時間情報クエリの両方を実現するには、以下の条件を満たす必要があります。

- すべての Notes ユーザーを Office 365 にメール有効オブジェクトとしてプロビジョニングするが、最初のユーザーを移行するまでの間はメールボックス有効にはしない。
- ユーザーの移行直前 (ユーザー コレクション当たり) までは、ユーザーのメールボックスを作成しない。

オブジェクトをプロビジョニングできず、メールボックスを個別に作成した場合は、これらの 2 つの機能のいずれかが利用できなくなります。Microsoft の AD Sync ツールを利用すれば、ローカル Active Directory から Office 365 に、メールボックスを作成せずにメール有効オブジェクトをプロビジョニングできますが、他の手段でプロビジョニングした場合は、メール有効ユーザー オブジェクトの作成と同時に、Office 365 メールボックスが作成されてしまいます。

そのため、Microsoft AD Sync ツール以外の手段で Office 365 をプロビジョニングする場合 (ローカル Active Directory から)、移行期間中は Exchange から Notes への転送と Exchange から Notes への空き時間情報クエリの両方を利用することはできません。

空き時間情報の共存設定が不要な場合は、この Exchange 空き時間情報に関する制限を考慮する必要はありません。そのような場合は、**移行前の準備作業**で単にすべてのユーザー (すべてのコレクション内の) をホスト型 Active Directory にプロビジョニングして、Exchange から Notes へのメール転送を維持するようにしてください。

メールルーティング

大半のシナリオでは、最後のユーザーが移行されるまでの間、着信外部 (インターネット) メールが Office 365 にリダイレクトされることはありません。移行期間中は、MX レコードが Notes を指す状態で放置します。MNE では、コレクションで移行されたユーザーに対して、Notes から Exchange への転送を設定することができます。最後のコレクションの最後のユーザーの移行が完了したら、外部着信メールを新しいホスト型メールボックスにリダイレクトするように、MX レコードを更新します。

移行後もしばらくの間 Notes 環境を稼働させる場合は、Notes から Exchange への転送設定をそのまま維持して、内部 Notes メールが新しいホスト型 Exchange メールボックスにルーティングされるようにする必要があります。

すべてのユーザーの移行が完了されるまでの間、着信外部メールは Office 365 にルーティングされないため、Exchange から Notes への転送は、すでに移行された Exchange ユーザーから未移行の Notes ユーザーへの内部メールに対してのみ必要になります。Exchange から Notes へのメールルーティングでは、ホスト型 Active Directory にメール有効オブジェクトが必要ですが、Notes ユーザーがすでに Exchange メールボックスを保有している場合、Exchange から Notes への空き時間情報クエリは利用できません (詳細は、前のセクションの「重要」の説明を参照)。

両方の機能が必要な場合は、Microsoft の AD Sync ツールを使って、ディレクトリ同期によりローカル Active Directory から Office 365 をプロビジョニングする必要があります。それ以外の方法では、メール有効オブジェクトとホスト型メールボックスを、それぞれ別の時期に作成することはできません。ローカル Active Directory からプロビジョニングすることにより、**移行前の準備作業**ですべてのユーザーのメール有効オブジェクトが作成されます。その後、ユーザーコレクション当たりの **バッチ移行プロセス**で、ユーザーの移行直前にメールボックスを作成します。

その他の手段でプロビジョニングする場合は、Exchange から Notes へのメールルーティングを残す (利用するか、または Exchange から Notes への空き時間情報クエリを残す (利用するか) を選択する必要があります)。

Office 365 によるディレクトリの共存

Microsoft のホスト型 Active Directory (Office 365 用) には、Notes とホスト型 Active Directory 間の直接のディレクトリ共存を妨げる、厳格なアクセス制限が存在しています。ただし、Quest の CMN を利用すれば、Domino と Office 365 間の 2 ステップによる共存を確立することができます。

1 Notes とローカルの独自型 Active Directory 間の双方向の更新を行うように、CMN Directory Connector を設定します。

2 ローカル Active Directory と Office 365 を同期するように、Microsoft の AD Sync ツールを設定します。この 2 つを組み合わせれば、Domino と Office 365 間で効率的にディレクトリを共存させることが可能です。

Office 365 によるメール、カレンダー、および空き時間情報の共存

Office 365 には、共存とハイブリッド展開のための新たなオプションが採用されています。これらの中には、Notes プロジェクトに活用できる、ID および予定表フェデレーション オプションが含まれています。Microsoft の予定表フェデレーションにはローカルの Exchange サーバーが必要ですが、Office 365 ユーザーによる双方向の空き時間情報検索が可能になります。

Quest の CMN は、この設定を利用して、Notes ユーザーに空き時間情報の検索を提供することができます。ただし、Exchange から Notes 方向への空き時間情報クエリを利用するには、Notes ユーザー（移行待ち）がまだ Exchange メールボックスを保有 **していない** 状態でなければならず、そのためには Microsoft の AD Sync ツールを使って、ローカル Active Directory から Office 365 をプロビジョニングする必要があります（詳細は前述の「[プロビジョニングとメールボックスの作成](#)」を参照してください）。

Quest の CMN を利用すれば、Office 365 とのメールとカレンダーの直接の共存も可能です。

オフライン移行

MNE は、ソースサーバとターゲットサーバを同時に MNE に接続できない、または接続することが非現実的で、データをソースからターゲットに直接コピーできないような場合にも対処することができます。オフライン移行は、以前に Notes から抽出してあった Notes ソースデータを、直接 Exchange ターゲットに移行する戦略です。オフライン戦略は、次の場合に有用です。

- 帯域幅に問題があって直接接続が実用的でない場合（移行元と移行先のサーバが地理的やネットワーク的に遠く離れている場合など）
- 管理アクセスを許可していないサードパーティによって Domino 環境が移行された場合
- Domino サーバが破損したが、バックアップ NSF ファイルは残っているという災害発生時

オフライン移行は、以下の 2 つのいずれかの方法で実施できます。

- Notes ソースデータをレプリカまたは切断された NSF に保存してから、MNE の Data Migration Wizard（データ移行ウィザード）で NSF ファイルを直接 Exchange に移行します。
- MNE の Data Migration Wizard（データ移行ウィザード）で Notes ソースデータを PST ファイルに移行してから（オンラインの Exchange 移行先に直接移行しない）、PST ファイルを他のアプリケーションで Exchange ターゲットに移行します。この目的には Quest の *Migration Manager for PSTs* が適しています。

以下のトピックでは、このオフラインシナリオの特定の要件とガイドを示します。

Notes データを NSF または PST ファイルに保存するには

どちらの場合（NSF または PST）でも、以下が必要です。

- 移行するすべての件名が格納されたメインの Notes アドレス帳
- すべてのメールファイルとアーカイブ
- すべての個人アドレス帳
- 上記すべてを復号化可能な管理 ID ファイル

NSF への Notes データの保存は Notes/Domino のネイティブ機能です。必要に応じて、詳細について IBM のマニュアルを参照してください。

MNE を使用した Notes データの PST ファイルへの移行

- UI をプログラムするか、以下のパラメータを Task Parameters または Global Defaults に設定することで、すべてのデータ型を PST ファイルに移行するよう、MNE の Data Migration Wizard (データ移行ウィザード) を設定します。

```
[General]
PABDest=PST
ServerMailDest=PST
ArchiveDest=PST
```

- MNE は Exchange 環境での移行のための変換の一環として、情報のクエリと設定を試みる場合がありますが、Exchange サーバとの直接の接続がない環境では、その試みによりエラーが返されます。この検証を無効にするには、Task Parameters か Global Defaults の [General] セクションで `ACLs=0` を設定します。
- MNE の Notes Migration Manager の *Notes Server Configuration* (Notes サーバの設定) 画面 : Always use these values (これらの値を常に使用) チェックボックスがオフになっていることを確認します。

切断された NSF または PST から Exchange に移行するには

MNE の Notes Migration Manager で (Data Migration Wizard (データ移行ウィザード) を実行する前に)、以下を行います。

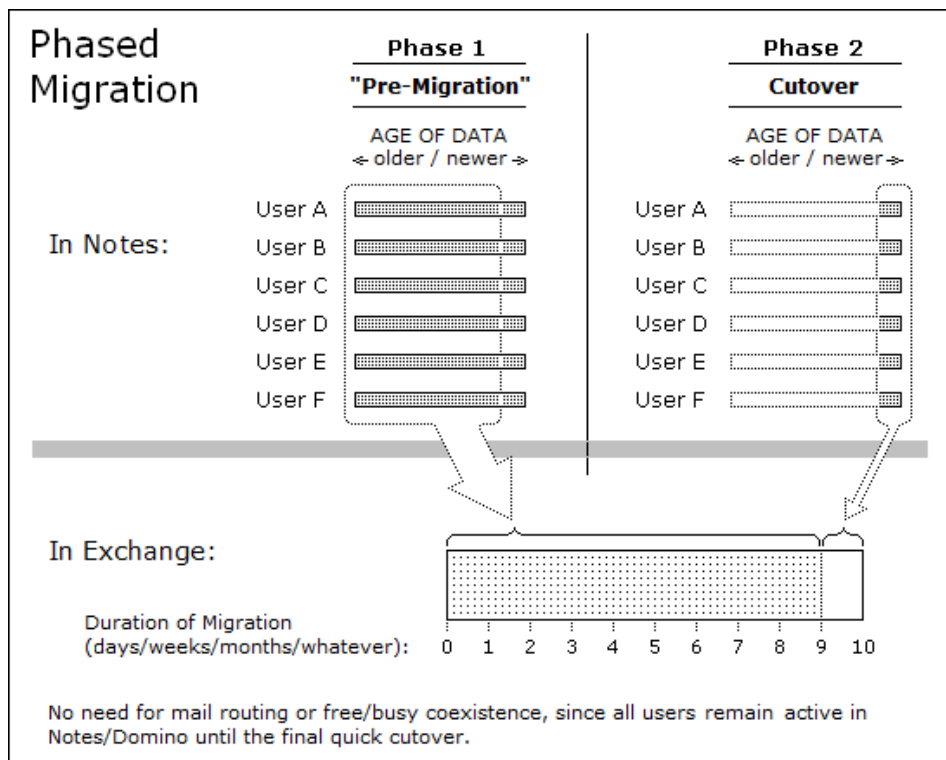
- Notes Server Configuration* (Notes サーバの設定) 画面 : Always use these values (これらの値を常に使用) チェックボックスがオフになっていることを確認します。
- Discover Notes Information* (Notes 情報の検出) で、以下を行います。
 - Find NABs* (NAB を検索) 画面 : Notes アドレス帳のオフラインコピーをロードして有効にします。オフラインコピーを探して手動でロードする必要があります (Add NAB (NAB の追加) ボタンを使用) (Notes サーバがオフラインとなっているため、Find NABs (NAB を検索) ボタンはこれに使用できません)。
 - Find Domains* (ドメインを検索) 画面 : Find Internet Domains (インターネットドメインの検索) をクリックして、オフライン NAB からドメインをロードします。
 - Export Notes Directory* (Notes ディレクトリをエクスポート) 画面 : Export Directory (ディレクトリをエクスポート) をクリックして、MNE の Directory Export Wizard を起動します。
 - Edit (編集) ボタンをクリックします (Task Parameters を編集します)。設定ファイルの [Notes] セクションの末尾に、パラメータ `offline=1` を追加します。ファイルを保存して閉じ、Next (次へ) をクリックします。
 - Specify Notes Login Information* (Notes ログイン情報を指定) 画面で、NAB ファイルのコピー元となる元の Domino サーバの名前を Domino Server (Domino サーバ) に入力します。次に、オフライン移行 ID ファイルとパスワードを User ID file (ユーザー ID ファイル) および Password (パスワード) フィールドに入力します。
 - 通常どおり Directory Export Wizard を終了します。
- Notes Migration Manager に戻り、*Locate Notes Data Stores* (Notes データストアを検索) 画面の *User Collections* (ユーザーコレクション) : Locate data stores (データストアを検索) をクリックし、指定したユーザーコレクションの Notes Data Locator Wizard を起動します。
 - Notes Data Locator Wizard の *Select Notes Data Store Type(s) to Locate* (検索する Notes データストアタイプを選択) 画面 : Find new data stores and gather statistics (新規データストアを検索して統計データを収集) を選択し、Add/Replace (追加 / 置換) モードを *Replace data previously found...* (これらの保管場所で以前検索したデータ ...) に設定します。次に、検索するデータ型を選択し、Next (次へ) をクリックします。
 - Scan file system directories that I specify (指定したファイルシステムディレクトリをスキャン) が選択されていることを確認し、Next (次へ) をクリックします。

- その後のページで、データ型ごとに、希望するアイテムが検索されたディレクトリを参照し、それをスキャンリストに追加します。**注**：実際のメールファイルが格納されたフォルダの1つ上のルートフォルダを指定してください。**注**：メールファイルは、そのメールファイルのコピー元フォルダと名前が一致するディレクトリに格納されている必要があります。
 - Notes Data Locator Wizard の実行を完了します。
- 4 MNE の Data Migration Wizard (データ移行ウィザード) を使用して、NSF または PST を Exchange にインポートします。

段階的な移行

段階的な移行とは、最終的な「切り替え」移行の前に、ターゲット Exchange メールボックスにデータを事前移行 / 移動することです。段階的な移行は、帯域幅に関する問題で行われることも、また前述のオフライン移行と連携して行われることもあります。

この方法では、データの大半をターゲット メールボックスに事前設定することができます。そのため、最終的な切り替えで転送する必要があるデータ量を大幅に減らすことが可能です。移行期間中のユーザーは、Notes でアクティブになります。古いデータを Exchange に移行している間、ユーザーは Notes でメールを送受信したり、カレンダーを管理したりします。古いデータの移行が完了した後、残りの少量のデータは比較的短時間で移行できるため、多くのユーザーを短期間で移行することができます。MNE では、Notes データのコピーが移行されるので (元のデータは削除されない)、Notes ユーザーは、移行期間を通じて古いデータを使用できます。



一般的に段階的な移行では、古いメールを新しいメールと区別しておく便利です。そのためには、以下の2つのうちいずれかの方法を実施します。

- **レプリカを使用** : NSF 複製の取り決めに、レプリカ NSF に含めるデータを制限するように設定することができます。この方法を利用すれば、複製するデータを、切り替え前の段階で移行する情報に制限することができます。
- **データフィルタを使用** : Data Migration Wizard に統合されているフィルタリング オプションを使用して、移行するメッセージの日付制限と範囲を指定し、特定の日付またはその前後に、あるいは特定の日付の範囲内で、メッセージのみを移行することができます。

MNE にはスマート再移行テクノロジーも含まれており、以前に移行されたアイテムは検知され、再移行する場合にも重複して複製されることはありません。

段階的な移行では、移行スケジュールをユーザーに確実に理解させるために、エンドユーザーとのコミュニケーションが必要不可欠です。移行のタイミングと設定によっては、移行イベント間に Notes に対して行われた変更や削除は、最終的な移行が完了するまでの間、Exchange に反映されない場合があります。

いずれかの方法を使用した段階的な移行では、エンドユーザーが実際に Exchange アカウントの使用を開始する前に、Exchange アカウントとメールボックスを作成して、移行された古いデータを受け取れるようにする必要があります。そのため、各ユーザーグループに対して、最低 2 回は Migration Wizard を実行することになります。

- **1 回目** : Exchange のユーザーアカウントをメールボックス有効にして、Exchange でメール転送ルール（ユーザーが移行されるまで Notes にメールを転送する）を設定し、ユーザーの古いデータを新しいサーバに移行し、次の手順に進みます。
- **2 回目** : メールルーティングを逆向きにして (Notes から Exchange にメールを転送)、残りのデータを移行します。

① **注** : 日付フィルタは、メールおよびカレンダー アイテムにのみ適用され、ユーザーの連絡先には適用されません。

① **注** : 段階的な移行では、まず（移行前の準備作業としてすべての Notes ユーザーの）Exchange メールボックスを作成しておく必要がありますが、この方法の場合は、移行期間中すべてのユーザー（およびその空き時間情報データ）が Notes に残るため、空き時間情報の共存は不要になります。また、最終的な切り替え時にすべてのユーザーと一緒に移行されるため、たいていの場合段階的な移行では、Exchange から Notes へのメール転送は不要になります。

デスクトップごとの移行のサイレントモードオプション

MNE Self-Service Desktop Migrator (SSDM) には、サイレントモード設定が用意されています。一般的にこのオプション設定は、SSDM の展開時にユーザーの関与を最低限に抑えながら、分散移行の柔軟性やその他の利点を活用するために用いられます。

サイレントモードを設定する場合、移行チームは事前に notesdtapp.ini ファイル内に、何を移行するか、移行する各データタイプのターゲット、およびフィルタや他の項目を設定します。

SSDM のサイレントモードについては、この『シナリオガイド』の第 4 章で詳細に説明されています。

独自型 Exchange への移行

- 独自型 Exchange ターゲットへの移行
- 移行前に必要な準備
- バッチ移行プロセス
- 移行後のアクティビティ

独自型 Exchange ターゲットへの移行

① **注:** この章の情報は、独自型 Exchange ターゲットに移行する場合にのみ適用されます。ホスト型 Exchange に移行する場合は、この章をスキップして第 3 章 (Microsoft Office 365 への移行) に進んでください。

ここで、*独自型* Exchange 環境とは、移行する組織がハードウェアとソフトウェアを完全に管理している環境を表しています。通常、独自型 Exchange サーバーは Notes ソースと同じ環境にありますが、別の場所に配置されるケースもあります。

独自型 Exchange 環境に移行する場合、すでに Active Directory が設定されているかどうか、設定されている場合はメール有効、メールボックス有効オブジェクトが存在しているかどうかによって、いくつかのシナリオが考えられます。

① **注:** メール有効 Active Directory オブジェクトは、Exchange ドメインの外部にあるアドレスのメールアドレス属性を持つオブジェクトで、Active Directory はオブジェクトのメールをその外部アドレスに転送することができます。メールボックス有効オブジェクトは、Exchange メールボックスを持つオブジェクトです。メール有効 Active Directory オブジェクトは、同時にメールボックス有効でない限り、Exchange 内でメールを受信できません。メールボックスを持たないメール有効 Active Directory オブジェクトは、オブジェクトの外部転送アドレスにメールを転送することしかできません。

ログインおよびセキュリティ上の目的で、すでに組織に Active Directory が導入されていることもあります。確立された Active Directory にすでにユーザーアカウントが存在している場合、MNE はこれらのオブジェクトを使って現在環境内で使用されているのと同じ認証情報とセキュリティを保持しますが、それらのユーザーのデータを移行するためには、オブジェクトをメール有効およびメールボックス有効にする必要があります。

共存方針も、このカテゴリのシナリオに影響します。大部分の組織の移行計画には、何らかの形式の共存が含まれており、そのための追加の設定手順が必要になります。

この章では、この一連のシナリオの作業手順と注意事項について説明していきます。


これらのシナリオで、ソース / ターゲット環境の両方のディレクトリやユーザーデータにアクセスするために必要な、アクセス許可が設定された管理者アカウントにより、MNE ツールが実行されます。

移行前に必要な準備

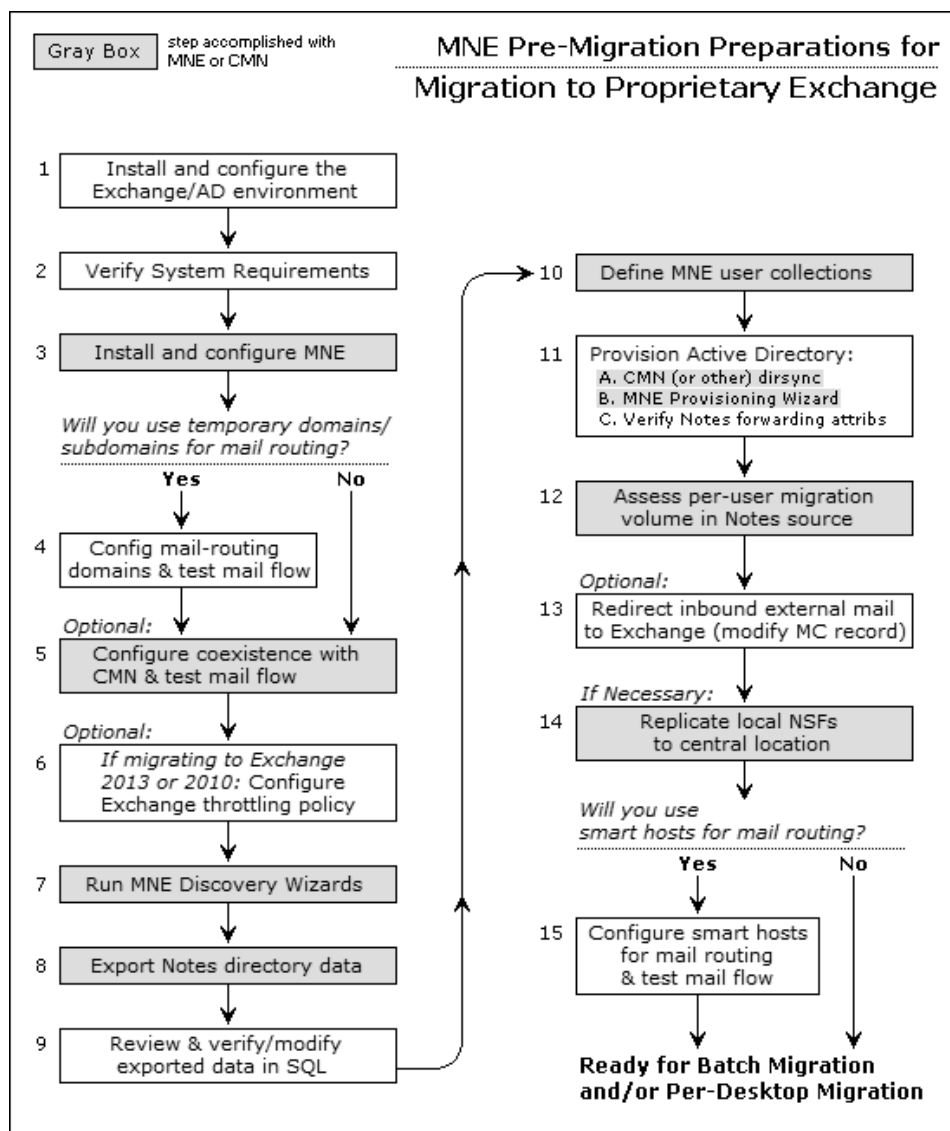
どの移行シナリオでも、ソース / ターゲット環境の準備、管理者アカウントの設定、および必要なソフトウェアの準備などの作業が必要になります。また、大部分のシナリオでは、共存に関する設定も必要になります。これらの移行前準備作業には、複数の環境にまたがる作業、移行を支援するために同時に実行するアプリケーションの設定、およびその他の検討事項などが含まれているため、大幅に時間がかかることもあります。

一般的にこれらの移行前準備作業は、最初のユーザーを移行する前に 1 回のみ実施して、それ以降に再び実施する必要はありません。

独自型 Exchange ターゲットに移行する場合に必要な、移行前準備作業を表したフローチャートを次に示します。

If  **条件付きステップ**：特定の環境にのみ適用されるステップには、「If」矢印アイコンが記載されています。また、ステップを適用する場合の説明も記載しています。

フローチャート内のステップ番号は、後述する手順のステップ番号に対応していることに注意してください。



① **注**：このプロセスでは、Exchange の空き時間情報に関する制限のため（第 1 章の Office 365 「のバッチ移行プロセス」の「重要」で説明されています）、移行の直前まで（ユーザー コレクション当たり、「プロビジョニングとメールボックスの作成」で）ユーザーの Exchange メールボックスを作成しません。空き時間情報の共存を設定しない場合は、これらの移行前準備作業プロセス中の早期の段階で Exchange メールボックスを作成することができます（ただし同時に、まだ移行していない Notes ユーザーに対して、Exchange から Notes へのメール転送も設定する必要があります）。

ステップ 1 : ターゲット Exchange 環境のインストールと設定

移行先 Exchange 環境をまだインストール、設定していない場合は、まずその作業を行います。この時点では、単純に Exchange サーバーと Active Directory をインストール、設定します。Active Directory のプロビジョニング (まだプロビジョニングしていない場合) は、後のステップで行います。

ステップ 2 : すべてのシステム要件を満たすことの確認

次のステップで Migrator for Notes to Exchange をインストールするには、すべてのシステム要件を満たす必要があります。システム要件は、最新の RTM 『リリースノート』に記載されています。Quest アプリケーションの実行、および Notes/Domino および Exchange/AD 環境内のデータおよび機能のアクセスに使用される管理者アカウントには、MNE の『移行前プランニングガイド』に規定された特定のアクセス許可も必要です (「設定要件およびアカウント権限」を参照)。これらのアカウントが存在していない場合は、今すぐ作成、設定してください。

ステップ 3 : MNE ソフトウェアのインストールと設定

『MNE クイックスタートガイド』の「はじめに」のセクションで、Migrator for Notes to Exchange のインストール方法が説明されています。以下のサブピックでは、何らかの MNE コンポーネント アプリケーションを初めて実行する前に、MNE 設定の一環として即座に実施する必要がある設定作業について説明しています (最初の項目を除いては、すべてオプションまたは条件によって実施する作業です)。

また、移行計画の一環として MNE の Self-Service Desktop Migrator (SSDM) を使用するかどうかを検討してください。使用する場合は、それをインストール、設定する必要があります。

- ① **重要** : また Quest 管理アプリケーションを実行する前に、管理ワークステーションのウイルス対策ソフトウェアは必ず、Quest プログラム ファイル ディレクトリまたは %temp% ディレクトリをスキャンしないように設定するか、または単純に終了しておく必要があります (プログラムの実行後に復元することができます)。ウイルス対策ソフトウェアが MNE の一時ファイルを脅威として誤認し、クリーンアップしようすると、MNE プログラムの呼び出しが失敗します。

SQL Server DB および MNE のデフォルト設定の構成

Migrator for Notes to Exchange のほとんどの機能とウィザードで、SQL Server の中央データベースに格納されている情報へのアクセスが必要です。同様に、Notes サーバー、Exchange サーバー、Active Directory、Self-Service Desktop Migrator とそのログおよび状況ファイルを含む共有ディレクトリ、および管理アプリケーション ログ ファイルへのアクセスも必要です。そのため、MNE の機能やウィザードには、各種サーバーのサーバー名、設定オプション、アクセス認証情報などを指定する必要があります。

他の MNE 機能やウィザードを使用する前に、デフォルトの設定値をここで Notes Migration Manager (MNE コンソール) に入力しておけば、Notes Migration Manager で、再入力する必要がなくなります。インストール時にこれらの情報を入力しないと、機能やウィザードから必要に応じて値の入力が要求されることになります。また、値のほとんどは、情報を必要とする機能やウィザードごとに、何度も入力する必要があります。

- ① **注** : したがって、Notes Migration Manager の 5 つの [Edit Default Settings] (デフォルト設定の編集) 画面を使用して、今すぐこの情報を入力することを Quest はお勧めします。Notes Migration Manager については、『MNE 管理ガイド』の第 1 章を参照してください。

独自型 Exchange への移行のための MNE Task Scheduler の設定


MNE のタスクはウィザードで定義します。大半のウィザードでは、特定の日付の特定の時刻にタスクの実行スケジュールを設定できます。Notes Migration Manager の [Manage Scheduled Operations] 画面で、これらのタスク実行スケジュールを修正します。ただし、タスクのスケジュールは SQL データベースに保存され、「スケジュール設定された」タスクは、それ自体では実行されないため、ウィザードと [Manage Scheduled Operations] (スケジュール設定された操作を管理) 画面で、タスク実行のスケジュールのみを管理します。タスクは、Task Scheduler により実行されます。

MNE Task Scheduler は、スケジュール設定された MNE タスクを実行する、独立したコマンドライン アプリケーションです。このプログラムは、SQL データベースをチェックして、最後のチェック以降にタスクがスケジュール設定されていないかを確認し、設定されていればそのタスクを実行します。Task Scheduler は、Windows サービスマネージャを使って、他の Windows サービスと同様に管理することができます。Windows サービスの設定方法については、次のリンクを参照してください。[http://msdn.microsoft.com/en-us/library/ms681921\(v=vs.85\).aspx](http://msdn.microsoft.com/en-us/library/ms681921(v=vs.85).aspx)

MNE のインストール後、移行シナリオによっては、MNE Task Scheduler を使用するために必要な追加の設定手順を実行する必要があります。オンプレミス Exchange に移行する場合、Windows サービス マネージャに移動して次の点を確認します。

- 1 Task Scheduler が、「サービスとしてログオン」アクセス権を持つ Exchange 管理者アカウントの代わりとして実行されるように設定されている。
- 2 サービスが、「自動 (遅延開始)」モードで開始されるように設定されている。
- 3 MNE データベースをホストする SQL Server へのログインに Windows 認証を使用する場合、サービスを実行する Exchange 管理者にはデータベース アクセスが必要です。

条件付き : SetUserAccountControl および UserAccountControl パラメータの設定

If  **条件付きサブステップ** : このサブステップは、MNE を使ってターゲット Active Directory にオブジェクトを作成する場合にのみ適用されます。

MNE を使ってターゲット Active Directory にユーザー オブジェクトを作成する場合は、テキスト エディタを使ってこれらのパラメータを MNE の *Global Defaults* の設定に追加します。

```
[Active Directory]
SetUserAccountControl=1
UserAccountControl=512
```

省略可能 : Provisioning Wizard の Active Directory との通信の自動再試行の設定


MNE の Provisioning Wizard には、問題発生時に Active Directory への伝送を再試行する機能が用意されています。環境によっては Active Directory への伝送が一時的に中断されることがあり、それによってプロビジョニングが不完全になる可能性があります。そのような問題がプロビジョニングに与える影響が大きいと予想される場合は、テキスト エディタを使って Task Parameters と Global Defaults の [Active Directory] セクションに、プログラム パラメータを指定して、この機能を設定します。

```
[ActiveDirectory]
PSRetryAttempts=<#> // 整数 ( 試行回数 )、デフォルト =3
PSRetryWait=<##> // 整数 ( 秒 )、デフォルト =15
```

PSRetryAttempts パラメータは、Provisioning Wizard に送信を *PSRetryWait* パラメータで指定された間隔で何回繰り返して試行するか指示します。すべての再試行がエラーで失敗した場合、ログにエラーが記録され、現在のメッセージ プロパティまたは要素の処理がスキップされ、次のアイテムの処理が行われます。[Log level] (ログレベル) 設定 ([Specify Run Information] (実行情報の指定)) によっては、再試行回数がプログラム ログ内にその他の記録済みエラーや警告を含まずに表示される場合があります。デフォルトの設定 (*PSRetryAttempts*=3、*PSRetryWait*=15) では、Active Directory への伝送が 15 秒間隔で最高 3 回まで再試行されます。

- ① **重要** : *PSRetry* パラメータにデフォルト値よりも大きな値を設定する場合は、*WatchDogMinutes* パラメータの値を調整することも検討する必要があります。*WatchDogMinutes* は、Data Migration Wizard が接続がタイムアウトしたと判断して、プロセスを中断するまでに待機する、非活動状態の継続時間 (分) を示します (デフォルトは 180)。Quest では、*WatchDogMinutes* にはデフォルトの 180 分よりも大きな値、または再試行待機間隔 (*PSRetryAttempts* x *PSRetryWait*) 30 秒ごとに 10 分を設定することをお勧めします。

条件付き : Notes カスタム属性移行用の *customattrs.tsv* ファイルの準備

If  **条件付きサブステップ** : このサブステップは、Notes のカスタム属性を移行する場合にのみ適用されます。

Notes メッセージには、*差出人*、*宛先*、*件名* フィールドなどの標準的ないくつかの属性が含まれていますが、ユーザー定義のフィールドを含めることもできます。MNE の Data Migration Wizard と SSDM で、カスタムの Notes 属性をメールメッセージと Notes 連絡先から、Exchange 内の使用されていないプロパティに移行できます。ただし、ターゲットのプロパティが対応するソース内の属性を、移行アプリケーションが認識している場合に限りです。このため、カスタム属性を移行する前に、*tsv* データ ファイルでソースとターゲットの属性の関連付けをマッピングしておく必要があります。これによって、移行アプリケーションはこのファイルを参照し、属性を移行できるようになります。

このマッピング ファイルは、Data Migration Wizard のデフォルトのインストール フォルダ (通常は *C:\Program Files\Quest\Migrator for Notes to Exchange*) および SSDM を使用して Notes カスタム属性を移行する場合、*notesdttapp.exe* を含むフォルダで、*customattrs.tsv* という名前の (ANSI ではなく) Unicode ファイルにする必要があります。どちらかまたは両方の移行アプリケーションが、このファイルを参照して、ソース属性を、Exchange の空いている (未使用の) プロパティにマッピングします。

Migrator for Notes to Exchange では、*customattrs.tsv* に必要な列見出しと同じものが用いられている Unicode ファイル、*attrs.tsv* がインストールされます。これは、*customattrs.tsv* ファイルを作成する場合のテンプレートとして使用できます。

customattrs.tsv ファイルを作成、準備するには :

- 1 テキスト エディタを使用して *attrs.tsv* を開き、*customattrs.tsv* という新しい名前を付けてそのコピーを保存します。*customattrs.tsv* は (ANSI ではなく) Unicode ファイルとして前述したフォルダで保存し、コピーの中にデータ行があれば、すべて削除してください。
- 2 移行する各カスタム属性のデータ行、およびこれらの列に関連する値を入力します。
 - ID : カスタム属性の名前。その行のカスタム属性をファイル内の他の属性と識別する一意な文字列になります。

- ① **重要** : 元の *attrs.tsv* ファイルに何らかのデータ行が残っている場合は、*attrs.tsv* で使用されている ID 値と同じ ID 値が、*customattrs.tsv* に含まれていないことを確認してください。**両方のファイルに同じ ID 値が含まれていると、カスタム属性を正しく移行できません。**

- **SourceProperty** : Exchange 内のプロパティに移行される、Notes メール メッセージまたは Notes 連絡先に追加された属性の名前。
- **TargetPropertySet** : ターゲットのプロパティ セットの GUID。次のいずれかの値にする必要があります。

```
PS_PUBLIC_STRINGS
PS_MAPI
{hhhhhhhh-hhhh-hhhh-hhhh-hhhhhhhhhhh}
```

ここで、各「h」は大文字の 16 進値になります。

TargetPropertySet 値が *PS_PUBLIC_STRINGS* または *PS_MAPI* の場合は、名前付きのセットに対応する今までの GUID が、指定した文字列に置き換えられます。

TargetPropertySet は空にできますが、その場合は **TargetProperty** を、(次に示すように) 0x0000 ~ 0x7FFF までの適切な整数値の ID に設定する必要があります。

- **TargetProperty** : Exchange の対応する MAPI プロパティの名前。16 進値のユーザー プロパティは、Exchange 内で移行されるメール メッセージまたは連絡先ごとに Notes プロパティを使用して作成され、その値が保持されます。作成されるプロパティの 16 進値はログにレポートされます (ログ ファイルで「custom attr」を検索してください)。

(前述したように) TargetPropertySet が空のままの場合は、この TargetProperty 値を 0x0000 ~ 0x7FFF までの 16 ビット整数として指定する必要があります。このとき、その他の MAPI プロパティでまだ定義されていない値を指定します。
- **TargetPropertyType** : MAPI プロパティのデータ型。Notes で使用されているデータ型と論理的に対応している必要があります。有効な値は、STRING、MV_STRING、LONG、SYSTIME、BOOLEAN です。また、これら 5 つのタイプの頭に「PT_」を付け加えることができます。つまり、PT_STRING、PT_MV_STRING など有効な値です。

3 更新された *customattrs.tsv* ファイルを保存して閉じます。

たとえば、一般的な *customattrs.tsv* ファイルは、次のようになります。

ID	SourceProperty	TargetPropertySet	TargetProperty	TargetPropertyType
Attr1	EV26C5E2CCF2B9267C.Archived	{D0F41A15-9E91-D111-84E6-0000F877D428}	Archive ID	STRING
Attr2	EV26C5E2CCF2B9267C.ArchivedDate	{D0F41A15-9E91-D111-84E6-0000F877D428}	Archived Date	STRING
Attr3	EV26C5E2CCF2B9267C.SaveSetId	{D0F41A15-9E91-D111-84E6-0000F877D428}	Saveset ID	STRING
Attr4	EV26C5E2CCF2B9267C.RetentionCategory	{D0F41A15-9E91-D111-84E6-0000F877D428}	Retention Category	STRING
Attr5	EV26C5E2CCF2B9267C.HasAttachments	{D0F41A15-9E91-D111-84E6-0000F877D428}	EVLotus_HasAttachments	STRING

Notes のカスタム属性を移行する場合のトラブルシューティング

プロパティと値を作成した場合は、Microsoft の *MfcMapi.exe* ユーティリティを使用してそれらを表示できます (このユーティリティは、Microsoft から無料でダウンロードすることができます。Google で「mfcmap」を検索して、<http://www.microsoft.com/ja-jp/download/default.aspx> のリンクに移動してください)。カスタム属性の移行に関連する問題の大半は、これらのクイック テストで診断することができます。

- *customattrs.tsv* ファイルのターゲット プロパティが、まだ存在しておらず、正しいフォーマットで指定されていることを確認します。詳細については、後述する「[MAPI プロパティについて](#)」を参照してください。
- *customattrs.tsv* ファイルが ANSI ではなく Unicode であることを確認します。
- *customattrs.tsv* ファイルの最終行の後に、改行と復帰改行 (最終行の末尾にカーソルを置いて Enter キーを押す) が続いていることを確認します。
- 元の *attrs.tsv* ファイルに何らかのデータ行が残っている場合は、*attrs.tsv* で使用されている ID 値と同じ ID 値が、*customattrs.tsv* に含まれていないことを確認してください。両方のファイルに同じ ID 値が含まれていると、カスタム属性を正しく移行できません。

MAPI プロパティについて


命名されるプロパティ名は、プロパティセットの GUID であり、ID は 32 ビットの整数または文字列になります。MAPI によって命名されるプロパティに、0x8000 ~ 0xFFFF までの 16 ビット整数のエイリアスが割り当てられます。このエイリアスは、メールボックスに固有です。

命名されないプロパティ名は、0x0001 ~ 0x7FFF の 16 ビット整数になります。この 16 ビット整数はすべてのメールボックスで有効です。命名されないプロパティの例は、0x0070 (*PR_CONVERSATION_TOPIC*) や 0x6656 です。どちらも MAPI で使用されます。そのため、すでに使用されているこれらの 2 つの例を、メッセージ属性のターゲット プロパティ値として使用することはできません。ただし、Notes 連絡先属性を Exchange にマップするために使用できる場合があります。

カスタム プロパティは命名してもしなくても大丈夫です。命名しない場合は、MAPI によってまだ使用されていない 0x0001 ~ 0x7FFF までの 16 ビット整数の *TargetProperty* を選択します。命名する場合は、プロパティセットの GUID を選択できます。すでに使用されているプロパティ セットを選択する場合は、そのプロパティ セットでまだ使用されていない 32 ビット整数または文字列による ID を選択する必要があります。新しいプロパティ セット GUID を選択した場合は、ID はどこにも存在しないため、すでに使用中の ID であるかどうかを心配する必要はありません。

カスタムプロパティに命名する場合、Quest は ({00020329-0000-0000-C000-000000000046} のエイリアスで始まる) `PS_PUBLIC_STRINGS` プロパティセット GUID を使用し、お使いのアプリケーションで一意的なプレフィックスを付けた文字列 ID (例: 「Quest-」) を使用することをお勧めします。

ステップ 4 (ドメイン区別によるメールルーティングの場合): メールルーティングドメインの設定

If  **条件付きステップ:** このステップは、移行中に一時的なルーティングドメイン (DNS でのドメイン区別) を使ったメールの共存を設定する場合にのみ適用されます。代わりにスマートホストを使ってメールルーティングを行う場合 (またはメールルーティングを設定しない場合) は、ステップ 5 に進んでください。

SMTP メール接続のみを導入するのか、または Quest の CMN で完全な共存を実現するのかにかかわらず、たいいていの組織は一時的な SMTP ドメインを使って Notes と Exchange 間のトラフィックをルーティングしています。管理者によっては単一の名前空間を利用するために、スマートホストサーバを使って、SMTP メールルーティングを設定することを選択する場合もあるでしょう。どちらの場合でも、サーバーレベルとユーザーレベルの両方で、ルーティング方法を設定する必要があります。ユーザーレベルでは、Notes 個人ドキュメントと Active Directory オブジェクトレコードは、この手順の後半で、ターゲット Active Directory をプロビジョニングして、2 つのディレクトリを同期するときに設定します。

Notes から Exchange へのメールルーティングは、Notes での新規メールは外部からの着信メールもまだ移行されていない Notes ユーザーからの内部メールも、Office 365 内のすでに移行されている受信者に正しくルーティングされるように設定します。そのため、Notes から Exchange へのルーティングドメインは、最初のユーザーコレクションを Exchange に移行する前に設定する必要があります (ただし、アクティブにはしない)。次に、各ユーザーコレクションの移行に伴い、転送ルールをアクティブにします。

メール有効オブジェクトを Active Directory プロビジョニングした後は、実際の移行前、移行中、または移行後の任意の時点で、Notes の代わりに Exchange にメールが到着するように、外部着信メールを切り替えることができます (MX レコードを使用)。大半の管理者は、移行プロセス前 / 移行プロセス中の変更を最小限に抑えることを希望するため、MX レコードは移行完了後にのみ更新しています。ただし、移行プロセスの途中で切り替えることにより、転送の「ホップ」を最小限に抑えることを希望する管理者も存在しています。また、ターゲット Active Directory オブジェクトがメール有効になったら、即座に切り替えることもできます。


DNS の切り替えを行う場合は、Exchange がまだ移行されていない受信者のメールをその Notes メールボックスに正しくルーティングできるように、切り替え前に Notes のルーティングドメイン (Exchange から Notes へのメールルーティング) を設定する必要があります。

ドメインの区別によるメールルーティング用サブドメインを設定するには:

ルーティングドメインは、プライマリドメインのサブドメイン (例: `notes.domain.com` や `ex.domain.com`) または完全に個別の SMTP ドメインになります。各メールシステムに固有である限りは、ルーティングの目的で十分に利用できます。サブドメインを設定するには:

- 1 適切な SMTP ドメインがまだ利用できない場合は、DNS にそれを作成します。1 つは、Exchange にトラフィックを転送する必要があります (例: `exchg.domain.com`)。移行済みユーザーの Notes メールボックスに送信されたメールは、`exchg.domain.com` ドメインを使って対応する Exchange メールボックスに転送されます。その他の SMTP ドメイン (例: `notes.domain.com`) を使って、まだ移行されていないユーザーのメールを Notes にルーティングできることもあります。
- 2 DNS に新しい `exchg.domain.com` ドメインを設定したら、SMTP ドメインを受け付けるように Exchange を設定し、受信者ポリシーを作成して適切なセカンダリ SMTP アドレスを生成します。そうすることによって、すべてのユーザーがこのドメインのメールを受信することができます。
- 3 新しい `notes.domain.com` SMTP ドメイン / アドレスへのメールを受け付けるように、Notes を設定します。
- 4 メールフローをテストして、新しいドメインを検証します。

ステップ 5 (省略可能) : 共存方針の設定

If  **条件付きステップ** : このステップは、移行時のメール、ディレクトリ、空き時間情報などの共存方法を設定する場合にのみ適用されます。共存を行わずに移行を実施する場合は、ステップ 6 に進んでください。

共存方針の設定 :

- **Quest の CMN による完全な共存** : 必要なコンポーネント (Directory Connector、Free/Busy Connector、Mail Connector) のインストール、設定方法については、CMN のドキュメントを参照してください。必要に応じて Directory Connector を作成、実行し、他のシステム内のユーザーに対応するルーティング オブジェクトで、Domino と Active Directory を更新する必要があります (完全なディレクトリを確立するため)。

① **重要** : Active Directory 内に既存のメール有効オブジェクトがある場合、Active Directory 内のエントリの重複を防止するために、Notes から Active Directory に入力する、CMN Directory Connector の *MNE Compatability Mode* (互換モード) を有効にしてください。CMN Mail Connector および Free/Busy Connector は、他のシナリオと同様に設定することができます。詳細は、『CMN ユーザーガイド』を参照してください。

メール フローをテストして、CMN 設定を忘れずに確認するようにしてください。

- **SMTP メール ルーティングの場合 (Quest の CMN を使用しない)** : 前のステップで設定したサブドメインのメール フローをまだテストしていない場合は、今すぐテストしてください。


Quest の CMN Free/Busy Connector を使用する場合

IBM Domino Administrator で、空き時間情報とメール ドメインを定義してください。

- 次のタブに、空き時間情報サーバーの**外部ドメイン**を追加します。
 - [Mail Information] (メール情報) タブ : [Gateway server name] (ゲートウェイ サーバー名) を Domino メール サーバー名に設定します。
 - [Calendar Information] (カレンダー情報) タブ : [Calendar server name] (カレンダー サーバー名) を *qcalcon.exe* がインストールされている Domino サーバー名に設定します。
- 次のタブに、メール サーバーの**外部 SMTP ドメイン**を追加します。[Routing] (ルーティング) タブで :
 - [Internet Domain] (インターネット ドメイン) を Exchange サブドメインに設定します。
 - [Internet Host] (インターネット ホスト) をインターネット ホストの IP に設定します。

① **注** : これらの手順では、Exchange の空き時間情報に関する制限のため (第 1 章の「Office 365 のバッチ移行プロセス」の「重要」で説明されています)、移行の直前まで (プロビジョニングとメールボックスの作成 内で) ユーザーの Exchange メールボックスを作成しません。この手順の早期に Exchange メールボックスを作成する場合、まだ移行していない Notes ユーザーの空き時間情報データは、ユーザーが Exchange に完全に移行されるまでの間利用できないことに注意してください。

ステップ 6 (Exchange 2010 以降のターゲットの場合のみ) : 調整ポリシーの設定

If  **条件付きステップ** : このステップは、Exchange 2010 以降のターゲット環境に移行する場合にのみ適用され、省略することはできませんが、実施することをお勧めします。

Exchange 2010 以降への移行では、カスタム調整ポリシーを使用することで、スループットを改善できる場合があります。このトピックの内容は、[この記事](#)に詳細に記述されています。

ステップ 7 : Notes 情報の検出

Migrator for Notes to Exchange は、Directory Export Wizard のデータ ソースとして機能する Notes のアドレス帳 (NAB) の格納場所を識別 (次のステップ) する必要があります。また、MNE は、ユーザーの SMTP エイリアスの生成に使用されるインターネットドメインも識別する必要があります。そのため、MNE には Notes 環境を検索して、必要な情報を返すウィザードが用意されています。

- *NABs Discovery Wizard* : 利用できる NAB を探して、エクスポートする NAB を指定することができます。
- *Internet Domains Discovery Wizard* : 関連するインターネットドメインを識別します。

次のステップで Directory Export Wizard を準備するために、2 つのウィザードを実行します。詳細は、『MNE 管理ガイド』を参照してください。

ステップ 8 : Notes ディレクトリ データのエクスポート

MNE の Directory Export Wizard は、Notes 環境からユーザー / グループ データを抽出し、その情報を MNE の SQL データベースや他のデータ ファイルに設定します。他の Quest アプリケーションは、入力値としてこのデータを必要としています。今すぐ Directory Export Wizard を実行して、必要な情報を収集してください。Directory Export Wizard の詳細と操作方法については、『MNE 管理ガイド』の「Directory Export Wizard」の章を参照してください。


ステップ 9 : SQL データベース内のエクスポートされたデータの確認と検証 / 変更

Directory Export Wizard が収集するデータは、他の MNE プログラムに必要な入力情報です。そのため、情報が正確で正しい形式になっていることを確認することが大切です。この検証ステップでは、移行を開始する前に必要に応じてアドレスや他の属性を修正することもできます。たとえば、移行プロセスの一環として、新しい SMTP ドメインへの組織の統合を容易にするために、その内容を変更することができます。

プロビジョニング プロセスの照合基準を確認します (後述するステップで)。各 Notes ユーザーと対応する Active Directory 内のセキュリティ オブジェクトを照合するために、一意の照合属性が必要です。照合属性がすでに用意されていることもあります。また、Domino ディレクトリにカスタム属性を設定してエクスポートしたり、TSV エクスポート / インポートを介して照合属性を MNE の SQL データベースに設定したりすることもできます。

Active Directory 内にすでにメール有効ユーザーが存在している場合 : *TargetAddress* 列に記載されているアドレスが正しいことを確認してください。MNE はこの値を使って、メールボックスを作成する Active Directory オブジェクトを検索します。そのため、SQL データベース内の *TargetAddress* の値は、メール有効 Active Directory オブジェクトの有効な SMTP アドレスと一致する必要があります。また、*TargetAlias* アドレスは、セカンダリ / プロキシ アドレスとしても適用されます。そのため、作業を続行する前にこの情報を確認することが重要になります。

ターゲット Active Directory がリソースフォレストおよびユーザーフォレスト用に設定されている場合 : メールボックス有効にするための SQL データベースの準備

If  **条件付きサブステップ** : このサブステップは、Active Directory が、対応するユーザー アカウントを使用して、リソース フォレストとユーザー フォレスト用に設定されている場合にのみ適用されます。

Data Migration Wizard でメールボックスを正しく有効化し、リソース アカウントをユーザー アカウントに適切に関連付けるには、Notes Migration Manager で [Global Default Settings] (Global Default の設定) を設定し、エクスポートされたディレクトリ データの列でユーザーごとの値を準備 (または確認) する必要があります。これらの準備作業は、Data Migration Wizard がリソースアカウントをユーザーアカウントと正しく関連付け、適切にメールボックス有効にするために必要です。

この操作を開始する前に、SQL Server データベースの列がどの AD 属性に対応するのかを決定し、ウィザードがリソース フォレストとユーザー フォレストの対応するアカウントと一致できるようにする必要があります。列 (AdSearchCol) と属性 (AdAttribute) は、両方とも Notes Migration Manager の [Global Default Settings] (Global Default の設定) の [ActiveDirectory2] セクションで指定されます。

- *AdSearchCol* : SQL Server データベースの列。リソースフォレストとユーザーフォレストの対応するユーザーアカウントと一致させるために、それぞれの個別の *AdAttribute* 値がこの列の値に対して検索されます。ここで指定する列とそのユーザーごとの値は、Data Migration Wizard の実行前に、存在する必要があります。

① 重要 : 現在のバージョンの MNE では、この *AdSearchCol* パラメータの値を *SearchKey2* に設定する必要があります。そうしないと、メールボックス有効化プロセスが失敗します。このパラメータのデフォルトは、*AdSearchCol=SearchKey2* です。

- *AdAttribute* : リソースフォレストとユーザーフォレストの対応するユーザーアカウントと一致させるために、値が SQL データベースの *AdSearchCol* 列で読み込まれる AD 属性。例 :

```
[ActiveDirectory2]
AdSearchCol=SearchKey2
AdAttribute=userPrincipalName
```

ここでは、AD オブジェクトをユーザーと一致させ、各 AD オブジェクトの *userPrincipalName* 属性の値が、SQL Server データベースの対応するユーザーの *SearchKey2* 列の値と一致するように指示しています。

[Global Default Settings] (Global Default の設定) を設定するには :

- 1 Notes Migration Manager で、[File] (ファイル)、[Global Default Settings] (Global Default の設定) の順に選択します。プログラムにより、Windows のメモ帳でプログラムの構成設定が開きます。設定は INI ファイルの内容と同じように見えますが、実際には SQL Server データベースの一部として保存されます。
- 2 前述したように、[ActiveDirectory2] セクションで、*AdAttribute* の適切なパラメータ値を設定します。
- 3 メモ帳を閉じます。その後、Notes Migration Manager により、新しいパラメータ値が SQL Server データベースに再度コピーされます。

***AdSearchCol* 列の値を入力または編集する必要がある場合 :**

- 1 Notes Migration Manager の [Export Notes Directory] (Notes ディレクトリをエクスポート) 画面で、[Export objects to TSV] (オブジェクトを tsv にエクスポート) をクリックします。ダイアログ ボックスで、エクスポート対象ファイルのターゲット フォルダとファイル名を入力するように求められます。
- 2 Microsoft Excel (または tsv 形式ファイルを編集可能な他のプログラム) を使用して、*AdSearchCol* 列として指定された列のコンテンツを入力または編集します。
- 3 [Export Notes Directory] (Notes ディレクトリをエクスポート) 画面で、[Import objects from TSV] (tsv からオブジェクトをインポート) をクリックし、編集済みの .tsv ファイルを SQL Server データベースにインポートします。ダイアログ ボックスで、ファイル名とその保管場所を入力するように求められます。

ステップ 10 : ユーザー コレクションの定義

ユーザーが定義した、移行するすべての Notes ユーザーのサブセットとなる MNE ユーザーコレクションには、多数のウィザードが適用されます。ユーザー コレクションは、単一のユーザーからすべてのユーザーまで、さまざまなサイズが可能です。一般的にローカル Exchange に移行する場合、バッチ当たりコレクションには、100 人前後のユーザーが存在しています。

『MNE 移行前プランニングガイド』(第 3 章の「バッチ移行とデスクトップごとの移行」)には、コレクション当たりの最適なユーザー数に影響するいくつかの要因、およびそれらの要因がコレクション定義時のグループ化方針を判断するために重要な理由が説明されています。

Collection Wizard を使用して、ユーザー コレクションを定義します。ターゲット Active Directory にプロビジョニングしたくないオブジェクトがある場合は、それをコレクションから忘れずに削除するようにしてください。詳細やその他の注意事項については、『MNE 管理ガイド』の第 5 章の Collection Wizard に関する説明を参照してください。

- ① **注**：一般的に Notes グループ（配布リスト）は、すべてのユーザーの移行後に個別に移行されます。グループ コレクションの定義とグループの移行は、[移行後のアクティビティ](#)で行います。

この手順の後半では、Notes ソース内のユーザー当たりのデータ量を評価して、必要に応じて定義したコレクションを調整することができます。

複数のメールストアに移行する場合 ...


場合によっては、複数の Exchange メールストアに、同じユーザーコレクション内のユーザーをプロビジョニングしたいこともあります。そのためには、各ユーザーの HomeMDB に対する適切な値を含むように、SQL データベースを更新します。

HomeMDB 列は、移行する各ユーザーの Exchange メールボックスストアを示しており、Data Migration Wizard の [Exchange Administrative Operations] でユーザーをメールボックス有効にする際に使用されます。例：

```
CN=Mailbox Store (MOBE),CN=First Storage Group,CN=InformationStore,CN=MOBE, CN=Servers,CN=First Administrative Group,CN=Administrative Groups, CN=User, CN=Microsoft Exchange,CN=Services,CN=Configuration,DC=Example,DC=com
```

MNE に渡す Exchange 管理者の認証情報は、この HomeMDB 列に指定された Exchange サーバー上でメールボックスを作成するために十分な権限を保有している必要があります。HomeMDB 列を空欄にすると、MNE GUI で指定された値が移行先 Exchange メールボックスストアに使用されます。

注：カスタム デザイン クラスの定義

If  **条件付きサブステップ**：このサブステップは、Notes 環境が非標準のデザイン クラスを使用している場合にのみ適用されます。

MNE Notes Migration Manager（MNE コンソール）では、Notes NSF ファイルに関連している可能性があるにもかかわらず、名前が Notes の標準デザインクラスと異なるためにウィザードで識別されない、非標準 Notes デザインクラスを識別します。Notes Migration Manager の [Design Classes]（デザイン クラス）テーブルでは、このような非標準デザイン クラスを識別し、各デザイン クラスを 1 つ以上の特定のデータ タイプ（メール、アーカイブ、または個人用アドレス帳）と関連付けます。アーカイブ、メール、または PAB ファイルのデフォルトのデザイン クラスといずれも一致しない NSF ファイルが見つかった場合、これらのテーブルに対して代替デザイン クラスが検索され、ファイルの種類が決定されます。

ご利用の Notes 環境に非標準のデザイン クラスがある場合は、このコレクション定義ステップの一環として、Notes Migration Manager の [Manage Design Classes] 画面でそれを定義してください。この機能は、『[MNE 管理ガイド](#)』の第 1 章（「ユーザー コレクション：デザイン クラスの管理」を参照）で詳細に説明されています。

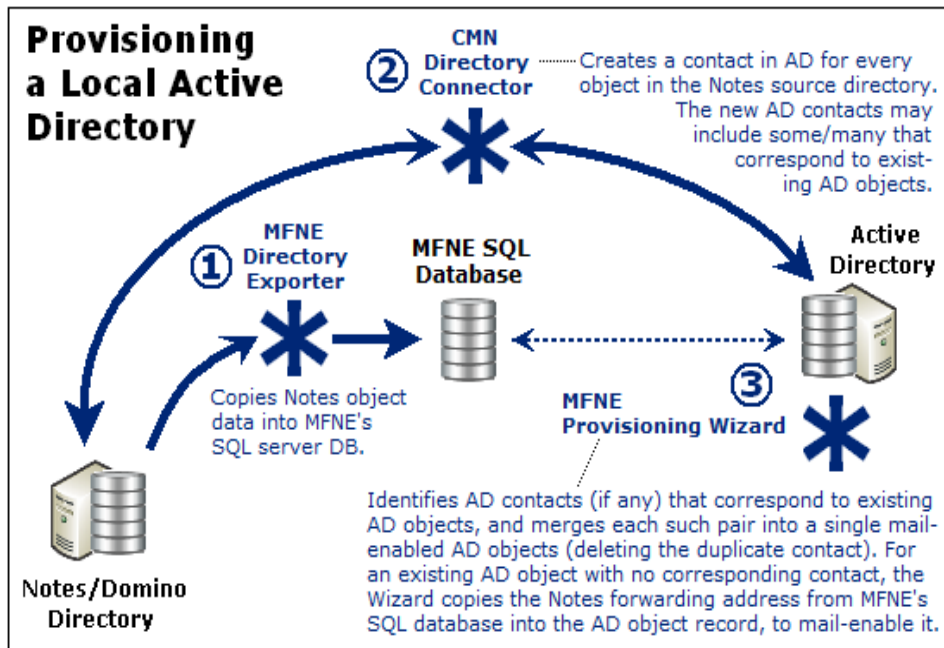
ステップ 11：メール有効ユーザーによる Active Directory のプロビジョニング

ユーザー データを移行する前に、ターゲット Active Directory でユーザーをセキュリティ プリンシパルとしてプロビジョニングする必要があります。プロビジョニング方法の選択およびそれらの選択内容が持つ意味については、『[MNE 移行前プランニングガイド](#)』を参照してください（第 2 章の「ターゲット Active Directory のプロビジョニング」を参照）。

後述するように MNE ツールを利用して、Notes ソースから Active Directory をプロビジョニングすることができます。私たちの目的から、このプロビジョニング ステップには、オブジェクトのマージ（必要な場合）とプロビジョニングしたオブジェクトのメール有効化も含まれます。このステップの最後までには、Domino ソース ディレクトリ内の各移行対象ユーザーに対応する、単一のメール有効オブジェクトが Active Directory 内に存在していなければなりません。

- ① **注:** このプロセスでは、Exchange の空き時間情報に関する制限のため（第 1 章の「**バッチ移行プロセス**」の「**重要**」で説明されています）、移行の直前まで（ユーザー コレクション当たり、「**独自型 Exchange への移行**」で）ユーザーの Exchange メールボックスを作成しません。空き時間情報の共存を設定しない場合は、これらの移行前準備作業プロセス中の早期の段階で Exchange メールボックスを作成することができます（ただし同時に、まだ移行していない Notes ユーザーに対して、Exchange から Notes へのメール転送も設定する必要があります）。

Active Directory をプロビジョニングする一般的で最も直接的な方法では、まず MNE ディレクトリのエクスポートを行い（前述のステップ 8）、次に後述のように CMN Directory Connector を使ってディレクトリを更新します。以下の図には、Domino ディレクトリ データの MNE SQL サーバー データベースへのエクスポートも含まれています。



移行前に Active Directory オブジェクト レコードと最新の Notes ソース オブジェクト レコードを同期する必要があるので、このプロビジョニング ステップは、すでにユーザー オブジェクトでプロビジョニングされた既存の Active Directory がある場合でも必要になります。

Quest は、この手順で Active Directory をプロビジョニングすることをお勧めします（前述のステップ 8 で、ディレクトリを MNE の SQL サーバー データベースにエクスポートした後）。

- 1 **Notes/Domino ディレクトリを AD と同期します。** CMN Directory Connector（またはその他の手段）を使って、2 つのディレクトリの双方向の更新を実施します。他のツールや手段を利用することも可能ですが、CMN は MNE ツールを補足する目的で提供されています。この同期では、Notes ソースからユーザー データが読み取られ、Active Directory に対応するメール有効連絡先が作成されます。また、逆方向の処理も行われます。これにより、両方のディレクトリが、他のシステム内のユーザーに対応するルーティングオブジェクトで更新されます（完全なディレクトリを確立するため）。

Active Directory にまだユーザー オブジェクトが含まれていない場合、このディレクトリの更新によりオブジェクトが作成されます。多くの組織が、すでにネットワーク認証目的で Active Directory を保有しており、ユーザーがすでにセキュリティ オブジェクトとしてプロビジョニングされています。この場合、既存の Active Directory 内のオブジェクトに対応する新しい連絡先を Active Directory に作成するために、ディレクトリ更新を設定する必要があります。（CMN の Directory Connector は、エンティティのアドレスを比較することで潜在的な重複項目を検出、マージできますが、ネットワーク認証にのみ用いられるセキュリティ オブジェクトには、一般的にメール アドレスが割り当てられません。詳細は、『**CMN ユーザーガイド**』を参照してください。必要に応じて CMN の Directory Connector でコネクタを作成し、それを実行して両方のディレクトリを更新します。

① **注**：MNE には、連絡先オブジェクトから直接、Active Directory および Exchange (メールボックスあり) 内のユーザーをプロビジョニングする機能が用意されています。この機能は、Active Directory にセキュリティ プリンシパルがまだ存在しておらず、CMN を使って Active Directory にルーティング連絡先を作成するような場合に役立ちます。このアプローチは、他の一部のシナリオでリソースオブジェクトをプロビジョニングする場合にも役立ちます。『MNE パラメータリファレンス』で詳細に説明しているように、この動作は、MBoxFromContact パラメータの設定で制御します。

- 2 MNE の Provisioning Wizard を実行して、(すべてのユーザーコレクションに対して)、Active Directory 内の重複エントリを統合し、すでに Active Directory に存在しているオブジェクトをメール有効にします。Provisioning Wizard は、各連絡先の情報を対応するオリジナルの Active Directory オブジェクトレコードとマージして、次に連絡先を削除して、各 Notes ユーザーに対応する単一のメール有効オブジェクトを Active Directory に残します。これにより、その後のディレクトリ更新ではマージされた AD オブジェクトのアドレス属性が検出されるため、対応する Notes オブジェクトが再度コピーされることはありません。

ディレクトリ共存のために Active Directory に連絡先が追加されなかった場合、Provisioning Wizard を使って (連絡先を使わずに) 既存のセキュリティプリンシパルをメール有効にすることができます。この場合、アドレスと属性が MNE の SQL データベースからメール有効オブジェクトに抽出されます (Active Directory に対応する連絡先が存在しないため)。

これらのシナリオで、最終的には各 Notes ユーザーに対応する単一のメール有効ユーザー オブジェクトが作成され、既存のセキュリティ、認証情報、およびルーティングが保持されます。詳細および注意事項については、『MNE 管理ガイド』の「ProvisioningWizard」に関する章を参照してください。

- 3 Notes 転送アドレスを確認します。メールルーティング手法によって、移行されたユーザーとまだ移行されていないユーザーのコミュニケーションが可能になります (既存のメール有効 Active Directory オブジェクトを利用)。そのため、正しく配信されるかどうか、ルーティング アドレスを検証、テストする必要があります。

ステップ 12 : ユーザー当たりの移行量の評価

ユーザーを移行する前に、各ユーザーおよび各ユーザー コレクションの移行データ量を把握しておく必要があります。Migrator for Notes to Exchange では、ソースのデータ ストアを検出し、ストア内のユーザー当たりのデータ量を判定する Notes Data Locator Wizard を使用できます。

Notes Data Locator Wizard を実行してソース データを検索し、移行前にすべてのユーザーコレクションのユーザー当たりのデータ量を確認し、アーカイブと PAB の所有権を検証してください。次に [View Summaries] | [User and Resource Detail] を選択してユーザー当たりのデータ量を確認し、必要に応じて予期しないまたは異常なデータ量に対処するために、コレクションのメンバーを調整してください。Notes Data Locator Wizard については、『MNE 管理ガイド』の該当する章を参照してください。Notes Migration Manager のサマリ表示 (View Summaries) 機能は、『管理ガイド』の第 1 章で説明されています。


ステップ 13 (または適切な時期に) : 受信外部メールの Exchange へのリダイレクト

着信外部 (インターネット) メールを Exchange サーバーにリダイレクトするように MX レコードを変更します。実際に DNS の変更は、ユーザーの Active Directory アカウントがメール有効になった後任意の時点 (移行前、移行中、または移行後) で行われます。管理者によっては、移行前および移行中の変更を最低限に抑え、移行の完了後に MX レコードを更新することを選択する場合があります (この章の最後の「移行後のアクティビティ」で説明)。

また、移行プロセスの途中で DNS を変更し、転送の「ホップ」を最小限に抑えることを希望する管理者も存在しています。ターゲット Active Directory オブジェクトをメール有効にした (前述のステップ) 直後に切り替えを行うことも可能です。

どのような場合でも、着信メールを Exchange にリダイレクトするように設定すると、メール有効 Active Directory オブジェクトの Notes 転送アドレスにより、未移行の Notes ユーザーが移行されるまでの間、着信メールが Notes メールボックスにルーティングされます。ユーザーが実際に各自の Exchange メールボックスとともに Exchange に移行され、それらのユーザーに対する Notes へのメール ルーティングを注しするように MNE が指示するまで、着信メールが Exchange メールボックスに送信されることはありません。


ステップ 14 (必要な場合) : ローカル データを集中管理されている場所に複製またはコピー

If  **条件付きステップ** : MNE の Data Migration Wizard を使って、エンド ユーザーのワークステーション上にあるデータを一括移行したい場合のみ適用されます。

MNE には、エンド ユーザーのワークステーション上にあるデータを移行するための、さまざまなオプションが用意されています。たとえば、MNE の Self-Service Desktop Migrator (SSDM) を使用することができます。SSDM には、ユーザーの操作や手間を最小限に抑える *Silent Mode* (サイレント モード) オプションがあります。この方法の詳細は、このガイドの第 4 章の「SSDM (デスクトップごと) 移行」を参照してください。

ただし、一部のシナリオではローカル Notes PAB とアーカイブの一括移行を集中管理する必要があります。MNE の Data Migration Wizard (この章の次のセクションで説明している「**バッチ移行プロセス**」)を利用して、コンテンツを Exchange メールボックス、個人用アーカイブ、または PST ファイルに移行することができます。この場合、プログラムはソース データにアクセスできなければなりません。MNE には、エンドユーザーの PAB データの、サーバベースの NSF または各ユーザーのメールファイルへの複製プロセスを自動化する、*PAB Replicator* 機能が用意されています。代わりに他の手段を使って、ユーザーのローカル データを、集中管理している場所にコピーすることもできます。

ステップ 15 (メールルーティングにスマートホストを使用する場合) : スマートホストの設定

If  **条件付きステップ** : SMTP メール ルーティングにスマート ホストを使用する場合にのみ適用されます。

Domino および Exchange サーバーを作成、設定します。メール フローをテストして、設定内容を忘れずに検証してください。メール有効の Active Directory アカウントの作成 (前のステップ) により、Active Directory オブジェクトレコードに、必要な *targetAddress* 値が入力されます。

スマートホスト SMTP メールルーティングの設定の詳細については本ガイドでは説明しませんが、Domino や Exchange のサーバにスマートホストを設定する方法の詳細については、該当するサーバのマニュアルおよびオンラインリソースを参照してください。

Quest の CMN を使用してスマートホスト SMTP ルーティングを設定するため、両方のスマートホストが CMN サーバを参照するように設定されます。CMN 内で SMTP の受信 / 送信キューのセット 1 つは、Domino からのメールを受け入れ、受信する Exchange サーバーに配信するように設定されます。一方、もう 1 つのセットは、Exchange からのメールを受け入れてから Domino に配信するように設定されます。負荷分散および冗長性のために、複数の CMN サーバを導入することができます。「CMN ユーザーガイド」(第 3 章)では、これらの設定が詳細に説明されています。

移行前準備の完了時 ...

上記の移行前準備作業を完了したら、以下の「**バッチ移行プロセス**」に進んでください。また、第 4 章で **SSDM (デスクトップごと) 移行** に関する情報も参照してください。

バッチ移行プロセス

Migrator for Notes to Exchange には、2 つの移行エンジンが用意されています。

- Data Migration Wizard は、一連のユーザーの同時移行、有用な管理作業（メールボックスの作成やルーティングの更新など）の実施、パブリック配布リストのプロビジョニングを行います。
- Self-Service Desktop Migrator (SSDM) は、エンドユーザーのローカルワークステーション上で動作し、1人のユーザーのコンテンツを移行します。SSDM はローカルコンテンツの移行を効率化して、移行チームの負担を減らします。また、サイレントモード (SilentMode) 機能により、エンドユーザーの操作や要件を最低限に抑えることができます。

どちらの移行エンジンもデータ移行に個別に使用することができます。また、両方を併用して、幅広いプロジェクト要件に対応することができます。『移行前プランニングガイド』の第3章の「バッチ移行とデスクトップごとの移行」を参照してください。

このセクションは、独自型 Exchange への一般的な移行方法について説明しています。管理者は Data Migration Wizard を使って複数バッチ (MNE コレクション) のユーザー移行を実施します。第4章で説明する SSDM (デスクトップごと) 移行も、移行計画の一部となる場合があります。

- ❶ | **重要:** このバッチ移行プロセスを開始する前に、この章ですでに説明したすべての **移行前に必要な準備** を完了していることを確認してください。


このバッチ移行手順は、フローチャートのループする矢印が示すように、移行対象の**各グループのユーザーに対して繰り返されます**。この手順では、以下の事項が前提となっています。

- ターゲット Active Directory は、移行する各 Notes オブジェクトに対して、単一のメール有効オブジェクトでプロビジョニングされたけれども、これらのオブジェクトに対してまだメールボックスが作成されていない。
- ターゲット Active Directory オブジェクト内の Notes 転送アドレスが、Exchange から Notes にメールが正常に転送されるようになっていることが確認されている。
- MNE ユーザー コレクションが定義されている (バッチ移行プロセス中に調整される可能性がある場合でも)。
- 何らかの方法で共存を行う場合、共存方法と使用するツール (Quest の Coexistence Manager for Notes など) は、使用する予定のすべての共存機能に対して設定されます。

独自型 Exchange ターゲットへのバッチ移行プロセスの概要をフローチャートに示します。フローチャート内のステップ番号は、後述する手順のステップ番号に対応しています。

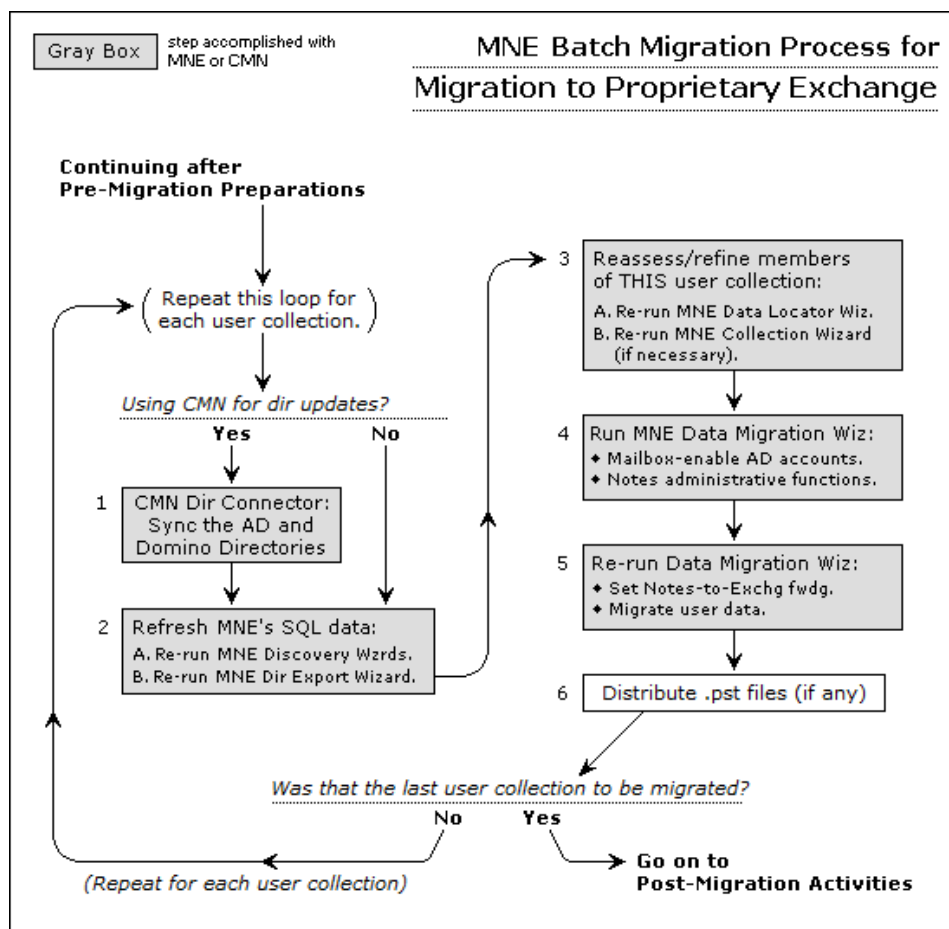
このガイドおよび『MNE 管理ガイド』の説明には、これらの手順のオプションステップや条件付きステップに関する注意事項が記載されています。

ステップ 1 : Active Directory と Domino ディレクトリの同期

- If  **条件付きステップ:** このステップは、ディレクトリの更新に Quest の CMN を使用する場合にのみ適用されます。使用しない場合は、ステップ 2 に進んでください。

一般的に移行期間中にも、スタッフの採用や離職が発生します。移行プロジェクト中に発生したディレクトリの変更 (移行前の準備作業における初期ディレクトリ更新後に行われた変更) により、ソース環境とターゲット環境間でデータの不整合が発生する可能性があります。CMN の Directory Connector を使って、このような問題に対処することができます。詳細は、Quest の『CMN ユーザーガイド』を参照してください。

スケジュールした間隔でディレクトリ更新を自動実行するように、CMN Directory Connector を設定することができます。ただし、各コレクションを移行する直前までディレクトリの整合性を維持できるように、手動で更新を実施することが役立つこともあります。



ステップ 2 : MNE の SQL データの更新

ターゲット Active Directory を最新のオブジェクト データでプロビジョニングするように、各ユーザー コレクションを移行する前に、MNE の SQL データベースを更新します。前述のステップ 1 (オプション) でディレクトリを更新した場合、この手順ですべての更新されたディレクトリ データも SQL データベースにコピーされます。SQL サーバー データベースを更新するには :

- 1 MNE の NABs Discovery Wizard および Internet Domains Discovery Wizard を再実行して、Notes アドレス帳 (NAB) およびユーザーの SMTP エイリアスの生成に用いられるインターネットドメインのリストを更新します。
- 2 Directory Export Wizard を再度実行して、SQL データベースを更新します。

ステップ 3 : このユーザーコレクションのメンバーシップの再評価と (必要な場合は) 調整

この章の前半の「移行前に必要な準備」では、ユーザー コレクション (移行グループ) を定義しました。「バッチ移行プロセス」では、これらの移行タスクが単一のコレクションに適用されます。

ディレクトリを更新して SQL データを更新したら (前の 2 つのステップ)、以下の作業を行う必要があります。

- 1 このコレクションに対して (のみ) MNE Data Locator Wizard を再実行して、次に [View Summaries] | [User and Resource Detail] を選択して、このコレクションの Notes ソースの、ユーザー当たりのデータ量を再評価します。Notes Data Locator Wizard については、『MNE 管理ガイド』の第 7 章を参照してください。Notes Migration Manager のサマリ表示 (View Summaries) 機能は、『管理ガイド』の第 1 章で説明されています。

- 2 このコレクションのメンバーシップを、このコレクションのメンバーで移行される合計データ量の観点から再評価します。組織のグループ化方針に合わせて、一部のメンバーをあるコレクションから別のコレクションに移動する方が良い場合もあります（『MNE 移行前プランニングガイド』の「バッチ移行とデスクトップごの移行」を参照）。
- 3 必要に応じて、このコレクションに対して Collection Wizard を再実行して、メンバーシップを変更します。Collection Wizard の説明と注意事項については、『MNE 管理ガイド』の第 5 章を参照してください。

① **注：**一般的に Notes グループ（配布リスト）は、すべてのユーザーの移行後に個別に移行されます。「移行後のアクティビティ」の説明には、グループの移行が含まれています。

ステップ 4 : Exchange メールボックスの作成と Notes 管理操作の実行

MNEData Migration Wizard を実行して、Exchange メールボックスを作成し、現在のコレクション内のユーザーの Notes 管理タスクを実行します。詳細な手順については、『MNE 管理ガイド』の「Data Migration Wizard」の章を参照してください。このステップ完了後は、これらのユーザーの空き時間情報クエリはすべて、新しい Exchange メールボックスに対して行われることに注意してください。次のステップでは、この新しい Exchange 環境にユーザーが完全に移行されます。

ここで選択する Notes 管理操作は、ご自分のローカル環境とニーズによって異なります。利用できる Notes 管理操作を以下に示します。

- **Set foreign directory sync（外部ディレクトリ同期を設定）**（メールのルーティングを設定または削除していない場合のみ表示される機能）：CMN の Directory Connector または MS Transporter に対し、ディレクトリの同期中にユーザー データを Notes ディレクトリから抽出するように指示します（これは、Notes パラメータの [Allow foreign directory synchronization] に対応しています。）外部ディレクトリの同期を無効にするには、チェックボックスをオンにしたまま、ドロップダウン リストから [Disable] を選択します。

設定によっては、AD でマージされているか、メールボックス有効になっている移行済みのオブジェクトが Notes のディレクトリ更新で認識されない場合があるため、更新により誤って AD にオブジェクトが重複して作成されてしまいます。そのため、以下の 3 つの条件がすべて当てはまる場合は、外部ディレクトリ同期を無効にする必要があります。
 - CMN の Directory Connector または Transporter を使用して、共存中に Notes から Exchange へのディレクトリ更新を実行している。
 - 共存中のメール ルーティング方式が、Notes の転送アドレスを使用して Notes から Exchange への転送を行うように設定されている。
 - ユーザーを Exchange オブジェクトに変換する、Notes の個人ドキュメントが設定されていない。
- **Set user visibility in the Domino directory（Domino ディレクトリ内のユーザーの表示を設定）**：Domino ディレクトリで表示するユーザーの範囲を管理者が設定できるように指示します。この表示設定は、Quest の CMN を使って両方のディレクトリの変更を更新する場合に、特に重要になります。Exchange 内にユーザー移行用メールボックスが作成されたら、同じユーザーの事前記入用の表示設定を行うと便利です。これによって、Directory Connector 実行後に、移行されたユーザーの Domino ディレクトリに重複エントリが表示されることを防止できます。移行ユーザーの Exchange エントリが表示設定の変更直前 / 直後に Notes に同期されるように、CMN の Exchange-to-Notes Connector スケジュールでこの操作のタイミングを調整する必要があります。
- **Set Person Document Attributes（個人ドキュメント属性を設定）**：Task Parameters の [PersonDocCustom] セクションで定義されているように、Notes の個人ドキュメントに属性値を割り当てるかどうかを指示します（値の割り当て方法については、『MNE プログラム パラメータ リファレンス』の適切なセクションを参照してください。）このチェックボックスがオフの場合は、ウィザードは Task Parameters の [PersonDocCustom] セクションを無視します。

ステップ 5 : Notes から Exchange へのメール転送とユーザーデータの移行

- ① **注 :** Quest では、これらの最終的な切り替えタスクは、Data Migration Wizard によるメールボックス有効化と Notes 管理操作（前のステップ）と同じ実行で実施するのではなく、別個の Data Migration Wizard プログラムを実行して行うことをお勧めします。これらのすべての作業を 1 回のプログラム実行で実施した場合に、遅延や競合に関する問題が報告されています。

ユーザーが Exchange メールボックスを保有しており、そのユーザーに対するすべての外部 / 内部メールが新しい Exchange メールボックスにルーティングされ、ユーザーのすべてのデータ（メール、カレンダー項目、アドレス帳、アーカイブなど）が Exchange にコピーされている場合に、そのユーザーは移行済み（移行完了）となります。ユーザーをターゲット環境に移行するイベントは、ユーザーの「切り替え」と呼ばれています。この手順では、Notes から Exchange へのメール転送を行うためのプログラム実行で、同時にユーザー データの移行も行います。

最終切り替え時には、移行中または移行後に到着するメールが正しく Exchange にルーティングされるように、ユーザーの Notes から Exchange へのメール転送を設定することが重要になります。Notes から Exchange への転送は、MX レコードが Exchange を指すように更新され（この章の最後の「[移行後のアクティビティ](#)」）、すべての Notes ユーザーが Exchange に移行されるまでの間継続する必要があります。

- ① **注 :** (サーバー アクセスではなく) ファイル システム アクセスを使ってデータを移行する場合 :
- Data Migration Wizard を開始する前に、移行するすべてのユーザーがログ オフしていることを確認します。Quest では、Domino サーバー経由でデータにアクセスできる場合は、サーバー アクセスを使ってデータを検索、移行することをお勧めします。そうできない場合や、ファイル システム アクセスを使用してデータの検索と移行を実行する必要がある場合は、移行するすべてのユーザー（現在のコレクション内）がシステムからログオフされていることを確認する必要があります。
 - また、サーバーのキャッシュに、開かれたままの NSF ファイルがないことも確認する必要があります。dbcache flush コマンドを使用すると、サーバーからログオフされたユーザーの代わりに、サーバーで開かれたままになっているすべてのファイルを閉じることができます。dbcache flush コマンドを実行すると、移行中に MNE プログラムが NSF ファイルにアクセスするのをサーバーがブロックしないようにすることができます。

Data Migration Wizard を再実行して、指定したコレクション内のユーザーの最終切り替えを実施します。Notes から Exchange へのメール転送を設定して、Domino から Exchange にユーザー データを移行します。詳細な手順については、『[MNE 管理ガイド](#)』の「[Data Migration Wizard](#)」の章を参照してください。

ステップ 6 : .pst ファイルの配布（存在する場合）

Data Migration Wizard を使用してデータを Outlook 個人用フォルダ ファイル (.pst) に移行した場合は、移行完了後に、次のいずれかの操作を実行する必要があります。

- ユーザーに、新しい .pst ファイルの場所を通知します（これにより、各ユーザーは、自分のデスクトップにある Outlook のコピーの場所を指定できます）。
または
- 新しく作成された .pst ファイルをユーザーのデスクトップに配布します。

Data Migration Wizard では、関連付けられているユーザー ID によってすべての新しい .pst ファイルに名前が付けられます。たとえば、ユーザー ID に対して複数のファイルが生成されている場合は、*Smith.pst*、*Smith-1.pst*、*Smith-2.pst* のように、ファイル名に 1 つずつ番号が増分して付きます。

① **注** : PST ファイルの場所は、次の画面で確認できます。

- User migration status per collection レポートは、Notes Migration Manager の *View Summaries* (サマリを表示) 画面から表示できます。
- Report Pack Report は、Notes Migration Manager の [View Report Pack] (Report Pack を表示) 画面から表示できます。

最後の移行コレクションですか？

これが最後の移行コレクションでない場合：この「[バッチ移行プロセス](#)」の全ステップを、次のコレクションに対して繰り返します。

これが最後の移行コレクションだけでも、MNE の SSDM で個別に移行する Notes ユーザーが存在する場合：この『シナリオガイド』の「[SSDM \(デスクトップごと\) 移行](#)」の章を参照してください。移行するユーザーがなくなったら、以下の「[移行後のアクティビティ](#)」を確認してください。

移行後のアクティビティ

ステップ 1 : Exchange への Notes グループのプロビジョニング


一般的にグループは、[バッチ移行プロセス](#) (この章の前半) でユーザーを移行した後に、Exchange に別個にプロビジョニングされます。MNE の Groups Provisioning Wizard を実行して、Notes グループを Exchange に配布グループとしてプロビジョニングします。グループ情報は、MNE の Directory Export Wizard により、前に Domino ソースから抽出され、SQL データベースにコピーされています。処理を手軽にするために、MNE Collection Wizard を使って、Notes グループをコレクションに分割できます。グループを Active Directory にプロビジョニングする前に、必要に応じて SQL データベース内のグループ メンバーシップおよび属性を更新することができます (TSV のエクスポートとインポートを利用)。

手順の説明と注意事項については、『[MNE 管理ガイド](#)』の「Groups Provisioning Wizard」の章を参照してください。

何らかの理由で、すべての Notes ユーザー (すべてのコレクション内の) の移行が完了する前にグループをプロビジョニングする必要がある場合は、Notes ユーザーがメッセージを送信できるようにする任意の Exchange グループの、メッセージの配信制限を忘れずに確認してください。そのような Exchange グループをメール有効にするには、配布タイプがユニバーサルでなければなりません。設定を変更するには、Exchange 管理コンソールで：

- 1 [受信者の設定] | [配布グループ] で編集するグループを選択し、それをダブルクリックします。
- 2 [メールフローの設定] タブをクリックして [メッセージの配信制限] を選択し、上の [プロパティ] をクリックします。
- 3 [認証されたユーザーからのメッセージのみ] チェックボックスをオフにします。
- 4 変更内容を **保存** して、MS Exchange トランスポート サービスを開始します。

ステップ 2 (省略可能) : 継続的な DirSyncs の設定

If  **条件付きステップ** : このステップは、移行後の継続的なディレクトリ更新に Quest の CMN を使用する場合にのみ適用されます。

移行後も一定の期間は (または無期限に) Notes 環境を維持して、Domino ディレクトリをアクティブにしておきたい場合、Notes と Exchange 環境の共存を維持する期間に合わせて、ディレクトリ更新を定期的実施するように Quest の CMN Directory Connector を設定します。

ステップ 3 : メールルーティングの更新

移行中の適切なルーティングを保証するために、一般的には MNE を使って両方のシステム内のメール転送を自動的に更新します。メール ルーティング ドメインまたはスマート ホストが適切に設定されている場合、MNE は両方の環境の転送ルールを設定、削除することができます。

ユーザーとグループをすべて移行したら、外部 (インターネット) 着信メールを Notes 環境ではなく Exchange 環境にルーティングするように、永久的に更新することができます。このステップには、Exchange を指すように MX レコードを変更する作業が含まれます。一部の環境では、メール ルーティングの更新作業に、ルーティング テーブルの更新やファイアウォールの変更が含まれることもあります。

大部分の組織では、移行前および移行プロセス中の変更を最低限に抑えるために、最後のユーザーを移行した後にのみメール ルーティングの更新が行われます。ただし、実質的に MX の変更は、すべての Notes ユーザーが Active Directory 内にメール有効オブジェクトとしてプロビジョニングされた後は、任意の時点で行うことができます (あるユーザーがプロビジョニングされる前に、着信メールを Exchange に転送するようにルーティングを更新した場合、ユーザーのメールを Notes に戻すための転送アドレスが Active Directory には存在しません)。

ステップ 4 : 移行後の「クリーンアップ」

最後のユーザーの移行後にクリーン アップを実施するには :

- 1 Notes サーバーが**非アクティブになっていることを確認**します。Notes サーバーがメールトラフィックを処理しておらず、またアクティブなアプリケーションで利用されていないことを確認してください。
- 2 SMTP **メール共存を使用している場合** : 移行中の Notes と Exchange 間のルーティングをサポートするために「[移行前に必要な準備](#)」で作成した、一時メール ルーティング MX ドメインを削除します。すべてのユーザーが Exchange に移行され、着信トラフィックが直接 Exchange にルーティングされるようになったら、一時ルーティング ドメインは不要になります。
- 3 Notes **環境が不要な場合** : Notes が非アクティブになっていることを確認後、最終的なバックアップを作成し、環境を廃止することができます。

Microsoft Office 365 への移行

- 移行前に必要な準備
- バッチ移行プロセス
- 移行後のアクティビティ

移行前に必要な準備

- ① **注：**この章の情報は、Microsoft Office 365 に移行する場合にのみ適用されます。独自型 Exchange に移行する場合は、第 2 章「[独自型 Exchange への移行](#)」を参照してください。

どの移行シナリオでも、ソース / ターゲット環境の事前準備、共存方針の決定と導入、管理者アカウントの設定、および必要なソフトウェアの準備などの作業が必要になります。これらの作業には、複数環境にまたがる必要なアカウントとアクセス許可の設定、移行を容易にするためのアプリケーションの同時実行の設定、およびその他の検討作業が含まれるため、かなり時間がかかることもあります。ただし、一般的にこれらの作業は、移行プロセス全体を複雑化しないように、最初のユーザーの移行前に 1 回のみ実施されます。

これらの準備作業を開始する前に、『MNE 移行前プランニングガイド』の説明（第 2 章「ターゲット Active Directory のプロビジョニング」）に従って、Exchange 空き時間情報の制限への対処方法を忘れずに決定してください。

Microsoft Office 365 に移行する場合に必要な、移行前準備作業を表したフローチャートを次に示します。フローチャート内のステップ番号は、後述する手順のステップ番号に対応していることに注意してください。

- ① **注：**特定の環境にのみ適用されるステップは、この「If」（もし～ならば）分岐矢印アイコンで表しています。また、ステップを適用する場合の説明も記載しています。

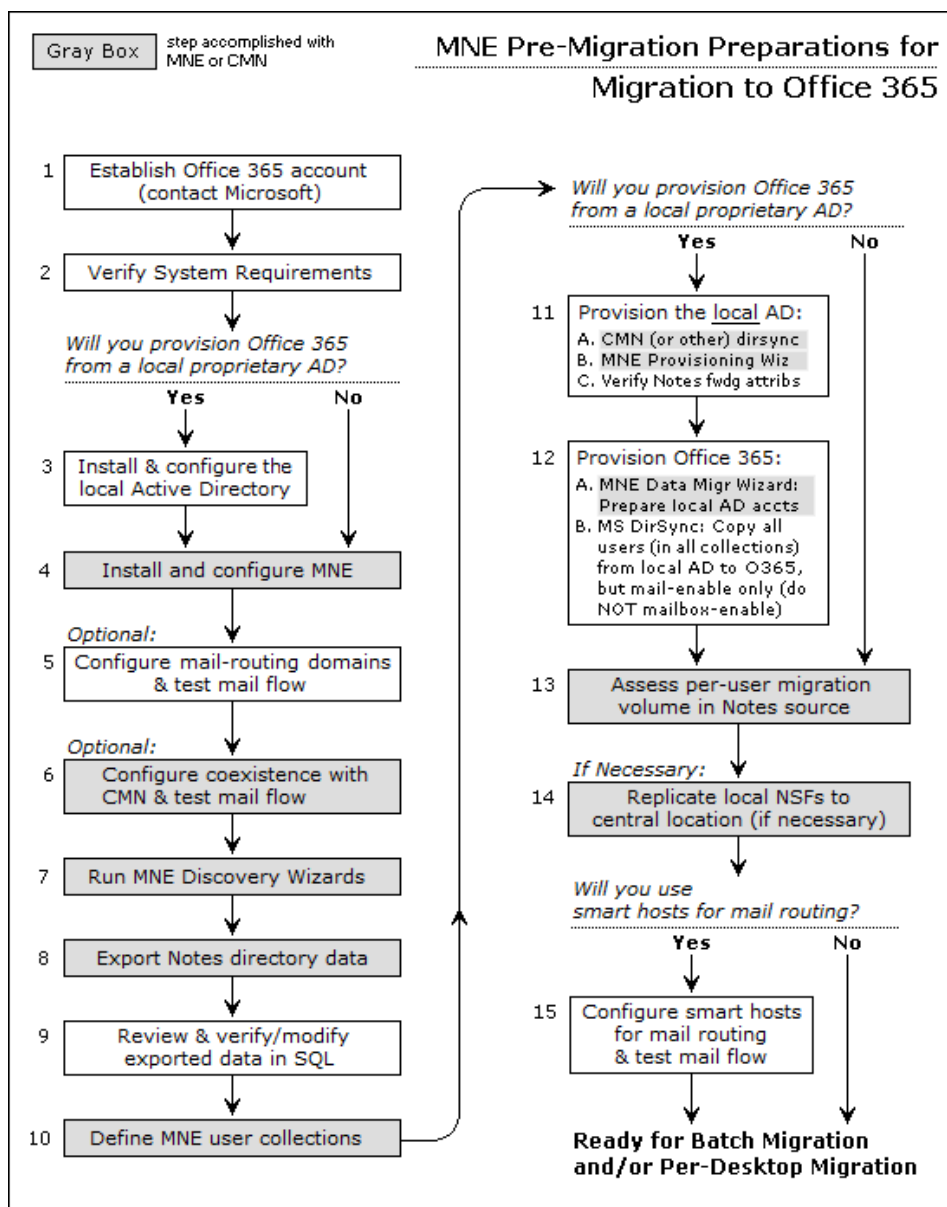
ステップ 1 : Office 365 アカウントの作成

Microsoft に連絡して、Office 365 アカウントを作成します（まだ作成していない場合）。

既存のローカル Active Directory から Office 365 をプロビジョニングする場合は、Office 365 のセットアップ作業には Microsoft の AD 同期ツールのインストールも含まれます。この AD 同期ツールのインストールおよび設定のガイドについては、Microsoft のマニュアルを参照してください。

ステップ 2 : すべてのシステム要件を満たすことの確認

このプロセスを開始する前に、すべてのシステム要件を満たす必要があります。システム要件は、（製品の最新バージョンの RTM の）『MNE リリースノート』に記載されています。「システム要件」には、Quest のアプリケーションの実行に使用される管理者アカウントと、Notes/Domino および Exchange/AD 環境のデータと機能へのアクセス権についても記載されています。また、特定のアクセス許可が必要になります。それについては、「システム要件」に記載されています。これらのアカウントが存在していない場合は、今すぐ作成、設定してください。



ステップ 3 (ローカル Active Directory からプロビジョニングする場合) : ローカル Active Directory のインストールと設定

If **条件付きステップ** : このステップは、ローカルの独自型 Active Directory から Office 365 をプロビジョニングする場合にのみ適用されます。その他の方法でプロビジョニングする場合は、ステップ 4 に進んでください。

ローカルの独自型 Active Directory がまだ稼働していない場合は、Exchange スキーマでそれをインストール、設定します。ローカル Active Directory のプロビジョニングは、この手順の後ほどのステップで実施します。

重要 : 移行作業中に Exchange 2010 RTM からそれ以降のバージョンの Exchange にアップグレードする場合、Active Directory スキーマもそれに合わせてアップグレードする必要があります。

ステップ 4 : MNE のインストールと設定

『MNE クイックスタートガイド』の「はじめに」のセクションで、Migrator for Notes to Exchange のインストール方法が説明されています。以下のサブトピックでは、何らかの MNE 管理ウィザードを初めて実行する前に、MNE 設定の一環として即座に実施する必要がある、各種設定作業について説明しています（一部の作業はオプションで、後述するように特定の環境に対してのみ適用されます）。

また、移行計画の一環として MNE の Self-Service Desktop Migrator (SSDM) を使用するかどうかを検討してください。使用する場合は、それをインストール、設定する必要があります。

- ① **重要**：また Quest 管理アプリケーションを実行する前に、管理ワークステーションのウイルス対策ソフトウェアは必ず、Quest プログラム ファイル ディレクトリまたは %temp% ディレクトリをスキャンしないように設定するか、または単純に終了しておく必要があります（プログラムの実行後に復元することができません）。ウイルス対策ソフトウェアが MNE の一時ファイルを脅威として誤認し、クリーンアップしようとすると、MNE プログラムの呼び出しが失敗します。

SQL Server DB および MNE のデフォルト設定の構成

Migrator for Notes to Exchange のほとんどの機能とウィザードで、SQL Server の中央データベースに格納されている情報へのアクセスが必要です。同様に、Notes サーバー、Exchange サーバー、Active Directory、Self-Service Desktop Migrator とそのログおよび状況ファイルを含む共有ディレクトリ、および管理アプリケーション ログ ファイルへのアクセスも必要です。そのため、の機能やウィザードには、各種サーバーの名前、設定オプション、アクセス認証情報などを指定する必要があります。

他のプログラム機能やウィザードを使用する前に、デフォルトの設定値をここで Notes Migration Manager (MNE コンソール) に入力しておけば、Notes Migration Manager で、再入力する必要がなくなります。インストール時にこれらの情報を入力しないと、機能やウィザードから必要に応じて値の入力が要求されることとなります。また、値のほとんどは、情報を必要とする機能やウィザードごとに、何度も入力する必要があります。

- ① **注**：したがって、Notes Migration Manager の 5 つの [Edit Default Settings] (デフォルト設定の編集) 画面を使用して、今すぐこの情報を入力することを Quest はお勧めします。Notes Migration Manager については、『MNE 管理ガイド』の第 1 章を参照してください。

Office 365 への移行のための Task Scheduler の設定

MNE のタスク (プログラム実行) は MNE のウィザードで定義します。大半のウィザードでは、特定の日付の特定の時刻にタスクの実行スケジュールを設定できます。Notes Migration Manager の [Manage Scheduled Operations] 画面で、これらのタスク実行スケジュールを修正します。ただし、タスクのスケジュールは SQL データベースに保存され、「スケジュール設定された」タスクは、それ自体では実行されないため、ウィザードと *Manage Scheduled Operations* (スケジュール設定された操作を管理) 画面で、タスク実行のスケジュールのみを管理します。ここで説明するように、タスクは MNE の Task Scheduler ユーティリティによって実行されます。

スケジュール設定されたタスクは、MNE Task Scheduler (MNE のインストールディレクトリにある *qsched.exe*) という独立したコマンドラインアプリケーションを使用して実行されます。このプログラムは、SQL データベースを定期的にチェックして、最後のチェック以降にタスクがスケジュール設定されていないかを確認し、設定されていればそのタスクをスケジュール設定された時間に実行します。

Task Scheduler は、Windows サービスとして動作し、Migrator for Notes to Exchange のインストール時に自動的にインストールされます。デフォルトで Task Scheduler は、(ワークステーションの再起動時に) 自動的に開始され、MNE インストーラを実行した管理者アカウントの認証情報下で実行されます。Task Scheduler は、Windows サービス マネージャを使って、他の Windows サービスと同様に管理することができます。Windows サービスの設定方法については、次のリンクを参照してください。[http://msdn.microsoft.com/en-us/library/ms681921\(v=vs.85\).aspx](http://msdn.microsoft.com/en-us/library/ms681921(v=vs.85).aspx)

MNE の Admin Account Pool 機能を使用した Office 365 への移行の構成

MNE の *qsched.exe* タスクスケジュール設定ユーティリティは、Office 365 への移行に対して MNE の Admin Account Pool と互換性がありますが、手順を追加する必要があります。移行シナリオ (オンプレミスの Exchange、または Admin Account Pool を使用しない Office 365 への移行) では、*qsched.exe* ユーティリティが単独で、スケジュール設定されたタスクの実行を管理します。ただし Office 365 のアクセス制限により、MNE の Admin Account Pool を利用するには、ここで説明するように中間にスケジュール設定メカニズムが必要です。

MNE の Admin Account Pool を使用して Office 365 に移行する場合は、実行待ちの MNE タスクごとに、Windows のタスクスケジューラを使用して MNE の *qsched.exe* を実行します。

- 1 タスクのスケジュール設定された実行時刻に MNE の *qsched.exe* (MNE のインストールディレクトリ内) を実行する Windows のスケジュール設定タスクを追加し、「ユーザーがログオンしているときのみ実行する」に設定します。
- 2 タスクの実行がスケジュール設定されている時刻に、以下を行います。
 - MNE Task Scheduler サービスが無効になっていることを確認します。
 - タスクに関連付けられたユーザーがログオンしていることを確認します (上記の手順 1 による)。

MNE の Admin Account Pool 機能を使用しない Office 365 への移行の構成

Office 365 に移行するが (MSOL AD Sync を使用する場合でも使用しない場合でも)、MNE の Admin Account Pool 機能を使用しない場合、Task Scheduler は、キャッシュされた認証情報を使用して MAPI プロファイルを介して Office 365 管理者用メールボックスにアクセスする必要があります。ただし、Task Scheduler は、認証情報のプロンプトなどのフォアグラウンド プロセスと通信することはできません。そのため、認証情報を提供し、プロンプトを閉じるメカニズムが必要です。

移行リソースにアクセスし、Windows サービスとしてログインできる権限を持つローカル Windows ユーザー アカウントまたはドメイン ユーザーを作成します (次の注を参照)。このユーザーの新しいメール プロファイルを作成します。このプロファイルは、Office 365 管理者用メールボックスに対するキャッシュされた認証情報を使用して設定します。次に少なくとも 1 回 Office 365 管理者用メールボックスにログインし、認証情報を保存します。

MNE Scheduler サービスを Windows ユーザーとして実行するように設定すると、サービスでは、Windows アカウントに格納されているキャッシュされた Office 365 管理者認証情報が使用されます。これにより、Windows ユーザーの ID で保護されセキュリティが保持されます。

- ① **注:** MNE の SQL Server が SQL Server 認証を使用するように設定されている場合、Task Scheduler では MNE 設定が使用されて SQL Server と認証情報が自動的に検出されます。ただし、SQL Server が Windows 認証を使用している場合、Task Scheduler を実行するユーザーに移行データベースへのアクセスを許可する必要があります。SQL Server が Windows 認証のみを使用し、移行サーバーでホストされていない場合、シャドウ ユーザーをドメイン ユーザーに設定し、そのユーザーに SQL Server に接続する権限を付与できるようにする必要があります。

Task Scheduler を実行するユーザーを作成するには:

- 1 移行サーバーで、次の手順を実行して新規ユーザーを作成します。
 - a *lusrmgr.msc* を起動するか、**コントロールパネル**、**管理ツール**、**コンピュータの管理** の順に移動し、**ローカルユーザーとグループ** スナップインを選択します。
 - b たとえば、O365admin という新しいローカル ユーザーを作成します。

推奨事項: パスワードを固定するか、移行プロジェクトの間パスワードが有効であるようにしてください。詳細については、Microsoft TechNet の記事「[Create a Local User Account \(ローカル ユーザー アカウントを作成する\)](#)」を参照してください。
- 2 O365admin をローカル Administrators グループのメンバーにします (Notes のサーバー ファイル共有アクセスおよびリモート ログインが必要)。

詳細については、Microsoft TechNet の記事「[Add a Member to a Local Group \(メンバーをローカル グループに追加する\)](#)」を参照してください。
- 3 移行サーバーでサービスとして実行する権限を O365admin に付与します。

詳細については、Microsoft TechNet 記事「[Add the Log On as a Service Right to an Account \(サービスとしてログオンする権利をアカウントに追加する\)](#)」を参照してください。

Office 365 管理者メール プロファイルを設定するには

- 1 O365admin として移行サーバーにログインします。
- 2 [**コントロール パネル**] の [**メール (32 ビット)**] を開きます。
- 3 既存のメール プロファイルを削除します。
- 4 新規プロファイルを作成します。

- 5 新しいプロファイルに Office 365 管理者メール アカウントを追加します。
- 6 メール アカウントを設定します。アカウントを設定するには、次の手順を実行します。
 - a [More Settings...] (詳細設定) をクリックします。
 - b [セキュリティ] タブで、[Always prompt for logon credentials] (ログオン情報を毎回入力する) チェックボックスがオフになっていることを確認します。
 - c [Prompt for profile to be used] (使用するプロファイルを入力する) ラジオ ボタンをオンにします。
- 7 Outlook または MFCMAPI を使用して O365 管理者用メールボックスにログインします。
- 8 **重要** : 認証情報を入力するよう求めるプロンプトが表示された場合は、[Remember password] (パスワードを保存する) チェックボックスをオンにします。
- 9 O365admin セッションからログアウトします。

MNE Task Scheduler を設定するには :

管理者として移行サーバーにログインし、O365admin として実行されるように MNE Task Scheduler を設定します。また、サービスが「Autostart (Delayed Start) (自動起動 (遅延起動))」モードで起動するように設定する必要があります。

- 1 services.msc を起動するか、[コントロール パネル]、[すべてのコントロール パネル アイテム]、[管理 ツール]、[サービス] の順に移動します。
- 2 MNE Task Scheduler を見つけて、右クリックし、[Properties] (プロパティ) を選択します。
- 3 [Startup Type] (スタートアップの種類) フィールドで、[Autostart (Delayed Start)] (自動起動 (遅延起動)) を選択します。
- 4 [Log On] (ログオン) タブで、[This Account] (このアカウント) を選択して、O365admin Windows ユーザーの認証情報を入力します。
- 5 [OK] をクリックします。
- 6 サービスを再起動します。

Office 365 ライセンス用の必須パラメータ

Data Migration Wizard は必須のプログラム パラメータを読み取って、2 文字の *利用場所* を取得します。この利用場所は、Microsoft Office 365 ライセンスのために必要になります ([この Microsoft 記事を参照](#))。ユーザーのライセンスを設定する前に、MNE Global Defaults または Task Parameters に、この値を忘れずに設定してください。

```
[Exchange]
O365UsageLocation=<xx>
```

このパラメータ値は 2 文字のキーワードで、ISO 3166-1-alpha-2 に記載されている規格値に準拠する必要があります。

Office 365 への移行のための MNE パフォーマンスの設定

Office 365 への移行時にはインターネットを使ってデータを伝送しますが、一般的にこの方法はローカル ネットワーク接続と比べて低速で信頼性も低くなっています。MNE には移行中のデータ伝送遅延によるタイムアウトの発生を減らすための、各種パラメータが用意されています。

Quest は、この説明に従ってこれらのパラメータを設定することをお勧めします。

- **MNE-Exchange 接続の MAPI エラー再試行機能**

MNE では、問題発生時に Exchange や Office 365 への MAPI 呼び出しを再試行するように、Data Migration Wizard を設定することができます。環境によっては MAPI 通信 / 接続が一時的に中断されることがあり、それによって移行結果が不完全になる可能性があります。この新機能は、特定のエラーが発生したときの MAPI 再試行を制御します。この機能は、Task Parameters および Global Defaults の [Exchange] セクションにあるプログラム パラメータで設定します。

```
[Exchange]
MessageRetryCount=3
MessageRetryWait=10
MAPIErrorsToRetry=80040115,80040125
```

MessageRetryCount パラメータは、Data Migration Wizard に MAPI 呼び出しを *MessageRetryWait* パラメータで指定された間隔で何回繰り返し試行するか指示します。すべての再試行がエラーで失敗した場合、ログにエラーが記録され、現在のメッセージ プロパティまたは要素の処理がスキップされ、次のアイテムの処理が行われます。[Log level] (ログ レベル) 設定 (*Specify Run Information*) (実行情報の指定)) によっては、再試行回数がプログラム ログ内にその他の記録済みエラーや警告を含まずに表示される場合があります。デフォルトの設定 (上記の例) では、80040115 または 80040125 エラーを返した MAPI 呼び出しに対して、10 秒間隔で最高 3 回まで再試行を行います。

- ① **重要** : *MessageRetry* パラメータにデフォルト値よりも大きな値を設定する場合は、次の「重要」で説明しているように、*WatchDogMinutes* パラメータを調整することも考慮してください。

MAPIErrorsToRetry パラメータには複数のエラー コードをカンマで区切って指定できます。以下に例を示します。

```
MAPIErrorsToRetry=80040115,80040125,8004010F
```

この例では、デフォルトのエラー 80040115 または 80040125 の他に、エラー 8004010F を返した MAPI 呼び出しも再試行します。たいていの場合、デフォルト設定のエラーのみでも十分です。

- **WatchDogMinutes パラメータ**

MNE の *Global Defaults* で、*WatchDogMinutes* パラメータ :


```
[General]  
WatchDogMinutes=180
```

... は、MNE ウィザードが待機状態になってから、データ接続に致命的なエラーが発生したと判断して、そのプロセスを中断するまでの、非アクティブな時間 (分) を示します。ホスト型プラットフォームへの移行では、ローカル サーバーへの移行と比べて、より頻繁にプロセスのタイムアウトが発生します。これにより、特に大量のメッセージ データ (大きな添付ファイルがあるなど) を移行する際に問題が発生する可能性があります。柔軟な移行を行うために、Office 365 への接続にはデフォルトの *WatchDogMinutes=180* を使用することをお勧めします。ローカル サーバーに移行する場合などは、伝送パスがより短く高品質になり、通常よりもタイムアウトが減少するため、*WatchDogMinutes=30* などのより低い値の設定が適しています。

- ① **重要** : *MessageRetry* パラメータ (前述) にデフォルト値よりも大きな値を設定する場合は、*WatchDogMinutes* パラメータの値を調整することも検討する必要があります。Quest では、*WatchDogMinutes* にはデフォルトの 180 分よりも大きな値、または再試行待機間隔 (*MessageRetryCount* x *MessageRetryWait*) 30 秒ごとに 10 分を設定することをお勧めします。

WatchDogMinutes の値を大きくしてもタイムアウトが発生する場合は、*WatchDogMinutes=0* と設定することでこの機能を無効にすることができます。このオプションを使用する場合は注意を払ってください。この設定では一定期間の経過後致命的なエラーを報告する代わりに、プログラムが無期限に待機してしまいます。


SetUserAccountControl および UserAccountControl の設定

If  **条件付きサブステップ** : このサブステップは、ローカル Active Directory から Office 365 をプロビジョニングする場合にのみ適用されます。

MNE の *Global Defaults* の場合 : Quest では、ローカル Active Directory から Office 365 をプロビジョニングする場合 (のみ)、ここに記述しているパラメータを設定することをお勧めします。

```
[Active Directory]  
SetUserAccountControl=1  
UserAccountControl=512
```

Office 365 Wave 15 調整に対処するための MNE の設定

 **条件付きサブステップ** : このサブステップは、Office 365 Wave 15 に移行する場合にのみ適用されます。

MNE のリリース 4.7 では、Microsoft Office 365 Wave 15 での PowerShell 調整のサポートが改善され、Wave 15 に対する PowerShell 接続関連の 2 つのパラメータが新たに追加されました。Office 365 Wave 15 に移行する場合、Global Defaults と Task Parameters の新しい [PowerShell] セクションに以下の 2 つのパラメータを設定することで、MNE のパフォーマンスを向上させることができます。

- **PowerShell 接続の設定可能な制限** : このパラメータにより、管理者は MNE が開くことができる同時 PowerShell 接続数の、サーバー当たりの制限値を指定することができます。例 :

```
[PowerShell]
MaxPowerShellConnections=2
```

Microsoft がテナントに対して許可している PowerShellMaxTenantConcurrency を MNE が超過することを防止するために、このパラメータを使用する必要があります。この調整のデフォルトは、9 つの同時実行空間接続 (リモート PowerShell) になります。MaxPowerShellConnections の推奨設定を算出するには :

R/S

... ここで R はテナントで許可されている同時実行空間数 (デフォルトは 9)、 S は使用する移行サーバー数を表しています。商が整数でない場合は、MaxPowerShellConnections パラメータ値の次に小さな整数値に切り捨てられます。たとえば、9 つの実行空間に制限して、1 つの移行サーバーを使用する場合、「 $9/1 = 9$ 」になるため MaxPowerShellConnections=9 となります。また、9 つの実行空間制限で 2 つの移行マシンを使用する場合は、「 $9/2 = 4.5$ 」になるので、MaxPowerShellConnections=4 となります。


デフォルトの MaxPowerShellConnections=0 は、制限なしと解釈され、この制限機能が無効になります。

- **アイドル状態のリモート PowerShell 接続の「待機」の設定** : このパラメータにより、管理者は MNE が開いているアイドル状態の PowerShell 接続を、終了するまでに待機する時間 (秒) を指定することができます。デフォルト :

```
[PowerShell]
IdleConnectionTimeoutSeconds=30
```

... 大部分の環境に適しています。この機能は、接続時のアイドル状態の期間にのみ適用されることに注意してください。コマンドが実行されるたびにタイマーが 0 にリセットされます。そのため、短時間のアイドル状態を挟んで一連のコマンドを実行している間は、永続的に接続状態が保持されます。IdleConnectionTimeoutSeconds=0 と指定すると、MNE が 2 番目のコマンドを待機することはありません (0 秒待機)。そのため、各 PowerShell 接続は、1 つのコマンド実行後即座に終了します。

Notes カスタム属性移行用の customattrs.tsv ファイルの準備

 **条件付きサブステップ** : このサブステップは、Notes のカスタム属性を移行する場合にのみ適用されます。

Notes メッセージには、差出人、宛先、件名フィールドなどの標準的ないくつかの属性が含まれていますが、ユーザー定義のフィールドを含めることもできます。MNE の Data Migration Wizard と SSDM で、カスタムの Notes 属性をメール メッセージと Notes 連絡先から、Exchange 内の使用されていないプロパティに移行できます。ただし、ターゲットのプロパティが対応するソース内の属性を、移行アプリケーションが認識している場合に限りです。このため、カスタム属性を移行する前に、tsv データ ファイルでソースとターゲットの属性の関連付けをマッピングしておく必要があります。これによって、移行アプリケーションはこのファイルを参照し、属性を移行できるようになります。

このマッピング ファイルは、Data Migration Wizard のデフォルトのインストール フォルダ (通常は `C:\Program Files\Quest\Migrator for Notes to Exchange`) および SSDM を使用して Notes カスタム属性を移行する場合、notesdtapp.exe を含むフォルダで、customattrs.tsv という名前の (ANSI ではなく) Unicode ファイルにする必要があります。どちらかまたは両方の移行アプリケーションが、このファイルを参照して、ソース属性を、MAPI 移行先メールボックスの空いている (未使用の) プロパティにマッピングします。

Migrator for Notes to Exchange では、*customattrs.tsv*に必要な列見出しと同じものが用いられている Unicode ファイル、*attrs.tsv*がインストールされます。これは、*customattrs.tsv*ファイルを作成する場合のテンプレートとして使用できます。

customattrs.tsv ファイルを作成、準備するには：

- 1 テキスト エディタを使用して *attrs.tsv*を開き、*customattrs.tsv* という新しい名前を付けてそのコピーを保存します。*customattrs.tsv*は（ANSI ではなく）Unicode ファイルとして前述したフォルダで保存し、コピーの中にデータ行があれば、すべて削除してください。
- 2 移行する Notes のカスタム属性ごとに 1 行ずつ、次のようにデータを入力します。
 - ID：カスタム属性の名前。その行のカスタム属性をファイル内の他の属性と識別する一意な文字列になります。

① 重要：元の *attrs.tsv* ファイルに何らかのデータ行が残っている場合は、*attrs.tsv* で使用されている ID 値と同じ ID 値が、*customattrs.tsv*に含まれていないことを確認してください。**両方のファイルに同じ ID 値が含まれていると、カスタム属性を正しく移行できません。**

- **SourceProperty**：Exchange 内のプロパティに移行される、Notes メール メッセージまたは Notes 連絡先に追加された属性の名前。
- **TargetPropertySet**：ターゲットのプロパティ セットの GUID。次のいずれかの値にする必要があります。

```
PS_PUBLIC_STRINGS
PS_MAPI
{hhhhhhhh-hhhh-hhhh-hhhh-hhhhhhhhhhhhh}
```

ここで、各「h」は大文字の 16 進値になります。

TargetPropertySet 値が PS_PUBLIC_STRINGS または PS_MAPI の場合は、名前付きのセットに対応する今までの GUID が、指定した文字列に置き換えられます。

TargetPropertySet は空にできますが、その場合は **TargetProperty** を、(次に示すように) 0x0000 ~ 0x7FFF までの適切な整数値の ID に設定する必要があります。

- **TargetProperty**：Exchange の対応する MAPI プロパティの名前。16 進値のユーザー プロパティは、Exchange 内で移行されるメール メッセージまたは連絡先ごとに Notes プロパティを使用して作成され、その値が保持されます。作成されるプロパティの 16 進値はログにレポートされます（ログ ファイルで「custom attr」を検索してください）。

(前述したように) **TargetPropertySet** が空のままの場合は、この **TargetProperty** 値を 0x0000 ~ 0x7FFF までの 16 ビット整数として指定する必要があります。このとき、その他の MAPI プロパティでまだ定義されていない値を指定します。

- **TargetPropertyType**：MAPI プロパティのデータ型。Notes で使用されているデータ型と論理的に対応している必要があります。有効な値は、STRING、MV_STRING、LONG、SYSTIME、BOOLEAN です。また、これら 5 つのタイプの頭に「PT_」を付け加えることができます。つまり、PT_STRING、PT_MV_STRING など有効な値です。

- 3 更新された *customattrs.tsv* ファイルを保存して閉じます。

たとえば、一般的な *customattrs.tsv* ファイルは、次のようになります。

ID	SourceProperty	TargetPropertySet	TargetProperty	TargetPropertyType
Attr1	EV26C5E2CCF2B9267C.Archived	{DOF41A15-9E91-D111-84E6-0000F877D428}	Archive ID	STRING
Attr2	EV26C5E2CCF2B9267C.ArchivedDate	{DOF41A15-9E91-D111-84E6-0000F877D428}	Archived Date	STRING
Attr3	EV26C5E2CCF2B9267C.SaveSetId	{DOF41A15-9E91-D111-84E6-0000F877D428}	Saveset ID	STRING
Attr4	EV26C5E2CCF2B9267C.RetentionCategory	{DOF41A15-9E91-D111-84E6-0000F877D428}	Retention Category	STRING
Attr5	EV26C5E2CCF2B9267C.HasAttachments	{DOF41A15-9E91-D111-84E6-0000F877D428}	EVLotus_HasAttachments	STRING

Notes のカスタム属性を移行する場合のトラブルシューティング

プロパティと値を作成した場合は、Microsoft の *MfcMapi.exe* ユーティリティを使用してそれらを表示できます (このユーティリティは、Microsoft から無料でダウンロードすることができます。Google で「mfcmap」を検索して、<http://www.microsoft.com/ja-jp/download/default.aspx> のリンクに移動してください)。カスタム属性の移行に関連する問題の大半は、これらのクイック テストで診断することができます。

- *customattrs.tsv* ファイルのターゲット プロパティが、まだ存在しておらず、正しいフォーマットで指定されていることを確認します。詳細については、後述する「[MAPI プロパティについて](#)」を参照してください。
- *customattrs.tsv* ファイルが ANSI ではなく Unicode であることを確認します。
- *customattrs.tsv* ファイルの最終行の後に、改行と復帰改行 (最終行の末尾にカーソルを置いて Enter キーを押す) が続いていることを確認します。
- 元の *attrs.tsv* ファイルに何らかのデータ行が残っている場合は、*attrs.tsv* で使用されている ID 値と同じ ID 値が、*customattrs.tsv* に含まれていないことを確認してください。両方のファイルに同じ ID 値が含まれていると、カスタム属性を正しく移行できません。

MAPI プロパティについて


命名されるプロパティ名は、プロパティセットの GUID であり、ID は 32 ビットの整数または文字列になります。MAPI によって命名されるプロパティに、0x8000 ~ 0xFFFF までの 16 ビット 整数のエイリアスが割り当てられます。このエイリアスは、メールボックスに固有です。

命名されないプロパティ名は、0x0001 ~ 0x7FFF の 16 ビット 整数になります。この 16 ビット 整数はすべてのメールボックスで有効です。命名されないプロパティの例は、0x0070 (PR_CONVERSATION_TOPIC) や 0x6656 です。どちらも MAPI で使用されます。そのため、すでに使用されているこれらの 2 つの例を、メッセージ属性のターゲット プロパティ値として使用することはできません。ただし、Notes 連絡先属性を Exchange にマップするために使用できる場合があります。

カスタム プロパティは命名しなくても大丈夫です。命名しない場合は、MAPI によってまだ使用されていない 0x0001 ~ 0x7FFF までの 16 ビット 整数の *TargetProperty* を選択します。命名する場合は、プロパティセットの GUID を選択できます。すでに使用されているプロパティ セットを選択する場合は、そのプロパティセットでまだ使用されていない 32 ビット 整数または文字列による ID を選択する必要があります。新しいプロパティセット GUID を選択した場合は、ID はどこにも存在しないため、すでに使用中の ID であるかどうかを心配する必要はありません。

カスタム プロパティに命名する場合、Quest は ({00020329-0000-0000-C000-000000000046} のエイリアスで始まる)「PS_PUBLIC_STRINGS」プロパティ セット GUID を使用し、お使いのアプリケーションで一意的なプレフィックスを付けた文字列 ID (例:「Quest-」) を使用することをお勧めします。

ステップ 5 (ドメイン区別によるメール ルーティングの場合) : Exchange 用メール ルーティング ドメインの設定

If  **条件付きステップ** : このステップは、移行中に一時的なルーティング ドメイン (DNS でのドメイン区別) を使ったメールの共存を設定する場合にのみ適用されます。代わりにスマート ホストを使ってメール ルーティングを行う場合 (またはメール ルーティングを設定しない場合) は、ステップ 6 に進んでください。

SMTP メール接続のみを導入するのか、または Quest の CMN で完全な共存を実現するのかにかかわらず、たいの組織は一時的な SMTP ドメインを使って Notes と Office 365 間のトラフィックをルーティングしています。管理者によっては単一の名前空間を利用するために、スマートホストサーバを使って、SMTP メールルーティングを設定することを選択する場合もあるでしょう。どちらの場合でも、サーバー レベルとユーザー レベルの両方で、ルーティング方法を設定する必要があります。ユーザーレベルでは、Notes 個人ドキュメントと Active Directory オブジェクト レコードは、この手順の後半で、ターゲット Active Directory をプロビジョニングして、2 つのディレクトリを同期するときに設定します。


メール共存のためにサブドメインを使用する場合は、後述のようにサーバーを設定してください。メールルーティングにスマート ホストを使用する場合は、このステップをスキップすることができます。スマート ホストは後述するステップ 15 で設定します。

メールルーティング用の一意のドメインを設定するには：

ルーティングドメインは、プライマリドメインのサブドメイン（例：notes.domain.com や exchg.domain.com）または完全に個別の SMTP ドメインになります。各メールシステムに固有かつ解決可能（DNS またはホストファイルで）である限りは、ルーティングで十分に利用できます。ルーティングドメインを設定するには：

- 1 適切な SMTP ドメインがまだ利用できない場合は、DNS にそれを作成します。1 つは、Exchange にトラフィックを転送する必要があります（例：exchg.domain.com）。移行済みユーザーの Notes メールボックスに送信されたメールは、exchg.domain.com ドメインを使って対応する Exchange メールボックスに転送されます。他の SMTP ドメイン（例：notes.domain.com）は、Notes への接続に用いられます。
- 2 DNS に新しい exchg.domain.com ドメインを設定したら、SMTP ドメインを受け付けるように Exchange を設定し、受信者ポリシーを作成して適切なセカンダリ SMTP アドレスを生成します。そうすることによって、すべてのユーザーがこのドメインのメールを受信することができます。
- 3 新しい notes.domain.com SMTP ドメイン / アドレスへのメールを受け付けるように、Notes を設定します。
- 4 メールフローをテストして、新しいドメインを忘れずに検証してください。

ステップ 6（Quest の CMN と共存する場合のみ）： CMN コンポーネントのインストールと設定

If  **条件付きステップ：** このステップは、Quest の CMN を使って移行時のディレクトリ、メール、空き時間情報の共存を行う場合にのみ適用されます。CMN を使った共存を行わずに移行を実施する場合は、ステップ 7 に進んでください。

必要なコンポーネント（Directory Connector、Mail Connector、Free/Busy Connector）のインストールと設定については、Quest の『[CMN ユーザーガイド](#)』を参照してください。

メールフローをテストして、CMN 設定を忘れずに確認するようにしてください。

Office 365 による空き時間情報の共存

Exchange では、すでに Exchange メールボックスを保有しているユーザーの空き時間情報クエリを、Domino に送信することはできません。Exchange ではそのようなクエリを、自己の Exchange メールボックスにのみ送信できます。この Exchange 空き時間情報における制限は、この『[シナリオガイド](#)』の第 1 章で詳細に説明されています（「[プロビジョニングとメールボックスの作成](#)」の「[Microsoft Office 365 への移行](#)」のトピックを参照）。

上記の第 1 章では、Exchange から Notes への空き時間情報クエリと Exchange から Notes へのメールルーティングの両方を保持するための、Office 365 のプロビジョニング方法が説明されています。

Office 365 とローカル Active Directory によるディレクトリの共存

Microsoft はそのホスト型 Active Directory へのアクセスを制限しており、それらの制限により CMN の Directory Connector は Domino と Office 365 間の直接のディレクトリ共存をサポートできません。ただし、ローカル Active Directory がある場合は、以下の方法で Notes と Office 365 間の 2 ステップ共存を確立することができます。

- 1 Notes とローカルの独自型 Active Directory 間の双方向の更新を行うように、CMN Directory Connector を設定します。
- 2 ローカル Active Directory と Office 365 を同期するように、Microsoft の AD Sync ツールを設定します。

この 2 つを組み合わせて順番に実行すれば、Domino と Office 365 間で効率的にディレクトリを共存させることが可能です。

大部分の組織では、ディレクトリ同期をローカルの独自型 Active Directory をプロビジョニングする作業の一貫として実施し（後のステップ、ローカル Active Directory から Office 365 をプロビジョニングする場合）、その目的に CMN の Directory Connector は非常に適しています。

ステップ 7 : Notes 情報の検出

Migrator for Notes to Exchange は、Directory Export Wizard のデータ ソースとして機能する Notes のアドレス帳 (NAB) の格納場所を識別 (次のステップ) する必要があります。また、MNE は、ユーザーの SMTP エイリアスの生成に使用されるインターネットドメインも識別する必要があります。そのため、MNE には Notes 環境を検索して、必要な情報を返すウィザードが用意されています。

- *NABs Discovery Wizard* : 利用できる NAB を探して、エクスポートする NAB を指定することができます。
- *Internet Domains Discovery Wizard* : 関連するインターネット ドメインを識別します。

次のステップで Directory Export Wizard を準備するために、2 つのウィザードを実行します。詳細は、『[MNE 管理ガイド](#)』の「*NABs Discovery Wizard*」および「*Internet Domains Discovery Wizard*」を参照してください。

ステップ 8 : Notes ディレクトリ データのエクスポート

MNE の Directory Export Wizard は、Notes 環境からユーザー / グループ データを抽出し、その情報を MNE の SQL データベースや他のデータ ファイルに設定します。他の Quest アプリケーションは、入力値としてこのデータを必要としています。今すぐ Directory Export Wizard を実行して、必要な情報を収集してください。Directory Export Wizard の詳細と操作方法については、『[MNE 管理ガイド](#)』の「Directory Export Wizard」の章を参照してください。

ステップ 9 : エクスポートしたデータの確認と (必要に応じて) 変更

Directory Export Wizard が収集するデータは、他の MNE プログラムに必要な入力情報です。そのため、情報が正確で正しい形式になっていることを確認することが大切です。この検証ステップでは、移行を開始する前に必要に応じてアドレスや他の属性を修正することもできます。たとえば、移行プロセスの一環として、新しい SMTP ドメインへの組織の統合を容易にするために、その内容を変更することができます。

ローカル Active Directory からホスト型 Active Directory をプロビジョニングする場合 : オブジェクト マージ プロセス (後のステップで実施) の照合基準を検証することが重要です。各 Notes ユーザーと対応する Active Directory 内のセキュリティ オブジェクトを照合するために、一意の照合属性が必要です。照合属性がすでに用意されていることもあります。また、Domino ディレクトリにカスタム属性を設定して抽出したり、TSV エクスポート / インポートを介して照合属性を MNE の SQL データベースに設定したりすることもできます。

ローカルの独自型 Active Directory 内にすでにメール有効ユーザーが存在している場合 : エクスポートした *TargetAddress* 列に記載されているアドレスが、適切かどうかを確認してください。MNE は既存のメール有効ユーザーと *TargetAddress* を使って、メールボックスを作成する Active Directory オブジェクトを検索します。そのため、SQL データベース内の *TargetAddress* の値は、メール有効ターゲットオブジェクトの有効な SMTP アドレスと一致する必要があります。TargetAlias アドレスは、セカンダリ / プロキシ アドレスとしても適用されます。そのため、作業を続行する前にこの情報を確認することが重要になります。

ステップ 10 : ユーザー コレクションの定義

ユーザーが定義した、移行するすべての Notes ユーザーのサブセットとなる MNE ユーザーコレクションには、多数の ウィザードが適用されます。たとえば、MNE の Data Migration Wizard によりバッチ移行されるユーザーで、ユーザー バッチは MNE コレクションにより定義されます。


ユーザー コレクションは、単一のユーザーからすべてのユーザーまで、さまざまなサイズが可能です。一般的にローカルの独自 Exchange に移行する場合、コレクションにはバッチ当たり 100 人前後のユーザーが存在しますが、Office 365 に移行する場合はこの数が大幅に小さくなります。『[MNE 移行前プランニング ガイド](#)』には、コレクション当たりの最適なユーザー数に影響するターゲット タイプ、それによるコレクション定義用グループ化方針の調整 (コレクション当たりのユーザー数を指定するため)、グループ化手法、および移行のスケジューリング設定などの情報が説明されています (第 3 章の「バッチ移行とデスクトップごとの移行」を参照)。

Collection Wizard を使用して、ユーザー コレクションを定義します。ターゲット Active Directory にプロビジョニングしたくないオブジェクトがある場合は、それをコレクションから忘れずに削除するようにしてください。Collection Wizard の操作方法とアプリケーション ノートについては、『MNE 管理ガイド』の第 5 章を参照してください。

- ① **注：**一般的に Notes グループ（配布リスト）は、すべてのユーザーの移行後に個別に定義、移行されます。この章の最後の「**移行後のアクティビティ**」の説明には、グループ コレクションの定義とグループの移行が含まれています。

この手順の後半では、Notes ソース内のユーザー当たりのデータ量を評価して、必要に応じてコレクション定義を調整することができます。


注：カスタム デザイン クラスの定義

If  **条件付きサブステップ：**このサブステップは、Notes 環境が非標準のデザイン クラスを使用している場合にのみ適用されます。

MNE Notes Migration Manager (MNE コンソール) では、Notes NSF ファイルに関連している可能性があるにもかかわらず、名前が Notes の標準デザインクラスと異なるためにウィザードで識別されない、非標準 Notes デザインクラスを識別します。Notes Migration Manager の [Design Classes] (デザイン クラス) テーブルでは、このような非標準デザイン クラスを識別し、各デザイン クラスを 1 つ以上の特定のデータ タイプ（メール、アーカイブ、または個人用アドレス帳）と関連付けます。アーカイブ、メール、または PAB ファイルのデフォルトのデザイン クラスといずれも一致しない NSF ファイルが見つかった場合、これらのテーブルに対して代替デザイン クラスが検索され、ファイルの種類が決定されます。

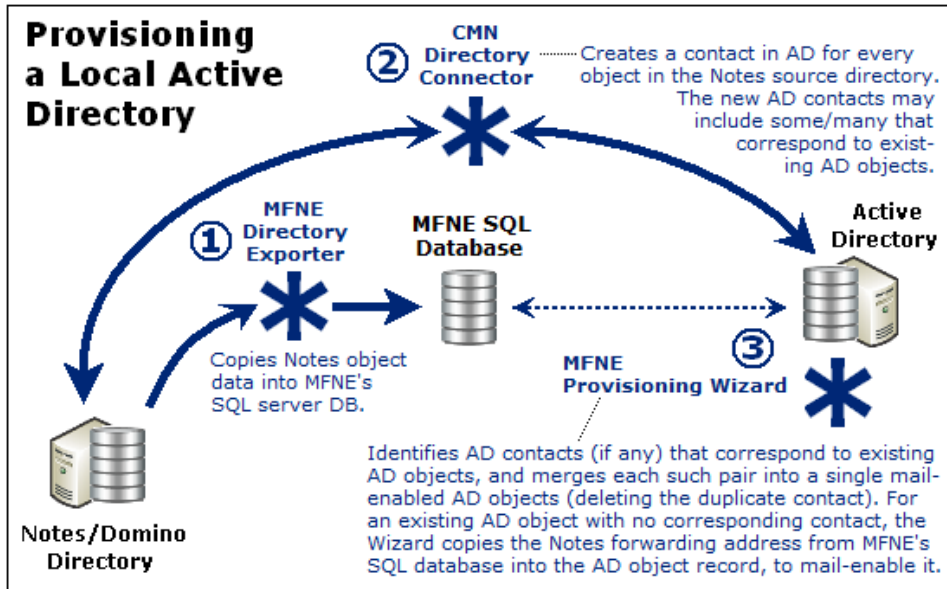
ご利用の Notes 環境に非標準のデザイン クラスがある場合は、このコレクション定義ステップの一環として、Notes Migration Manager の [Manage Design Classes] 画面でそれを定義してください。この機能は、『MNE 管理ガイド』の第 1 章（「ユーザー コレクション：デザイン クラスの管理」を参照）で詳細に説明されています。

ステップ 11 (ローカル Active Directory から Office 365 をプロビジョニングする場合)：ローカル Active Directory のプロビジョニング

If  **条件付きステップ：**このステップと次のステップは、ローカルの独自型 Active Directory から Office 365 をプロビジョニングする場合にのみ適用されます。Office 365 を MNE または他の何らかの手段でプロビジョニングする場合、プロビジョニングはこの章の後半の「**バッチ移行プロセス**」で実施する必要があります。ステップ 13 に進んでください。

このステップでは、ローカル Active Directory のみをプロビジョニングします。ローカル Active Directory のプロビジョニングは、最終的な移行先がローカルの独自 Exchange の場合でも Office 365 の場合でも、方法は同じです（ローカル Active Directory からプロビジョニングされる）。一般的で最も直接的な方法では、まず MNE ディレクトリのエクスポートを行い（前述のステップ 8）、次に後述のサブステップのように CMN Directory Connector を使って双方向にディレクトリを更新します。図は、MNE ディレクトリ更新前の、Domino ディレクトリ データの CMN の SQL サーバー データベースへのエクスポートを表しています。

移行開始前に Active Directory オブジェクト レコードと最新の Notes ソース オブジェクト レコードを同期する必要があるため、このステップは、すでにユーザー オブジェクトでプロビジョニングされた既存の Active Directory がある場合でも必要になります。このローカル Active Directory をプロビジョニングするステップには、既存の Active Directory オブジェクトを、ディレクトリ更新により作成された対応する連絡先とマージする、MNE の Provisioning Wizard によるオブジェクトのマージ（必要な場合）作業も含まれます。そうすることによって、Provisioning Wizard は連絡先の重複を防止し、移行対象各 Notes ユーザーに対応する、単一のメール有効 Active Directory オブジェクトを作成します。



Quest は、このローカル Active Directory をプロビジョニングする手順を以下のように実施することをお勧めします (ディレクトリ更新後)。

- 1 **Notes/Domino ディレクトリをローカル AD と同期します。** Quest は、CMN Directory Connector を使って Domino ディレクトリと Active Directory 間の双方向の更新を実施することをお勧めします。他のツールや手段を利用することも可能ですが、CMN は MNE ツールを補足する目的で提供されています。この同期では、Notes ソースからユーザーデータが抽出され、Active Directory に対応するメール有効連絡先が作成されます。また、逆方向の処理も行われます。これにより、両方のディレクトリが、他のシステム内のユーザーに対応するルーティングオブジェクトで更新されます (完全なディレクトリを確立するため)。

ローカル Active Directory にまだユーザー オブジェクトが含まれていない場合、このディレクトリの更新によりオブジェクトが作成されます。多くの組織が、すでにネットワーク認証目的で Active Directory を保有しており、ユーザーがすでにセキュリティ オブジェクトとしてプロビジョニングされています。この場合、Active Directory 内の既存のセキュリティ オブジェクトに対応する新しい連絡先を Active Directory に作成するように、ディレクトリ更新を設定します。(CMN の Directory Connector は、エンティティのアドレスにより潜在的な重複項目を検出、マージできますが、ネットワーク認証にのみ用いられるセキュリティ オブジェクトには、一般的にメール アドレスが割り当てられません。詳細は、『CMN ユーザーガイド』を参照してください。必要に応じて、CMN の Directory Connector 内にコネクタを作成し、それを実行して、他のシステム内のユーザーに対応するルーティング オブジェクトで両方のディレクトリを更新します。

- 2 **MNE の Provisioning Wizard を実行して、(すべてのユーザーコレクションに対して)、Active Directory 内の連絡先 / オブジェクトの重複を統合し、すでに Active Directory に存在しているオブジェクトをメール有効にします。** Provisioning Wizard は、各連絡先の情報を対応するオリジナルの Active Directory オブジェクトレコードとマージして、次に連絡先を削除して、各 Notes ユーザーに対応する単一のメール有効オブジェクトを Active Directory に残します。ディレクトリ共存のために Active Directory に連絡先が追加されなかった場合、Provisioning Wizard を使って (連絡先を使わずに) 既存の Active Directory セキュリティプリンシパルをメール有効にすることができます。Active Directory 内に対応する連絡先が存在しない場合は、MNE の SQL データベースから属性とアドレスが抽出され、オブジェクトがメール有効にされます。

Office 365 に移行する場合、着信外部 (インターネット) メールが、Exchange から Notes の方向にルーティングされることはありません (MX の切り替えをすべてのユーザー移行後に延期した場合)。ただし、Active Directory 内の Notes アドレス (Office 365 と同期時) を使って、すでに移行された Office 365 ユーザーから未移行の Notes 受信者への、内部メールのルーティングが行われます。

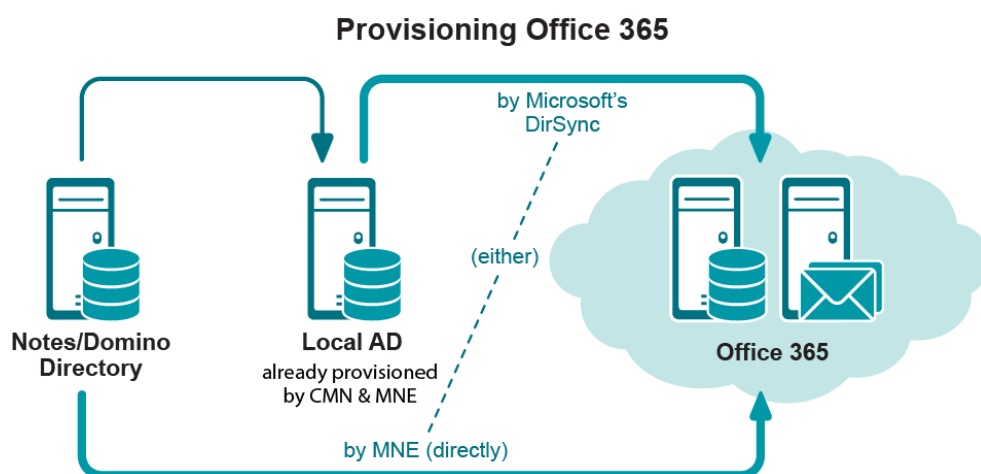
どのような場合でも、このプロビジョニング ステップは重要です。プロビジョニングにより、連絡先 / オブジェクトの重複が統合され (ある場合)、またオブジェクトのアドレス属性により、将来の CMN ディレクトリ更新時に同じ Notes オブジェクトの再コピーを防止することができます。

これらのシナリオで、最終的には各 Notes ユーザーに対応する単一のメール有効ユーザー オブジェクトが作成され、既存のセキュリティ、認証情報、およびルーティングが保持されます。詳細および注意事項については、『MNE 管理ガイド』の「ProvisioningWizard」に関する章を参照してください。

- 3 **Notes 転送アドレスを確認します。** マージされた Active Directory オブジェクトのアドレス属性から、将来の CMN ディレクトリ更新で対応する Notes オブジェクトを再コピーしないことを判断できます。そのため、この手順を続行する前に、ルーティング アドレスを検証する必要があります。

ステップ 12 : ローカル Active Directory からの Office 365 のプロビジョニング

If **条件付きステップ** : Microsoft の AD Sync ツールを使って、ローカル Active Directory から Office 365 をプロビジョニングする場合にのみ適用されます。MNE または他の何らかの手段でプロビジョニングする場合は、この章の後半の「**バッチ移行プロセス**」まで Office 365 のプロビジョニングは行いません。ステップ 13 に進んでください。



Microsoft の AD Sync ツールは、ローカル Active Directory から Office 365 にオブジェクト データをコピーし、メールボックスを（まだ）作成しないで、Office 365 にメール有効オブジェクトをプロビジョニングすることができます。このステップで：


- 1 MNE Data Migration Wizard を実行して、MS AD Sync 用のローカル Active Directory アカウントを用意します。これは AD Sync の実行前に行う必要がある管理手順です。
- 2 Microsoft の AD Sync ツールを使って、すべてのコレクション内のすべてのユーザーを、Office 365 にメール有効オブジェクトとして（メールボックスなしで）プロビジョニングします（メールボックスは各ユーザー コレクションの移行直前に作成します。この章の後半の「**バッチ移行プロセス**」を参照してください）。

ステップ 13 : ユーザー当たりの移行量の評価

ユーザーを移行する前に、各ユーザーおよび各ユーザー コレクションの移行データ量を把握しておく必要があります。Migrator for Notes to Exchange では、ソースのデータ ストアを検出し、ストア内のユーザー当たりのデータ量を判定する Notes Data Locator Wizard を使用できます。

Notes Data Locator Wizard を実行してソース データを検索し、移行前にすべてのユーザーコレクションのユーザー当たりのデータ量を確認し、アーカイブと PAB の所有権を検証してください。次に [View Summaries] | [User and Resource Detail] を選択してユーザー当たりのデータ量を確認し、必要に応じて予期しないまたは異常なデータ量に対処するために、コレクションを変更してください。『MNE 管理ガイド』の「Notes Data Locator Wizard」の章を参照してください。Notes Migration Manager のサマリ表示 (View Summaries) 機能は、『管理ガイド』の第 1 章で説明されています。

ステップ 14 (必要な場合) : エンド ユーザーのローカル データを一元管理場所にコピー


If  **条件付きステップ** : MNE の Data Migration Wizard を使って、エンド ユーザーのワークステーション上にあるデータを一括移行したい場合のみ適用されます。

MNE には、エンド ユーザーのワークステーション上にあるデータを移行するための、さまざまなオプションが用意されています。たとえば、MNE の Self-Service Desktop Migrator (SSDM) を使用することができます。SSDM には、ユーザーの操作や手間を最小限に抑える *Silent Mode* (サイレント モード) オプションがあります。この方法の詳細については、このガイドの第 4 章の「**SSDM (デスクトップごと) 移行**」を参照してください。

ただし、一部のシナリオではローカル Notes PAB とアーカイブの移行を集中管理する必要があります。MNE の Data Migration Wizard (この章の後半の「**バッチ移行プロセス**」で説明) を利用して、コンテンツを Exchange メールボックス、個人用アーカイブ、または PST ファイルに移行することができます。この場合、プログラムはソースデータにアクセスできなければなりません。MNE には、エンドユーザーの PAB データの、サーバベースの NSF または各ユーザーのメールファイル内への複製プロセスを自動化する、*PAB Replicator* 機能が用意されています。代わりに他の手段を使って、ユーザーのローカル データを、集中管理している場所にコピーすることもできます。

MNE の PAB Replicator の使用方法の詳細は、『**MNE 管理ガイド**』の第 9 章を参照してください。

ステップ 15 (メールルーティングにスマートホストを使用する場合) : スマートホストの設定

If  **条件付きステップ** : SMTP メール ルーティングにスマート ホストを使用する場合のみ適用されます。

Office 365 への移行では、メールの共存を双方向に設定します。一時的な SMTP ドメインを使って Notes と Office 365 間のトラフィックをルーティングする組織もあれば、スマートホストサーバを使った SMTP メールルーティング (単一の名前空間環境用) を設定する組織もあります。

前述のステップ 5 でサブドメイン (ドメイン区別) によるメール ルーティングを設定していない場合、ここで Domino/Office 365 用にスマート ホスト サーバーを確立、設定する必要があります。

どちらの方法でも、サーバー レベルとユーザー レベルの両方で、ルーティング方法を設定する必要があります。ユーザーレベルでは、Notes 個人ドキュメントと Active Directory オブジェクトレコードを、先ほど Office 365 をプロビジョニングして、2 つのディレクトリを同期したときに設定しています。

スマートホスト SMTP メールルーティングの設定の詳細については本ガイドでは説明しませんが、Domino や Exchange のサーバにスマートホストを設定する方法の詳細については、該当するサーバのマニュアルおよびオンラインリソースを参照してください。特に、Microsoft の記事「**送信スマート システムホスト シナリオ**」を参照してください。

Quest の CMN を使用してスマートホスト SMTP ルーティングを設定するため、両方のスマートホストが CMN サーバを参照するように設定されます。CMN 内で SMTP の受信 / 送信キューのセット 1 つは、Domino からのメールを受け入れ、受信する Office 365 サーバに配信するように設定されます。一方、もう 1 つのセットは、Exchange からのメールを受け入れてから Domino に配信するように設定されます。負荷分散および冗長性のために、複数の CMN サーバを導入することができます。「CMN ユーザーガイド」(第 3 章) では、これらの設定が詳細に説明されています。

メール フローをテストして、スマート ホストの設定を忘れずに確認するようにしてください。

移行前準備の完了時 ...

この章で説明する移行前準備作業を完了したら、以下の「**バッチ移行プロセス**」に進んでください。また、第 4 章で **SSDM (デスクトップごと) 移行** に関する情報も参照してください。

バッチ移行プロセス

Migrator for Notes to Exchange には、2 つの移行エンジンが用意されています。

- Data Migration Wizard は、ユーザー バッチの同時移行、重要な管理作業（メールボックスの作成やルーティングの更新など）の実施、パブリックの配布リストの移行を行います。
- Self-Service Desktop Migrator（SSDM）は、エンドユーザーのローカルワークステーション上で動作し、1 人のユーザーのコンテンツを移行します。SSDM はローカル コンテンツの移行プロセスを効率化して、移行チームの負担を減らします。また、サイレント モード（SilentMode）機能により、エンド ユーザーの操作や要件を最低限に抑えることができます。

どちらの移行エンジンもデータ移行に個別に使用することができます。また、両方を併用して、幅広いプロジェクト要件に対応することができます。『移行前プランニングガイド』の第 3 章の「バッチ移行とデスクトップごとの移行」を参照してください。

このセクションは、Office 365 への移行作業の中で、バッチ移行に関連する手順を説明しています。管理者は Data Migration Wizard を使って複数のバッチ（MNE コレクション）のユーザー移行を実施します。第 4 章で説明する SSDM（デスクトップごと）移行も、移行計画の一部となる場合があります。

- ① **注：**この章の前半で説明した「移行前に必要な準備」のすべての作業を完了するまでは、このバッチ移行プロセスを開始しないでください。

Office 365 ターゲットへのバッチ移行プロセスの概要を、次のフロー チャートに示します。フロー チャート内のステップ番号は、後述する手順のステップ番号に対応しています。

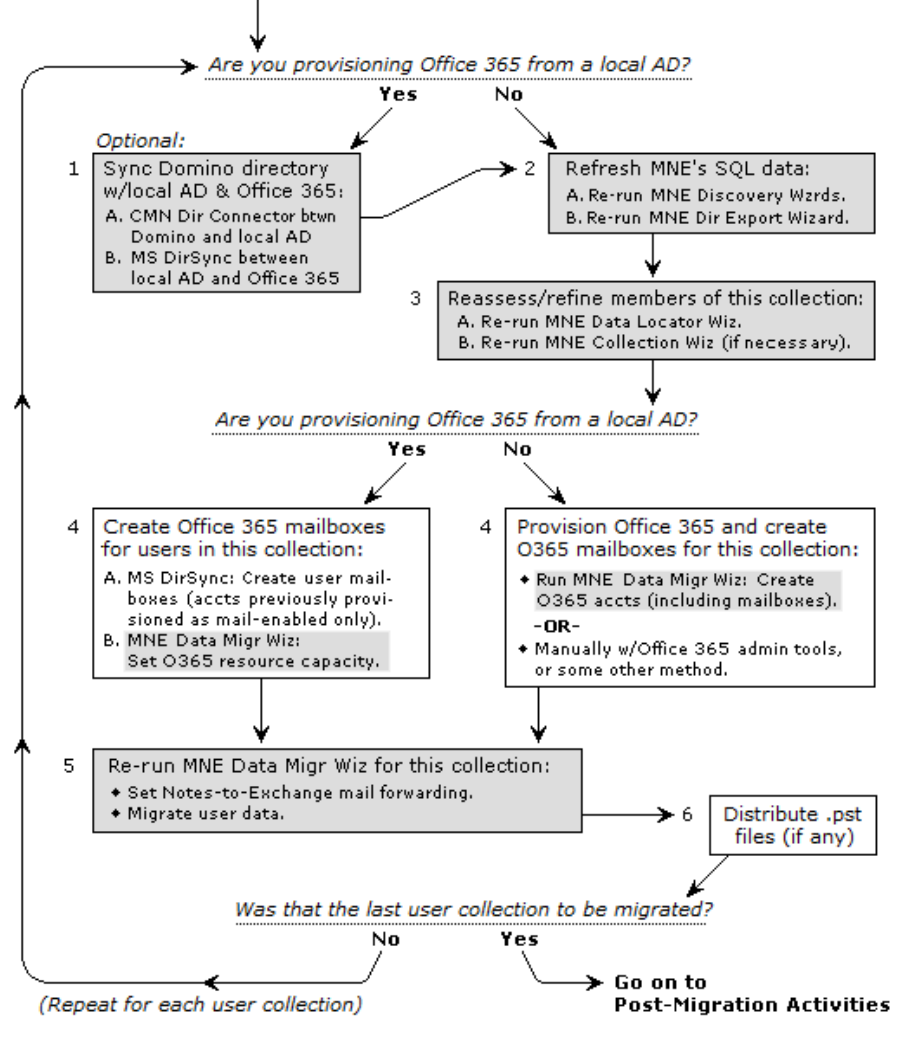
このバッチ移行手順は、フロー チャートのループ矢印が示すように、移行対象の**各ユーザー コレクションに対して繰り返されます**。

- ① **注：**一般的に Notes グループ（配布リスト）は、すべてのユーザーの移行後に個別に移行されます。この章の最後の「移行後のアクティビティ」の説明には、グループの移行が含まれています。


Gray Box step accomplished with MNE or CMN

MNE Batch Migration Process for Migration to Office 365

Continuing after Pre-Migration Preparations (Repeat this loop for each user collection.)



ステップ 1 (省略可能) : Directory Connector の再実行

If  **条件付きステップ** : ローカル Active Directory から Office 365 をプロビジョニングした場合にのみ適用され、ローカル Active Directory のプロビジョニングに Quest の CMN を使った場合このステップは省略可能ですが、実施することをお勧めします。それ以外の場合は、次のステップに進んでください。

多くの組織では移行期間中にも人員の採用や離職などの事態が発生します。また、オフィスの移転や従業員の異動や昇進なども発生します。移行前の準備作業で初期ディレクトリの更新を行った後に、移行プロジェクト中に行われたディレクトリの変更により、ソース/ターゲット環境間のデータの不整合が発生する可能性があります。このような問題に対処するために、Domino と Office 365 間の 2 ステップのディレクトリ更新を利用することができます。

- 1 Notes とローカルの Active Directory 間の双方向の更新を行うように、CMN Directory Connector を設定します。(詳細については、Quest の『[CMN ユーザーガイド](#)』の「Directory Connector」に関する章を参照してください)。

1. ローカル Active Directory と Office 365 を同期するように、Microsoft の AD Sync ツールを設定します。スケジュールした間隔でディレクトリ更新を自動実行するように、CMN の Directory Connector と Microsoft の AD Sync の両方を設定することができます。ただし、各コレクションを移行する直前までディレクトリの整合性を維持できるように、このステップで手動でディレクトリ更新を実施する必要があります。

① 注 : proxyAddresses を使って Office 365 に同期されたオブジェクトで、UPN が Office 365 ログインと一致するように変更された場合 (Domino から Exchange へのメール ルーティングが無効になる)、次の同期で proxyAddress が失われてしまいます。

ステップ 2 : MNE の SQL データの更新

ターゲット Exchange を最新のオブジェクト データでプロビジョニングするように、各ユーザー コレクションを移行する前に、MNE の SQL データベース内の情報を更新します。前のステップ (オプション) でディレクトリを更新した場合、この手順ですべてのディレクトリの変更が SQL データベースに中継されます。SQL サーバー データベースを更新するには :

- 1 MNE の NABs Discovery Wizard および Internet Domains Discovery Wizard を再実行して、Notes アドレス帳 (NAB) およびユーザーの SMTP エイリアスの生成に用いられるインターネットドメインのリストを更新します。
- 2 Directory Export Wizard を再度実行して、SQL サーバデータベース内のデータを更新します。

ステップ 3 : このユーザーコレクションのメンバーシップの再評価と (必要な場合は) 調整

MNE Data Migration Wizard は、この章の前半の「[移行前に必要な準備](#)」で定義した、コレクションと呼ばれる、特定のユーザーグループに適用されます。バッチ移行プロセスでは、これらの移行タスクが単一のユーザーコレクションに適用されます。

ディレクトリを更新して SQL データを更新したら (前の 2 つのステップ)、以下の作業を行う必要があります。

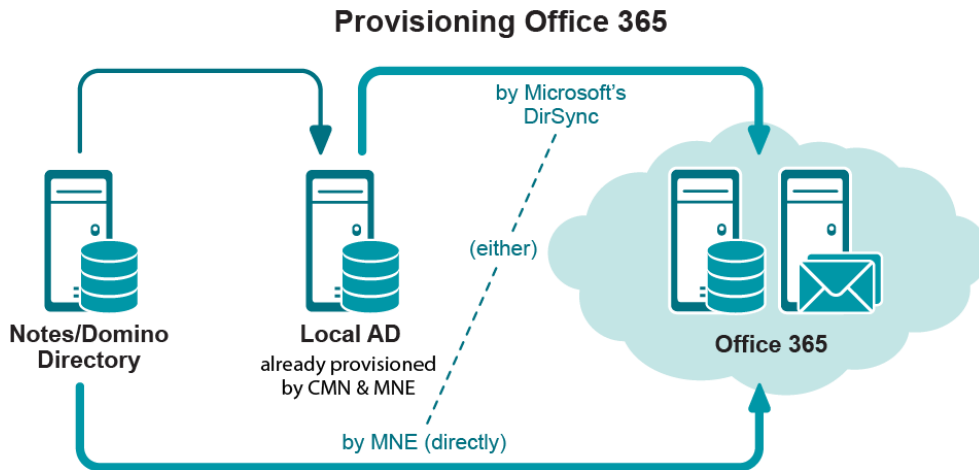
- 1 このコレクションに対して (のみ) MNE Data Locator Wizard を再実行して、次に [View Summaries] | [User and Resource Detail] を選択して、このコレクションの Notes ソースの、ユーザー当たりのデータ量を再評価します。Notes Data Locator Wizard については、『[MNE 管理ガイド](#)』の第 7 章を参照してください。Notes Migration Manager のサマリ表示 (View Summaries) 機能は、『[管理ガイド](#)』の第 1 章で説明されています。
- 2 このコレクションのメンバーシップを、このコレクションのメンバーで移行される合計データ量の観点から再評価します。「[移行前プランニングガイド](#)」の第 3 章で説明するように (「[バッチ移行とデスクトップごとの移行](#)」を参照)、グループ化方法、コレクション当たりの最適なユーザー数、および移行の MNE スケジュール設定などを考慮した組織のグループ化方針をより遵守できるように、コレクションのメンバーシップを調整することができます。

- 必要に応じて、このコレクションに対して Collection Wizard を再実行して、メンバーシップを変更します。Collection Wizard の操作方法とアプリケーション ノートについては、『MNE 管理ガイド』の第 5 章を参照してください。

注：一般的に Notes グループ（配布リスト）は、すべてのユーザーの移行後に個別に移行されます。この章の最後の「移行後のアクティビティ」の説明には、グループの移行が含まれています。

ステップ 4 : Office 365 メールボックスの作成

このステップを進行するには、Office 365 をローカル Active Directory からプロビジョニングしたのか（MS AD Sync を使用）、または Notes/Domino 環境から直接プロビジョニングしたのかに応じて、2 種類の方法があります。



ローカル Active Directory からプロビジョニングした場合

- MNE Data Migration Wizard を実行して、[Prepare local Active Directory accounts for MS AD Sync] (MS AD Sync 用のローカル Active Directory アカウントを用意) を選択します。これは MS AD Sync の実行前、および他の機能に対してウィザードを実行する前に実施する必要がある、必須の管理ステップです。
- Microsoft の AD Sync を実行して、あらかじめメール（のみ）有効オブジェクトとしてプロビジョニングされた（「移行前に必要な準備」）、このコレクション内のアカウントの Office 365 メールボックスを作成します。
- MNE の Data Migration Wizard を再実行して、[Set Office 365 resource capacity] を選択し、Office 365 のメールボックス有効化を完了します。

次に、この手順のステップ 5 に移動して、データの移行を行います。

Notes/Domino から直接プロビジョニングした場合

MNE の Data Migration Wizard を実行し、このユーザーコレクションに対して [Create Office 365] を選択します。この機能により、すべての Notes ユーザーが Office 365 にプロビジョニングされ、それらに対するメールボックスが作成されます。

または

Microsoft のオンライン管理ツールまたは他の手段を使って、Office 365 を手動でプロビジョニングします。

ステップ 5 : MNE の Data Migration Wizard の実行による、Notes から Exchange へのメール転送の設定とデータの移行

- ① **重要 :** (サーバー アクセスではなく) ファイル システム アクセスを使ってデータを移行する場合 :
- MNE の Data Migration Wizard を実行する前に、移行するすべてのユーザーがログ オフしていることを確認します。Quest では、Domino サーバー経由でデータにアクセスできる場合は、サーバー アクセスを使ってデータを検索、移行することをお勧めします。サーバー アクセスを利用できないまたは利用が実用的ではない場合や、ファイル システム アクセスを使用してデータの検索と移行を実行する必要がある場合は、現在のコレクション内のすべてのユーザーがシステムからログオフしていることを確認する必要があります。
 - また、サーバーのキャッシュ内で NSF ファイルが開かれていないことを確認してください。`dbcache flush` コマンドを使用すると、サーバーからログオフされたユーザーの代わりに、サーバーで開かれたままになっているすべてのファイルを閉じることができます。`dbcache flush` コマンドを実行すると、移行中に MNE による NSF ファイルへのアクセスを、サーバーがブロックすることを防止できます。

Data Migration Wizard を再実行して以下の作業を行います。

- このコレクション内のユーザーの、Notes から Exchange へのメール転送を設定します。
- 選択したコレクション内のユーザーに対して、Domino サーバーから Exchange 環境に、ユーザー データを移行します。

詳細な手順と注意事項については、『MNE 管理ガイド』の「Data Migration Wizard」の章を参照してください。

ステップ 6 : .pst ファイルの配布 (存在する場合)

Data Migration Wizard を使用してデータを Outlook 個人用フォルダ ファイル (.pst) に移行した場合は、移行完了後に、次のいずれかの操作を実行する必要があります。

- ユーザーに、新しい .pst ファイルの場所を通知します (これにより、各ユーザーは、自分のデスクトップにある Outlook のコピーの場所を指定できます)。
または
- 新しく作成された .pst ファイルをユーザーのデスクトップに配布します。

Data Migration Wizard では、関連付けられているユーザー ID によってすべての新しい .pst ファイルに名前が付けられます。たとえば、ユーザー ID に対して複数のファイルが生成されている場合は、*Smith.pst*、*Smith-1.pst*、*Smith-2.pst* のように、ファイル名に 1 つずつ番号が増分して付きます。

- ① **注 :** PST ファイルの場所は、次の画面で確認できます。
- User migration status per collection レポートは、Notes Migration Manager の [View Summaries] (サマリーを表示) 画面から表示できます。
 - Report Pack Report は、Notes Migration Manager の [View Report Pack] (Report Pack を表示) 画面から表示できます。

最後の移行コレクションですか？

これが最後の移行コレクションでない場合、次のコレクションに対して、この「**バッチ移行プロセス**」全体を繰り返します。これが最後の移行コレクションだけれども、MNE の SSDM で個別に移行する Notes ユーザーが存在する場合 : この『シナリオガイド』の「SSDM (デスクトップごと) 移行」の章を参照してください。


他に移行するコレクションがなく、SSDM (デスクトップごと) プログラムで移行するユーザーが残っていない場合は、後述の「**移行後のアクティビティ**」を必ず参照してください。

移行後のアクティビティ

ステップ 1 : Notes グループの Office 365 へのプロビジョニング

一般的にグループは、「[バッチ移行プロセス](#)」(この章の前のセクション)ですべてのユーザーを移行した後に、個別にプロビジョニングを行います。グループに関連付けられている唯一のデータは、そのグループのメンバーリストであるため、グループの「移行」は、ターゲット ディレクトリにプロビジョニングされたグループのみで構成されます。MNE の Groups Provisioning Wizard を使って、Notes から Office 365 に直接プロビジョニングしたり、またはローカルの「[ステージング](#)」Active Directory に移行した後、Microsoft の AD Sync ツールを使ってローカル Active Directory から Office 365 にグループをプロビジョニングしたりすることができます。


より処理を手軽に行うために、Groups Provisioning Wizard を実行する前に、MNE の Collection Wizard を使って、グループをコレクションに分割することができます。グループを Active Directory にプロビジョニングする前に、必要に応じて SQL データベース内のグループ メンバーシップおよび属性を更新することができます (TSV のエクスポートとインポートを利用)。手順の説明と注意事項については、『[MNE 管理ガイド](#)』の「Groups Provisioning Wizard」の章を参照してください。

 **注:** ネスト化された Notes グループ (例: グループ A にグループ B が含まれている) を Office 365 に完全にプロビジョニングするためには、Microsoft の AD Sync ツールを 2 回実行する必要があります。

すべての Notes ユーザーの移行が完了する前にグループをプロビジョニングする必要がある場合は、Notes ユーザーがメッセージを送信できるようにする任意の Exchange グループの、メッセージの配信制限を忘れずに確認してください。そのような Exchange グループをメール有効にするには、配布タイプがユニバーサルでなければなりません。設定を変更するには、Exchange 管理コンソールで:

- 1 [受信者の設定] | [配布グループ] で編集するグループを選択し、それをダブル クリックします。
- 2 [メールフローの設定] タブをクリックして [メッセージの配信制限] を選択し、上の [プロパティ] をクリックします。
- 3 [認証されたユーザーからのメッセージのみ] チェックボックスをオフにします。
- 4 変更内容を保存して、Exchange トランスポート サービスを開始します。

ステップ 2 (省略可能): 継続的なディレクトリ共存の設定

 **条件付きステップ:** このセクションは、ホスト型プラットフォームに加えて、ローカルの独自型 Active Directory も維持する場合にのみ適用されます。

ローカル Active Directory の稼働を維持するには、Microsoft Online Services AD Sync ツールを使って定期的にローカル Active Directory とホスト型 Active Directory を同期します。このような継続的な同期を行うための、Microsoft AD Sync ツールの設定方法については、Microsoft のドキュメントを参照してください。

Domino ディレクトリについても一定期間 (または無期限に) 稼働を維持するには、Domino ディレクトリとローカル Active Directory を定期的に更新するように、Quest の CMN Directory Connector を設定する必要があります。

ステップ 3 : メールルーティングの更新

移行中の適切なルーティングを保証するために、一般的には MNE を使って両方のシステム内のメール転送を自動的に更新します。メール ルーティング ドメインまたはスマート ホストが適切に設定されている場合、MNE は両方の環境の転送ルールを設定、削除することができます。

ユーザーとグループをすべて移行したら、外部 (インターネット) 着信メールを Notes 環境ではなく Office 365 環境にルーティングするように、永久的に更新することができます。このステップには、着信外部メールをリダイレクトするように、MX レコードを変更する作業が含まれています。一部の環境では、メール ルーティングの更新作業に、ルーティング テーブルの更新やファイアウォールの変更が含まれることもあります。

大部分の組織では、移行前および移行プロセス中の変更を最低限に抑えるために、最後のユーザーを移行した後にのみメール ルーティングの更新が行われます。ただし、実質的に MX の変更は、すべての Notes ユーザーが Office 365 内にメール有効オブジェクトとしてプロビジョニングされた後は、任意の時点で行うことができます (あるユーザーがプロビジョニングされる前に、着信メールを Office 365 に転送するようにルーティングを更新した場合、ユーザーのメールを Notes に戻すための転送アドレスが Office 365 には存在しません)。そのためこのステップのタイミングは、Office 365 のプロビジョニング方法によって異なります。

- **Microsoft の AD Sync を使ってローカル Active Directory から Office 365 をプロビジョニングした場合** : 「移行前に必要な準備」で、Notes ユーザーをメール有効オブジェクトとして Office 365 にプロビジョニングします。
- **Notes/Domino ソースから直接 Office 365 をプロビジョニングした場合** : Notes ユーザーは、ユーザー バッチ当たりのユーザー移行を実施する直前まで、Office 365 にはプロビジョニングされません。

ステップ 4 : 移行後の「クリーンアップ」

最後のユーザーの移行後にクリーン アップを実施するには :

- 1 Notes サーバーが非アクティブになっていることを確認します。Notes サーバーがメールトラフィックを処理しておらず、またアクティブなアプリケーションで利用されていないことを確認してください。
- 2 SMTP メール共存を使用している場合 : 移行中の Notes と Office 365 間のルーティングをサポートするために「移行前に必要な準備」で作成した、一時メール ルーティング MX ドメインを削除します。すべてのユーザーが Office 365 に移行され、着信トラフィックが直接 Office 365 にルーティングされるようになったら、一時ルーティング ドメインは不要になります。
- 3 Notes 環境が不要な場合 : Notes が非アクティブになっていることを確認後、最終的なバックアップを作成し、環境を廃止することができます。

SSDM（デスクトップごと）移行

- SSDM を使用する時期と理由
- SSDM を実行する前に
- SSDM の設定
- デスクトップごとの移行のサイレント モード オプション

SSDM を使用する時期と理由

バッチ移行とデスクトップごとの移行は、別の移行エンジンを使って実施します。どちらのエンジンも、Migrator for Notes to Exchange に用意されています。この章では管理者の、MNE の Self-Service Desktop Migrator (SSDM) による、デスクトップごとのプランニングと展開について説明していきます。バッチ移行（複数のユーザーを同時に移行、管理者が実行）については、前の 2 つの章のバッチ移行に関する説明を参照してください。それらの章では、独自型 Exchange ターゲットへの移行方法と、Microsoft Office 365 への移行方法に関する説明が記載されています。

SSDM は、エンド ユーザーまたは管理者（エンド ユーザーの代理として）が、1 人のユーザーの Notes データを抽出し、Exchange に移行するために使用します。状況や設定に応じて、SSDM を使用して、各ユーザーのデスクトップから、一部またはすべてのデータを一度 1 つずつ移行することを選択できます。たとえば、ユーザーの個人ワークステーション上にユーザーアーカイブが存在しており、デスクトップ単位のツールを使ってアーカイブを移行する方が、すべてのローカルアーカイブの場所にある各ユーザー単位のユーザーデータを SQL データベースにエクスポートするよりも簡単なような場合は、デスクトップごとのツールを使って移行を行います。

MNE の SSDM には、ユーザーのワークステーションのメモリー内で動作する分散移行オプションが用意されています。SSDM は共有から実行され、エンドユーザーの関与を最小限に抑えるための、オプションのサイレントモード（Silent Mode）が用意されています。また、ローカルには何もインストールされません。これらの機能により、移行中または移行後に管理者が各デスクトップを訪れる必要はありませんが、必要に応じて特定のユーザーのデスクトップから、SSDM を実行することも可能です。デスクトップごとの移行オプションは、移行の一部にのみ使用することも（例：ローカルアーカイブ用など）、すべてのユーザーデータ（Exchange メールボックス、PST ファイル、またはその両方）の移行に使用することもできます。

SSDM を実行する前に

最初のデスクトップ移行を実施する前に、すべての移行前準備作業を管理用していることを確認してください（独自型 Exchange ターゲットまたは Microsoft Office への移行について説明している、前の 2 つの章の移行前の準備」を参照）。移行前タスクは、SSDM または Data Migration Wizard（データ移行ウィザード）を初めて実行する前に 1 回のみ実行します（以降アプリケーションを実行するたびに繰り返し実行することはありません）。

共存付き移行の場合：Directory Exporter を最後に実行した後で、新しいユーザーが採用されたり離職した場合は、SQL データベースのエクスポートされたディレクトリ データの更新が必要になることがあります。ディレクトリの更新や Quest データテーブルの更新の推奨手順については、『MNE 管理ガイド』の付録 A の「ディレクトリデータを同期し、SQL Server データベースを更新するには」を参照してください。

以下も検討してください。

- SSDM のカスタマイズオプション
- .Net バージョンおよび CAS 権限の確認
- SSDM プログラムの配布とユーザーへの通知
- SSDM を App-V と一緒に実行する場合

SSDM のカスタマイズオプション

SSDM は環境によって異なる動作となるよう設定し、さまざまなニーズと状況に適合させることができます。以下のトピックでは、SSDM をニーズに合わせて設定する方法について説明します。これらのプログラムのカスタマイズは、後述する「[SSDM の設定](#)」のサブトピックで詳細に説明しているように、*notesdtapp.ini* ファイルの特定のパラメータを操作することで実行できます。

SSDM のカスタマイズ機能によっては、特定の移行戦略に従って特定の選択肢を増やしたり減らしたりできます。たとえば、ユーザーのサーバメールおよびアドレス帳をバッチで移行してから、Desktop Migrator を使用してユーザーのアーカイブのみを移行する場合は、アーカイブのみを移行し、サーバメールまたはアドレス帳を移行するオプションを提供しないように、SSDM をカスタマイズすることができます。

.Net バージョンおよび CAS 権限の確認

SSDM では、Microsoft .Net Framework バージョン 2.0 を各エンド ユーザーのワークステーションにインストールする必要があります。エンド ユーザーが（各ユーザーのローカル コピーからではなく）ネットワーク共有から SSDM アプリケーションを実行する場合、各ユーザーのワークステーションには .Net 3.5 SP1（以降）がインストールされているか、ネットワーク共有内の SSDM に完全な信頼を付与する Code Access Security (CAS) ポリシーが必要です。

エンド ユーザーのワークステーションで CAS ポリシーを追加する

たとえば、SSDM がフォルダ `\\server1\shared\SSDM\` にある場合、管理者がクライアント マシンで次のコマンドを実行すると、必要な権限を付与できます。

```
%windir%\Microsoft.NET\Framework\v2.0.50727\CasPol.exe -machine  
-addgroup 1 -url file: \\server1\shared\SSDM* FullTrust -name MNE_SSDM
```

CasPool.exe の詳細については、Microsoft のオンライン テクニカル ライブラリの[この記事](#)を参照してください。また、Microsoft KB 記事「[How to determine which versions and service pack levels of the Microsoft .Net Framework are installed](#)（インストールされている Microsoft.NET Framework のバージョンとサービス パックのレベルを確認する方法）」も参照してください。

SSDM プログラムの配布とユーザーへの通知

エンド ユーザー（管理者ではなく）が SSDM を実行する場合、プログラム ファイルの場所、プログラムを実行するためのデスクトップの準備方法、およびプログラムの実行方法について指示する必要があります。

- ① **重要：**すべてのユーザーが、*notesdtapp.exe*（SSDM プログラムファイル）および *AddressTranslation.bin* ファイルを格納するシェアに対する読み取り専用アクセス権を持っていることを確認してください。パスは、Notes Migration Manager の [Shared Directories Configuration] 画面にある、[MNECommon application directory] フィールドに指定されています。メッセージ、アドレス帳、およびカレンダー コンテンツ内のアドレスを変換するために、SSDM は Directory Export Wizard が生成するアドレス変換ファイルにアクセスする必要があります。
- ① **重要：**エンド ユーザーの SSDM ワークステーション上で実行されているウイルス対策ソフトウェアは必ず、Quest プログラム ファイル ディレクトリまたは *%temp%* ディレクトリをスキャンしないように設定する必要があります。または、SSDM アプリケーションを実行する前にウイルス対策ソフトウェアを無効にし、SSDM の実行後にそれを復元してください。ユーザーのウイルス対策プログラムやデスクトップ検索アプリケーションを終了する（および復元する）方法も指示するようにします。ウイルス対策ソフトウェアが MNE の一時ファイルを脅威として誤認識すると、そのようなファイルの削除が試行され、プログラムが呼び出しに失敗した場合にエラーが発生します。

通常管理者は、SSDM プログラムへのリンクを記載したメールをユーザーに送信し、ユーザーがメールをクリックするだけでプログラムを起動できるようにします。移行中のヘルプ デスク コールを最小限に抑えるために、このメールには、他の関連情報（前のメモを参照）を記載することもできます。

また、Quest の『[Self-Service Desktop Migrator ユーザーガイド](#)』（PDF 形式）のコピーも添付する必要があります。このマニュアルには、エンドユーザー向けのデスクトップごとのプログラムの操作方法が記載されています。『[SSDM ユーザーガイド](#)』は、MNE ソフトウェアに付属します。PDF ファイルをパブリックアクセスフォルダにコ

ピーし、SSDM プログラムの通知メールと同じメールにリンクを貼るか、添付ファイルとしてメールに追加できません。

SSDM を App-V と一緒に実行する場合

SSDM は Outlook 仮想アプリケーションパッケージと一緒に配置する必要があります。SSDM を個別に配置することはできません。そうしないと、SSDM でローカル Outlook インストール ディレクトリにアクセスすることはできません。Notes クライアントはローカルにインストールするか、または同様に Outlook パッケージと一緒に配置する必要があります。

また、NotesDtApp.exe の OSD ファイルも編集する必要があります。以下の項目を探して：

```
<VM VALUE="Win32">
  <SUBSYSTEM VALUE="windows"/>
</VM>
```

... パラメータ値を「windows」から「console」に変更してください。

SSDM の設定

SSDM は環境によって異なる動作となるよう設定し、さまざまなニーズと状況に適合させることができます。以下のトピックでは、SSDM をニーズに合わせて設定する方法について説明します。これらのプログラムのカスタマイズは、後述するサブトピックで詳細に説明しているように、*notesdtapp.ini* ファイルの特定のパラメータを操作することで実行できます。

- [Notes「Active Mail」処理の有効化 / 無効化および構成](#)
- [異なるデータ タイプのデータ宛先の設定](#)
- [移行されなかったメッセージを追跡するオプション](#)
- [Error Log Report \(エラーログレポート\) ボタンを表示する \(または表示しない\) オプション](#)
- [SSDM のスケジュール設定と調整の準備](#)
- [SSDM 統計コレクションの準備](#)

SSDM のその他のカスタマイズ機能では、特定の移行戦略に従って特定の選択肢を増やしたり減らしたりできます。たとえば、ユーザーのサーバメールおよびアドレス帳をバッチで移行してから、Desktop Migrator を使用してユーザーのアーカイブのみを移行する場合は、アーカイブのみを移行し、サーバメールまたはアドレス帳を移行するオプションを提供しないように、SSDM をカスタマイズすることができます。この「サイレントモード」機能の詳細については、後述する「[デスクトップごとの移行のサイレントモード オプション](#)」に説明があります。

Notes「Active Mail」処理の有効化 / 無効化および構成

Active Mail 処理は、Notes のコンテンツ豊富な機能を検出して変換でき、メッセージに「ライブ」または「アクティブ」な機能的コンテンツを盛り込むことができる任意選択の機能です。Active Mail に関する詳細は、MNE の『[移行前プランニングガイド](#)』の第 3 章の「Notes「Active Mail」を移行」を参照してください。

MNE の Data Migration Wizard には Active Mail 処理の有効化 / 無効化および構成のオプションがありますが、SSDM ではこれらの機能は *notesdtapp.ini* ファイルのプログラム パラメータのみによって有効化および構成できます。Active Mail 処理はデフォルトで無効になっています (パラメータが *notesdtapp.ini* から削除されている場合)。

SSDM で Active Mail 処理を有効化し構成するには、*notesdtapp.ini* に次のパラメータを設定します。

- **[Notes] MigrateActiveMail=<#>**
Boolean、デフォルト = 0
MNE の Active Mail 機能が有効 (1) か無効 (0) かを決定します。
- **[Notes] ActiveMailTemplatePath=<string>**
String、デフォルト = <MNE インストール ディレクトリ>\ActiveMail.ntf
MNE Active Mail テンプレート ファイルのフルパス (ファイル名を含む) を指定します。このファイルで、MNE が Notes OVD 添付ファイルを適切に処理し Active Mail 添付ファイルを作成するために必要な情報を提供します。MNE ではデフォルトの *ActiveMail.ntf* を MNE インストール ディレクトリにインストールします。このパラメータのデフォルトの文字列がそのパスになりますが、別のパスも指定できます。

- **[Notes] ActiveMailNotificationMessagePath=<string>**
String、デフォルト = <MNE インストール ディレクトリ>\ActiveMailNotificationMessage.txt
MNE Active Mail 通知メッセージ テキスト ファイルのフルパス（ファイル名を含む）を指定します。
SSDM は、Active Mail を格納する移行済みのメッセージの本文の先頭にこのファイルの内容を挿入します。
MNE ではデフォルトのファイルである *ActiveMailNotificationMessage.txt* が MNE インストール ディレクトリにインストールされます。このパラメータのデフォルトの文字列がそのパスになりますが、別のパスも指定できます。

① **注:** テキスト ファイルは UTF-8 でエンコードされていて、*\$ActiveMailAttachment\$* と呼ばれるプレースホルダーを含む必要があります。メッセージが移行されると、このプレースホルダーは SSDM によって Active Mail NSF 添付ファイルに置き換えられます。このファイルの内容が RTF 本文の一部になるため、「\」、「{」、「}」などの文字の前に「\」を付けて、エスケープする必要があります（前述の文字はそれぞれ、「\\」、「\{」、「\}」になります）。

- **[Notes] ActiveMailAttachmentName=<string>**
String、デフォルト = ActiveMail.nsf
MNE で Active Mail 添付ファイルに割り当てるファイル名を指定します。このファイル名は Outlook メッセージに表示されます。
- **[Notes] ActiveMailTypes=<#>**
Integer、デフォルト = 31
Active Mail の処理の種類を指定します。この値は次の個々の種類に関連付けられた値の合計です。

暗号化メール（値 = 1）
保存フォーム（値 = 2）
ホットスポット（値 = 4）
リッチ マークアップ（値 = 8）
「Form」フィールドのないメッセージ（値 = 16）
ドロップダウン セクション（値 = 32）

SSDM に暗号化メール（1）、保存されたフォーム（2）、ドロップダウン セクション（32）の処理を指示する場合、*ActiveMailTypes* の値は 35（1 + 2 + 32）になります。デフォルト値の 31 は、ドロップダウン セクションを除くすべての種類を SSDM に処理するように指示します。

異なるデータ タイプのデータ宛先の設定

SSDM では移行データの移行先（Exchange 内）を GUI で選択することはできず、移行先は *notesdtapp.ini* ファイルの [General] セクションにある 3 つのパラメータによって制御されます。MNE では、移行する主な 3 つのデータ タイプ（アーカイブ、アドレス帳、サーバーベースのデータ）それぞれについて、Exchange または Office 365 内の移行先を指定できます。各タイプは、ユーザーのサーバメールメールボックス、ユーザーの pst ファイル、または個人アーカイブ（サーバーベース）メールボックスに移行できます

SSDM の画面では移行先を選択することはできず（バッチ移行の Data Migration Wizard とは違い）、移行先は *notesdtapp.ini* の [General] セクションにある次の 3 つのパラメータによって制御されます。

```
[General]
ArchiveDest=Server
PABDest=Server
ServerMailDest=Server
```

特定のデータ タイプ（アーカイブ、PAB、またはサーバー メール）の送信先（ユーザーのサーバー メールまたは pst ファイル）は、各パラメータによって決定されます。

暗号化されたメッセージを PST へ移行するためのオプション

オプションで SSDM は、移行用としていくつの *source.nsf* ファイルが選択されていても、暗号化されたメッセージを別の PST ファイルに送ることができます。この機能は *notesdtapp.ini* パラメータで有効 / 無効にし、このパラメータはターゲット PST ファイルのフルファイル名と拡張子も指定します。

```
[General]
EncryptedPstFileName=<filename.pst>
```

その後 SSDM を実行すると、プログラムはそれまでの PST ファイルを保存し、指定されたファイル名に自動的に数字を追加して、以前に移行済みの PST と区別します (*filename.pst*、*filename_1.pst*、*filename_2.pst* など)。デフォルトは [null] で実質的に機能が無効となるため、暗号化メッセージは他のすべての (暗号化されていない) 移行されたアイテムと同じ PST ファイルに送られます。

この機能が有効になるのは、以下によってすべての移行されたアイテムが PST に送られる場合のみです。

```
[General]
ServerMailDest=PST
ArchiveDest=PST
PABDest=PST
```

PST 以外の移行先に送られるアイテムタイプが存在する場合、*EncryptedPstFileSuffix* パラメータは無視されます。

移行されなかったメッセージを追跡するオプション

ターゲットに移行されなかったメッセージのフォルダを生成するよう、SSDM を設定することができます。このようなアイテムは、ユーザーの Notes メールボックス内の新しいフォルダにある DocLink として参照されます。この機能は、*notesdtapp.ini* の [Notes] セクションに追加された 2 つの新しいプログラムパラメータにより、有効 / 無効にすることができます。

```
[Notes]
WriteFailedMessageListToThisMbxFolder=<string>
WriteFailedMessageListClass=<keyword(s)>
```

WriteFailedMessageListToThisMbxFolder パラメータは、ユーザーのメールボックスに追加し、移行されなかったメッセージを格納するフォルダの名前を指定します。*WriteFailedMessageListClass* は、この機能で取得するメッセージ障害の 1 つ以上のタイプを指定します。有効なキーワード値は *Errored*、*Skipped*、および *Filtered* です。複数のタイプを指定するには、この例のように複数のキーワードをパイプ (「|」) 文字で区切ります。

```
WriteFailedMessageListToThisMbxFolder=FailedMessages
WriteFailedMessageListClass=Errored|Skipped|Filtered
```

この例では、SSDM がすべての *Errored*、*Skipped*、および / または *Filtered* メッセージのコピーを作成し、それをユーザーのメールボックスの *FailedMessages* という名前の新しいフォルダに保存します。

この機能は、*WriteFailedMessageListToThisMbxFolder* パラメータに何らかの値を入力すると有効になります (パラメータを省略するか、値が空だった場合、この機能は無効になり、*WriteFailedMessageListClass* が無視されます)。この機能はデフォルトで無効となり (*WriteFailedMessageListToThisMbxFolder* が省略されるか、値が [null] の場合)、デフォルトで *WriteFailedMessageListClass=Errored* (のみ) となります。

Error Log Report (エラーログレポート) ボタンを表示する (または表示しない) オプション

SSDM は、ユーザーがプログラムのログファイルを表示し、プログラムの実行中に発生したエラーに関する詳細情報を確認できるようにする、Error Log Report (エラーログレポート) ボタンを表示するようデフォルトで設定されています (エラーが発生しなかった場合、このボタンは表示されません)。また、*Error Log Report* (エラーログレポート) からログ ファイルを保存したり、コピーを印刷することもできます。

この機能はデフォルトで有効になっていますが、notesdtapp.ini 設定ファイル内のブールパラメータによって無効（どのような場合でもボタンを表示しない）にできます。

```
[General]
ShowSSDMErrrorLogButton=<#>
```

大きなログファイルにアクセスするとユーザーデスクトップがハングするような環境では、このボタンを無効にすると便利です。

SSDM のスケジュール設定と調整の準備

MNE には、ユーザーによる SSDM の実行を制御する SSDM Throttling Utility が含まれており、これによって、ネットワークとサーバーのリソースに対する要求を均等に配分できます。各ユーザー コレクションは、メンバー ユーザーが移行を許可されたときに、移行の「ウィンドウ」（特定の日付と期間）に割り当てられます。ユーザーによって SSDM が実行されると、プログラムはユーザーのログイン認証情報でユーザーを識別し、スケジュールをチェックして、ユーザーが移行スケジュールより前なのか、後なのか、またはウィンドウ（対象期間）内なのかを確認します。

また、大勢のユーザーが同時に SSDM を実行すると生じる可能性があるボトルネックの処理を回避するため、SSDM Throttling Utility を使用して、同時に実行できる SSDM プログラム数の制限を設定することができます。ユーザーによる SSDM の実行が制限を超えた場合は、ユーザーの待機リストに「待機」用のオプションが表示されます。これを使用すると、ユーザーは次に対応可能なスロットで移行プログラムを実行できます。

この方法でエンド ユーザーの SSDM の使用を制御する場合は、移行を開始する前に（この時点で）、SSDM Throttling Utility を実行します。このユーティリティの詳細は、『MNE 管理ガイド』の第 14 章を参照してください。

SSDM 統計コレクションの準備

MNE には SSDM Statistics Collection Wizard が用意されています。このウィザードを使って、SSDM によって書き込まれた移行統計データを収集し、そのデータを SQL データベースに読み込むことができます。このデータを利用して、移行プロジェクトの進捗状況を追跡することができます。ユーザーが Self-Service Desktop Migrator を実行すると、指定ディレクトリに実行統計情報が毎回書き込まれます。ウィザードでは、これらの統計データを収集して SQL Server データベースに追加し、Notes Migration Manager の *Project View*（プロジェクトビュー）画面に表示されるようになります。

SSDM Statistics Collection Wizard の詳細と設定方法については、『MNE 管理ガイド』の第 11 章を参照してください。

デスクトップごとの移行のサイレント モード オプション

Quest の Self-Service Desktop Migrator は、ほとんどのエンドユーザーが簡単に実行できるように、シンプルで使いやすくなっています。一部の管理者は、Desktop Migrator をカスタマイズすることで、プロセスをさらに単純化し、特定の移行戦略に従って特定の選択肢を強化したり排除したりしています。たとえば、ユーザーのサーバーメールおよびアドレス帳をバッチで移行する場合は、SSDM を使用してユーザーのアーカイブのみを移行し、サーバーメールまたはアドレス帳を移行するオプションを提供しないように、SSDM プログラムをカスタマイズすることができます。

SSDM をカスタマイズして、特定の画面がスキップされるようにしたり、**すべての画面を非表示**（真の意味で「サイレントモード」で実行し、エンドユーザーからの入力や他の介入を要求されない状態）にすることができます。画面の表示をスキップするように設定されている場合、プログラムには情報を取得する代わりに方法が必要です。代わりに方法がない場合は、画面のフィールドから情報を収集します。プログラムでは、たとえば Windows レジストリや Outlook 初期化ファイルなどの操作環境から一部の値を読み取ったり、推測することができます。また、一部の値は、notesdtapp.ini ファイルのパラメータで指定できます。以下の最初のサブトピックで説明するように、一部の値は notesdtapp.ini ファイル内のパラメータで指定することもできます。

これらのサイレントモードプログラムのカスタマイズはオプションで、notesdtapp.ini ファイル内の特定のパラメータを操作することで行います。パラメータをデフォルト値のままにすると、SSDM はデフォルトモードで実行され、すべての画面とオプションが表示されます。

移行前にさまざまなユーザー タイプのニーズに合わせて複数の設定を作成し、各ユーザーにそれに対応する設定のリンクを記載して配布することができます。詳細については、以下を参照してください。

- Desktop Migrator をサイレント モードで実行するためのコマンドライン スイッチ
- notesdtapp.ini でのサイレント モードの設定
- notesdtapp.ini でのプログラム エントリ値の提供
- ユーザーに対して画面全体の非表示
- [Specify Data for Migration] (移行するデータを指定) 画面の特定のユーザー選択肢の非表示
- 例 : アーカイブのみを移行する場合

Desktop Migrator をサイレント モードで実行するためのコマンドライン スイッチ

SSDM をサイレントモードで実行した場合、プログラムは Windows レジストリや Outlook 初期化ファイルなどの操作環境から一部の値を読み取ったり、推測することができます。また、一部の値は、notesdtapp.ini ファイルのパラメータで指定できます。一部の値は、Desktop Migrator の実行時に、プログラムコマンドに追加されるコマンドラインスイッチから提供することもできます。例 :

```
notesdtapp /silent /notesid "c:\Documents and Settings\JDoe\Local Settings\Application Data\Lotus\Notes\Data\jdoe.id" /notespass password ....
```

この notesdtapp コマンドで使用可能なスイッチの中では、/silent スイッチが引数を伴わない唯一のスイッチになります。

- /silent : プログラムを文字通り「サイレント」で (画面がまったく表示されない状態) で実行します。他のスイッチ (以下を参照) や INI-file パラメータから入力データを取得できず、操作環境からも推測不可能な場合は、ログにエラーが記録され、プログラムが中止されることがあります。
- /notesid <ユーザー ID> : ユーザーの Notes UserID のフルパスとファイル名。
- /notespass <Notes パスワード> : 前述の UserID に関連付けられているパスワード。
- /tgtprofile <プロファイル名> : 移行する Outlook プロファイル (Notes サーバー データ、アーカイブ、個人アドレス帳のいずれかまたはこれらの組み合わせを格納するプロファイル)。
- /tgtpass <Outlook パスワード> : 前述のターゲット Outlook プロファイルに関連付けられているパスワード。
- /tgtdomain <DomainName> : ターゲット Exchange メール サーバーのドメイン名。
- /tgtuser <AD ユーザー名> : 前述の Outlook プロファイルに関連付けられている AD ユーザー名。
- /tgtmsgstore <メールボックス名> : ターゲット Outlook メールボックスの名前 (前述の Outlook プロファイルに複数のメールボックスが含まれている場合)。

notesdtapp.ini でのサイレント モードの設定

サイレント モードを設定する場合、移行チームは事前に notesdtapp.ini ファイル内に、何を移行するか、移行する各データ タイプのターゲット、およびフィルタや他の項目を設定します。例 :

```
[General]
MigratePAB=0
MigrateServerMail=0
MigrateArchives=1
ArchiveDest=Server
ArchiveDestServerArchive=1
```

... この場合、エンドユーザーが SSDM を起動したときにアーカイブのみを移行し、個人用アーカイブに基づいてユーザーのサーバに移行データを配置します。

ユーザー コミュニティに提供する柔軟性や管理方法に応じて、さまざまな程度のサイレント モードオプションを設定することができます。ただし、一般的にはできる限り「サイレント」に実行されるように設定が行われず。つまり、ユーザーは各自の Notes パスワードを入力するだけで、移行を完了できるように設定します。

notesdtapp.ini でのプログラム エントリ値の提供

特定の画面表示をスキップするように Self-Service Desktop Migrator を設定した場合は、本来それらの画面のフィールドで収集される情報を取得する、代替方法を用意する必要があります。プログラムでは、Windows レジストリや Outlook の初期化ファイルなどのオペレーティング環境から一部のエントリ値を読み取って推測できますが、notesdtapp.ini ファイルのパラメータでも一部の値を指定できます。

エントリ値を INI ファイルで指定すると、プログラムの実行時に対応する画面やオプションが表示される場合は、エントリ値がデフォルト値として表示されます。画面やオプションが表示されない場合は、値としてそのまま使用されます。

[Specify Data for Migration] (移行するデータを指定) 画面の選択肢

[Specify Data for Migration] (移行するデータを指定) 画面で選択する任意またはすべての選択肢は、次のパラメータによって notesdtapp.ini で指定できます。

```
[ArchiveData]           [ServerData]
MigrateArchives=1       MigrateTrashFolder=1
MigrateTrashFolder=1
MigrateServerMail=1
MigratePAB=1
```

パラメータ値 1 を設定すると、オプションが「はい」（画面が表示されない場合にデータタイプが移行される）に設定されるか、関連するチェックボックスがデフォルトでオンになります。値を 0 に設定すると、オプションが「いいえ」に設定されるか、関連するチェックボックスがデフォルトでオフになります。この機能が *AppDoesXxxx=0* により無効になっている場合（後述の「[Specify Data for Migration] (移行するデータを指定) 画面の特定のユーザー選択肢の非表示」を参照）、対応する INI ファイルパラメータは無視されます。

これらのパラメータの一般的な使用法は、*MigrateWhat=skip* または *MigrateWhat=silent*（後述の「ユーザーに対して画面全体の非表示」を参照）を使用して [Specify Data for Migration] (移行するデータを指定) 画面をスキップするようにプログラムが設定されている場合に、必要なエントリ値を提供することです。

[Select Profile] (プロファイルを選択) 画面の Outlook プロファイル

プログラムによってユーザーのコンピュータ上に複数の適格な Outlook プロファイルが検出された場合、またはまったく検出されなかった場合は、[Select Profile] (プロファイルを選択) 画面が表示され、プロファイルを変換するように求められます。ユーザーのコンピュータ上で適格な Outlook プロファイルが 1 つだけ検出された場合、それは使用する正しいプロファイルと見なされ、[Select Profile] (プロファイルを選択) 画面は表示されません。エンドユーザー プログラムは [Select Profile] (プロファイルを選択) 画面をスキップするように設定できますが、その場合は、使用する正しい Outlook プロファイルをプログラムが識別できるようにする必要があります。ユーザーの Outlook プロファイルは、notesdtapp.ini に指定できます。

```
[General]
SelectedProfile=<ProfileName>
```

ユーザーの Outlook プロファイルを INI ファイルで指定するのは、次の場合に限定されます。

- その INI ファイルを持つプログラムを実行するすべてのユーザーが、同じプロファイル名を持っている（たとえば、「マイ プロファイル」など、一般的な一部の名前。ただし、各ユーザーのプロファイルは、ユーザーのローカルワークステーションに常駐し、別のユーザーのプロファイルからは独立していること）。
- 異なる INI ファイルがエンドユーザープログラムを実行する各個人ユーザーに対して用意されていて、個別のプロファイル名を指定できる。

各ユーザーのワークステーションに適格なプロファイルが 1 つしかない場合は、この ProfileName 値は不要です。

[Select Mailbox] (メールボックスを選択) 画面の Outlook メールボックス

プログラムによって、選択した Outlook プロファイルで複数のメールボックスが検出された場合、[Select Mailbox] (メールボックスを選択) 画面が表示され、ターゲット メールボックスを指定するように求められます。選択したプロファイルでメールボックスが1つだけ検出された場合は、それが使用する正しいメールボックスと見なされるだけで、[Select Mailbox] (メールボックスを選択) 画面は表示されません。

エンドユーザー プログラムは [Select Mailbox] (メールボックスを選択) 画面をスキップするように設定できますが、その場合、選択した Outlook プロファイルに複数のメールボックスが関連づけられていれば、使用する正しいメールボックスをプログラムが識別できるようにする必要があります。ユーザーのターゲット メールボックスは、*notesdtapp.ini* に指定できます。

```
[General]
SelectedMailbox=<MailboxName>
```

ターゲット メールボックスを INI ファイルで指定するのは、次の場合に限定されます。

- その INI ファイルを持つプログラムを実行するすべてのユーザーが、同じメールボックス名を持っている (たとえば、「マイ メールボックス」など、一般的な一部の名前。ただし、各ユーザーのメールボックスは、ユーザーのローカル ワークステーションに常駐し、別のユーザーのメールボックスからは独立していること)。
- 異なる INI ファイルがエンドユーザー プログラムを実行する各個人ユーザーに対して用意されていて、個別のメールボックス名を指定できる。

ユーザーの Outlook プロファイルにメールボックスが1つしかない場合は、この *MailboxName* 値は不要です。

[Specify Directory for Migrated Archive] (移行するアーカイブのディレクトリ指定) 画面のアーカイブ先フォルダ

ユーザーの移行されるアーカイブのターゲットフォルダ (パス) は、*notesdtapp.ini* の [General] セクションで次のように指定できます。

```
[General]
SelectedPstDir=<path>
```

ここで、<パス> は、ユーザーのコンピュータに対する完全な相対 UNC パスです。

この値は、特定のプログラムの実行が必要な場合に、[Specify Directory for Migrated Archive] (移行済みアーカイブのディレクトリを指定) 画面で指定することもできます。

このパラメータのデフォルト値は、プログラムがオペレーティング環境から判別できる Outlook の既定のディレクトリです。したがって、このパラメータは、ユーザーの移行アーカイブを Outlook の既定のディレクトリ以外の場所に保存したい場合にのみ必要となります。

[Select Date and Size Filters] (日付とサイズのフィルタを選択) 画面のフィルタ条件

Self-Service Desktop Migrator を使用して移行するメッセージの日付の制限と範囲を指定し、特定の日付かその後 (またはその前) や、特定の日付の範囲内でタイムスタンプが押されたメッセージのみを移行できます。また、添付ファイルの最大サイズを指定することも可能です。このような日付とサイズのフィルタは、プログラム実行中に [Select Date and Size Filters] (日付とサイズのフィルタを選択) 画面で指定できますが、この画面はデフォルトで表示されないため (次のセクションを参照)、代わりに *notesdtapp.ini* の [Filter] セクションのパラメータ設定で定義することができます。

```
[Filter]
AttachSize=<####>
FirstDate=<mm/dd/yyyy>
LastDate=<mm/dd/yyyy>
```

AttachSize 値は数値 (キロバイト単位) です。2つの日付パラメータ値は、8桁で入力し、前述したようにスラッシュで区切って1桁の月または日付の場合は先頭にゼロを付けます。3つのパラメータのデフォルト値はすべて NULL であるため、フィルタは設定されません。

ユーザーに対して画面全体の非表示

Self-Service Desktop Migrator プログラムは、画面表示をカスタマイズして「サイレント」（エンドユーザーに対し非表示）にしたり、条件に応じてスキップしたり、プログラムがオペレーティング環境や notesdtapp.ini ファイルに必要な情報が見つけれられない場合のみ表示したりすることができます。各画面の表示オプションは、notesdtapp.ini ファイルの 3 つのパラメータのいずれかに設定できます。

- **show** : プログラムが実行されるたびに画面を表示します。
- **skip** : 操作環境または *notesdtapp.ini* ファイル内の他のパラメータから、プログラムが関連する情報を読み取れないか、推測できない場合にのみ画面が表示されます。
- **silent** : プログラムの実行時、常に画面が表示されません。代わりに、この画面で本来収集される情報は、他の *notesdtapp.ini* パラメータによって提供されるか、または操作環境から読み取られるか推測されます。プログラムが必要な情報を判別できない場合は、機能が失敗し、ユーザーが完全には移行されなくなります（このため、INI ファイルを修正して 1 つ以上の画面が「サイレント」に設定されている場合に、1 人のユーザーを移行すると失敗または不完全になる可能性があります）。

show、**skip**、または **silent** モードは、*notesdtapp.ini* の [Screens] セクションのパラメータ値を設定することで、10 個のプログラムそれぞれに適用できます。

パラメータ	画面名 (タイトルバー内)	デフォルト
Welcome=	Welcome	show
MigrateWhat=	Specify Data for Migration (移行するデータを指定)	show
SelectAddrBook=	Select Notes Address Books to Migrate (移行する Notes アドレス帳の選択)	show
SelectArchive=	Select Notes Archive Files to Migrate (移行する Notes アーカイブファイルの選択)	show
SelectMailFile=	Select Notes Local Mail File Replica to Migrate (移行する Notes ローカル メール ファイルのレプリカを選択)	show
Filter=	Select Date and Size Filters (日付とサイズのフィルタを選択)	no-op*
Profile=	Select Profile (プロファイルの選択)	skip
Mailbox=	Select Mailbox (メールボックスを選択)	skip
PstDir=	Specify Directory for Migrated Archive (移行済みアーカイブのディレクトリ指定)	show
Summary=	Selection Summary (選択の概要)	show
Progress=	Migrating Data (データの移行)	show
Finished=	Migration Report (移行レポート)	show

*no-op : 「silent」と同じ機能を果たしますが、実際は、パラメータ値が割り当てられないことを意味します。この場合、画面はプログラムの実行時に表示されません。

[SelectionSummary] (選択概要) 画面と [MigratingData] (データの移行) 画面の間で表示される)

[EnterPassword] (パスワードを入力) 画面の表示は、*notesdtapp.ini* で設定または変更できません。Outlook プロファイルの設定でログイン認証情報が必要な場合は、ユーザーの Exchange ログイン認証情報を求める Microsoft のプロンプトが表示されることがあります。この画面は必須であるため、プログラムを完全に「サイレント」で実行することはできません。他のすべての画面を silent モードにしても、Exchange ログイン認証情報を求めるプロンプトが表示される場合があります。

[Specify Data for Migration] (移行するデータを指定) 画面の特定のユーザー選択肢の非表示

[Specify Data for Migration] (移行するデータを指定) 画面のデフォルトの表示を使用し、ユーザーはサーバーメール、アーカイブ、個人アドレス帳 (PAB) の 3 つのタイプのデータを任意に組み合わせて移行することができます。ただし、1 つまたは 2 つのオプションだけを表示するように、管理者が設定している場合もあります。*notesdtapp.ini* の [General] セクションの 3 つのバイナリ パラメータによって、画面にこれらのオプションを表示するかどうかを制御することができます。

AppDoesArch=
AppDoesMail=
AppDoesPabs=

各パラメータのデフォルト値は 1 です。この場合、[Specify Data for Migration] (移行するデータを指定) 画面でユーザーに対応するオプションが表示されます。値を 0 に設定すると、次のようになります。

- 画面上で対象のオプションを非表示にする (ユーザーが使用できなくなります)。
- [Welcome] (ようこそ) 画面と [Migration Report] (移行レポート) 画面で、非表示のオプションに関連する部分を非表示にする。
- INI ファイルのその他のパラメータ設定にかかわらず、そのデータ タイプの移行を禁止する (つまり、MigrateXxxx=1 よりも優先されます)。

INI ファイルのパラメータが指定されていない場合は、*対応するオプションが画面に表示されません*。

これらのパラメータでは、対応するチェックボックスのオン / オフのステータスは設定されないでください。これらのステータスの設定は、別のパラメータ (前述した「notesdtapp.ini でのプログラム エントリ値の提供」を参照) で制御できます。

[Specify Data for Migration] (移行するデータを指定) 画面でこれら 3 つのオプションのうち 1 つだけを表示するようにプログラムを設定すると、単独のオプションがチェックボックスなしで表示されます。したがって、ユーザーがそのチェックボックスをオフにして、機能をオフにすることはできません。

例：アーカイブのみを移行する場合

この「... のカスタマイズ方法」のセクションの紹介では、ユーザーのサーバーメールとアドレス帳をバッチで移行する管理者の例と、Self-Service Desktop Migrator を使用してユーザーのアーカイブ (のみ) を移行する方法について説明しました。Desktop Migrator プログラムはアーカイブの移行だけに使用するため、管理者は、その他の移行オプション (サーバー メールと個人用アドレス帳) をユーザーから見えないようにして、残りのユーザー インターフェイスを簡素化し、ユーザーの注意を最小限にとどめたいと考えています。このような場合は notesdtapp.ini ファイルで、次のように設定します。

```
[General]
AppDoesMail=0
AppDoesPabs=0
MigrateArchives=1

[ArchiveData]
MigrateTrashFolder=1

[Screens]
Welcome=skip
MigrateWhat=skip
SelectAddrBook=skip
SelectArchive=skip
SelectMailFile=skip
Profile=skip
Mailbox=skip
PstDir=skip
Summary=skip
Progress=skip
Finished=show
```

これらのパラメータによって、SSDM は次のように実行されます。

- 1 **[Welcome] (ようこそ) 画面** : *Welcome=skip* に設定されており、ユーザー入力は要求されないため、表示されません。
- 2 **Specify Data for Migration (移行するデータを指定)** : *MigrateWhat=skip*、*AppDoesMail=0*、*AppDoesPabs=0* に設定されており、プログラムで必要なアーカイブ - 移行順序は *MigrateArchives=1* および *MigrateTrashFolder=1* から取得されるため、表示されません。
- 3 **Select Notes Address Books to Migrate (移行する Notes アドレス帳を選択)** : *SelectAddrBook=skip* および *AppDoesPabs=0* のため、表示されません。
- 4 **Select Notes Archive Files to Migrate (移行する Notes アーカイブ ファイルを選択)** : ユーザーのアーカイブがデフォルトの保管場所 (Notes データ ディレクトリの下にある「archive」サブディレクトリ) に存在している場合は、*SelectArchive=Skip* に設定されているため表示されません。その場合、アーカイブはデフォルトの保管場所で検索されます。
- 5 **Select Notes Local Mail File Replica to Migrate (移行する Notes ローカル メール ファイルのレプリカを選択)** : *SelectMailFile=skip* および *AppDoesMail=0* のため、表示されません。
- 6 **Select Profile (プロファイルを選択)** : ユーザーのワークステーション上で検出された適格な Outlook プロファイルが 1 つだけの場合は、表示されません。それ以外の場合は、ユーザーにプロファイル指定を求めるプロンプトを表示する必要があります。

- 7 *Specify Directory for Migrated Archive (移行済みアーカイブのディレクトリを指定)* : Outlook のデフォルトのディレクトリが各ユーザーの推奨アーカイブ先フォルダであると見なされて、表示されません (アーカイブ先を変更する場合は、[General] の下の *SelectedPstDir* で有効なパスを指定するか、*PstDir=skip* を *PstDir=show* に変更します)。
- 8 *Selection Summary (選択の概要)* : *Summary=skip* に設定されており、ユーザー入力は要求されないため、表示されません。
- 9 *Enter Password (パスワードを入力) (Exchange 用)* : ユーザーのプロファイルにおける認証情報の必要性に応じて、ユーザーごとに表示されたり、されなかったりします。
- 10 *Migrating Data (データを移行)* : *Progress=skip* に設定されており、ユーザー入力は要求されないため、表示されません。
- 11 *Migration Report (移行レポート)* : *Finished=show* に設定されているため、各実行時に表示されます。

したがって、画面をスキップして省略し、前述した項目 4、6、7 に記した前提に従う場合、プログラムの画面順序は次のようになります。

- 1 *Enter Password (パスワードを入力) (Exchange 用)* : ユーザーのプロファイルにおける認証情報の必要性に応じて、ユーザーごとに表示されたり、されなかったりします。
- 2 *Migration Report (移行レポート)* : *Finished=show* に設定されているため、各プログラムの実行時に表示されます。

Quest は、お客様の声に耳を傾け、お客様の信頼に応えて、価値ある革新的なテクノロジー、ビジネス ソリューションおよびサービスを世界中に提供しています。詳細については、「www.quest.com」を参照してください。

Quest へのお問い合わせ

販売またはその他のお問い合わせは、「<http://quest.com/company/contact-us.aspx>」を参照するか、1-949-754-8000 までお電話ください。

テクニカルサポートリソース

テクニカル サポートは、有効な保守契約が付属する Quest ソフトウェアを購入している場合、または試用版を保有している場合にご利用いただけます。サポートポータルを利用するには、「<https://support.quest.com>」にアクセスします。

サポートポータルには、問題を自主的にすばやく解決するために使用できるセルフヘルプツールがあり、24 時間 365 日ご利用いただけます。また、ポータルでは、オンライン サービス リクエスト システムを使用して、製品サポート エンジニアに直接連絡することもできます。

サイトでは次のことを実行できます。

- サービス リクエスト（ケース）の作成、アップデート、および管理
- ナレッジベース記事の参照
- 製品に関するお知らせの入手
- 入門ビデオの閲覧
- コミュニティ ディスカッションへの参加
- サポート エンジニアとのチャット

A

Active Directory, 7
 移行前状態, 7
 ローカル (Office 365 のプロビジョニング)
 移行前状態, 7
 Active Directory サーバー, 設定, 20, 40
 Active Directory の設定, リソース フォレストとユーザー フォレスト, 26
 Active Mail 処理, 62
 ActiveMail.ntf ファイル, 62
 ActiveMailAttachmentName パラメータ, 63
 ActiveMailNotificationMessage.txt ファイル, 63
 ActiveMailNotificationMessagePath パラメータ, 63
 ActiveMailTemplatePath パラメータ, 62
 ActiveMailTypes パラメータ, 63
 AdAttribute 列, SQL Server データベース, 27
 AddressTranslation.bin, 61
 AdSearchCol 列, SQL Server データベース, 27
 AD 内の連絡先とセキュリティ オブジェクトのマージ, 30, 50
 AD の重複オブジェクト, 29, 50
 AppDoesArch パラメータ, 69
 AppDoesMail パラメータ, 69
 AppDoesPabs パラメータ, 69
 App-V、SSDM と一緒に実行, 62
 App-V (SSDM と一緒に実行), 62
 ArchiveDestServerArchive パラメータ, 66
 ArchiveDest パラメータ, 63, 66
 AttachSize パラメータ, 68
 attrr.tsv ファイル, 22, 45

C

CAS ポリシー, エンド ユーザーのワークステーションで追加, 61
 CMN, 31, 52
 共存の設定, 25
 CMN Directory Connector の MNE Compatability Mode, 25
 Coexistence Manager for Notes, 31, 52
 共存の設定, 25
 Collection Wizard, 27, 34, 49, 56
 Common application directory フィールド, 61

customattrr.tsv ファイル, 22, 44

D

Data Locator Wizard, 30, 51
 Data Migration Wizard, 34, 35, 57
 dbcache flush コマンド, 35, 57
 desktop migrator, 60
 Directory Export Wizard, 26, 48
 Domino サーバー, 設定, 20, 40
 Domino ディレクトリ データ, エクスポート, 26, 48

E

Edit Default Settings, Notes Migration Manager, 20, 40
 Error Log Report ボタン、非表示, 64
 Exchange 2010 以降、調整ポリシー, 25
 Exchange サーバー, 設定, 20, 40
 Exchange メールボックス, 作成, 9, 26, 29

F

Filter パラメータ, 69
 Finished パラメータ, 69
 FirstDate パラメータ, 68

G

Global Default の設定, 26

I

IdleConnectionTimeoutSeconds= パラメータ, 44
 ID フェデレーションとシングル サインオン, 7
 Internet Domains Discovery Wizard, 26, 48

L

LastDate パラメータ, 68

M

Mailbox パラメータ, 69
 Manage Scheduled Operations, Notes Migration Manager, 21, 40
 MAPIErrorsToRetry= パラメータ, 42
 MAPIRetryWait= パラメータ, 42
 MAPI エラー再試行機能, 42
 MAPI プロパティ, 23, 46

MaxPowerShellConnections= パラメータ , 44
MessageRetryCount= パラメータ , 42
MfcMapi.exe ユーティリティ , 23, 46
MigrateActiveMail パラメータ , 62
MigrateArchives パラメータ , 66, 67
MigratePAB パラメータ , 66, 67
MigrateServerMail パラメータ , 66, 67
MigrateTrashFolder パラメータ , 67
MigrateWhat パラメータ , 69
MNE シナリオ
 定義 , 7

N

NABs Discovery Wizard, 26
Net Framework バージョン , 61
Notes Data Locator Wizard, 30, 51
notesdtapp.ini ファイル , 61, 62, 65, 66, 67
notesdtapp コマンド用の notesID コマンドライン スイッチ , 66
notesdtapp コマンド用の notespass コマンドライン スイッチ , 66
notesdtapp コマンド用の silent コマンドライン スイッチ , 66
notesdtapp コマンド用の tgtdomain コマンドライン スイッチ , 66
notesdtapp コマンド用の tgtmsgstore コマンドライン スイッチ , 66
notesdtapp コマンド用の tgtpass コマンドライン スイッチ , 66
notesdtapp コマンド用の tgtprofile コマンドライン スイッチ , 66
notesdtapp コマンド用の tgtuser コマンドライン スイッチ , 66
Notes カスタム属性 , 移行 , 22, 44

O

Office 365
 移行前準備 , 18
 ホスト型 Exchange ターゲット , 7
Office 365 Wave 15
 MNE の設定 , 44
Office 365 Wave 15 での PowerShell 実行空間調整 , 44
Office 365 Wave 15 での実行空間 (PowerShell) 調整 , 44
Outlook 仮想アプリケーション パッケージ、SSDM と一緒に実行 , 62
Outlook プロファイル , 67

P

PABDest パラメータ , 63
Profile パラメータ , 69

Progress パラメータ , 69
Provisioning Wizard, 30, 50
pst files, 命名 , 35, 57
PstDir パラメータ , 69
pst ファイル , (移行後の) 配布 , 35, 57
pst ファイル , 移行先 , 35, 57, 68
pst ファイル , 保管場所 , 35, 57

Q

qcalcon.exe, 25
Quest CMN
 共存の設定 , 25

S

SelectAddrBook パラメータ , 69
SelectArchive パラメータ , 69
SelectedMailbox パラメータ , 68
SelectedProfile パラメータ , 67
SelectedPstDir パラメータ , 68
SelectMailFile パラメータ , 69
Self-Service Desktop Migrator, 60
 エンド ユーザー通信 , 61
 エンド ユーザーに対して画面を非表示 , 65
 およびウイルス対策ソフトウェア , 61
 カスタマイズ , 61, 62, 65
 コマンドライン スイッチ , 65
 サイレント モード , 65
 準備 , 60
 スケジュール設定 , 65
 調整 , 65
 配布 , 61
Self-Service Desktop Migrator, カスタマイズ , 65
Self-Service Desktop Migrator, 収集される統計データ , 65
ServerMailDest パラメータ , 63
Shared Directories Configuration, Notes Migration Manager, 20, 40
ShowSSDMErrrorLogButton パラメーター , 65
SMTP メール ルーティング , 24, 46
 メールの共存 , 25
SQL Server データベース , 更新 , 32, 55, 60
SQL Server の設定 , 20, 40
SSDM, 60
 App-V と一緒に実行 , 62
 エンド ユーザー通信 , 61
 エンド ユーザーに対して画面を非表示 , 65
 およびウイルス対策ソフトウェア , 61
 カスタマイズ , 61, 62, 65
 コマンドライン スイッチ , 65
 サイレント モード , 65

- 準備, 60
- スケジュール設定, 65
- 調整, 65
- 配布, 61

- SSDM Throttling Utility, 65
- SSDM 移行, 60
- SSDM からの統計データ, 65
- SSDM でエンド ユーザーに対して画面を非表示, 65
- SSDM 統計, 65
- SSDM のカスタマイズ, 61, 62, 65
- SSDM のスケジュール設定と調整, 65
- Summary パラメータ, 69

T

- Throttling Utility, SSDM, 65

V

- View Summaries, Notes Migration Manager, 30, 33, 51, 55

W

- Wave 15
 - MNE の設定, 44
- Welcome パラメータ, 69

あ

- 空き時間情報サーバー, 25
- 宛先、移行, 7

い

- 移行エラー再試行機能, 42
- 移行先, 7
- 移行シナリオ
 - 定義, 7
- 移行するメッセージの日付制限, 68
- 移行統計データ, 65
- 移行のターゲット タイプ, 7
- 一時サブドメインの受信者ポリシー, 24

う

- ウイルス対策ソフトウェア (エンド ユーザーの SSDM ワークステーション), 61

え

- エラー再試行機能, 42
- エンド ユーザーに対して画面表示要素の非表示, 65, 69
- エンド ユーザーに対して画面を非表示, 65, 69
- エンド ユーザーに表示されるデフォルト値の設定, 67

- エンド ユーザーの SSDM ワークステーションのウィルス対策ソフトウェア, 61
- エンド ユーザーのトレーニングとコミュニケーション, 61

か

- カスタマイズ, Self-Service Desktop Migrator, 65
- カスタム Notes 属性, 移行, 22, 44
- カスタム属性, 移行, 22, 44
- 管理ワークステーションのウィルス対策ソフトウェア, 20, 40

き

- 共存方針、設定, 25

こ

- 更新, SQL Server データベース, 32, 55, 60
- コレクション, 移行のスケジュール設定, 48, 55
- コレクション, グループ化メソッド, 27, 48, 55
- コレクション, サイズ, 27, 48, 55
- コレクション, 作成, 27, 49

さ

- サイレント モード操作, Self-Service Desktop Migrator, 65

し

- シナリオ
 - 定義, 7
- シングル サインオンと ID フェデレーション, 7

す

- スケジュール設定と調整 (SSDM 用), 65
- ステータス, プロジェクト, 65

そ

- ソースおよびターゲット環境へのアクセス権限, 20, 38
- ソース データ, ファイル システムによるアクセス, 35, 57

た

- ターゲット タイプ (移行の), 7

ち

- 調整とスケジュール設定 (SSDM 用), 65
- 調整ポリシー、Exchange 2010 以降, 25

て

- データの移行先 (Exchange 内), 63
- データ量, 30, 51

ディレクトリ更新, 32, 55, 60
デスクトップ移行, 60
デスクトップごとの移行, 60

と

同期, ディレクトリ, 60
統計データ, 65
独自型 Exchange
 移行前準備, 18
 定義, 7
独自型 Exchange と Office 365 の移行前準備, 18
独自型ローカル Active Directory の移行前状態
 シナリオ決定の要因, 18
独自型ローカル Exchange ネットワーク
 移行先として, 18
 定義, 18

ふ

ファイルシステムによるアクセス, ソース データへ,
35, 57
フィルタ設定オプション, 68
プログラムパラメーター, 26
プロジェクト統計データ, 65
プロジェクトのステータス, 65

ほ

ホスト型 Exchange
 定義, 7

め

メール転送ルール, 設定と削除, 35
メールボックスの有効化, 26
メール有効 メールボックス有効、定義, 18

ゆ

ユーザー コレクション, 27, 48, 55
ユーザー トレーニングとコミュニケーション, 61
ユーザー フォレスト, 26

り

リソース フォレスト, 26
量, データ, 30, 51